
深淵の王

石榴石 歩馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深淵の王

【Zコード】

N5471C

【作者名】

石榴石 歩馬

【あらすじ】

呪術師である煉賀美咲と煉賀鳴海は、春休みのある夜、怪異に襲われたところを一人の青年に助けられた。そして、この出会いから彼らの物語は大きく動き出す。《現在更新停止中》

プロローグ

一人の人物のとある会話

「お、リヴァーじゃんか。どうしたんだ？」

「……リヴァーと呼ぶな、と以前言わなかつたか？」

「ああすまん。で、どうした？ サつき本部に呼び出されてたのに
関係あるのか、リヴァー？」

「……大有りだ。『協会』への正式な依頼があつて、『派遣』され
ることになつた」

「派遣か……。にしては嫌そつだな。確かに前に『派遣はいろいろな
場所に行けるから好きだ』つつてなかつたつけ

「相手が嫌、というか面倒だ」

「どこのなんだ？」

「……呪術師の煉賀家」

「煉賀！？ そりやまたすげえとこじゃねえか。何がヤなんだよ」
「個人的に知り合いでだからだ」

「……へえ、それはご大層なことで」

「……それに、本当は探知能力が高い風陣が行くはずだつたらしい
『風陣術師か……。確か協会所属のは全員出払つてるな』

「その通り。だから風術が使える術師、しかも手が空いてるから、
と僕が選ばれたんだそうだ。……嫌だとあれほど言つたのに
「それはご愁傷さま。

「じゃあオレも仕事だから、お互いがんばりうづせ」

「ああ、生きてたらまた会おう」

「誰が死ぬかつての！」

「アンタが、とは言つていない」

「リヴァー、それはお前が言つていいセリフじゃないぞ……」

「だからワガアと呼ぶなと……」

「まあいいじゃん、これくらい。じゃなー。」

「逃げるなー…………ねつ、逃げ足だけは速いな。…………まあ、一度い
い……」

因果の糸を、絶ちにに行くとしよう。

一人の人物が去ると、そこには静寂だけが残された。

プロローグ（後書き）

（気まぐれに更新します。よかつたらお付きあこころを）。

深夜、町外れの古びた神社に一つの人影があった。

一人は高校生らしき少女。少しくせのある、ひとつに束ねた長く茶色がかつた黒髪を風に揺らし、境内から鳥居の辺りをじっと見据えている。

もう一人は少女と同い年くらいの少年。日に焼けた肌、短く刈つた髪と見るからにスポーツマンといった風情だ。手に棒状のものを持った彼も少女と同様に鳥居を見て、というより睨んでいた。

二人は何があつてもすぐ動けるように各自が立ち回りやすい場所に佇んでいるし、似たような仕事は何度もこなしている。が、それで軽い緊張は否めないようだった。

そんな一人の周りを夜風が緩やかに踊つていく。

（やつぱり探知系の術が使えないと不便ね……。いつまでここで待たなきやいけないんだろ）

緩くウェーブを描く髪を搔き揚げながら、れんかみさき 煉賀美咲は丹塗りの鳥居を監視していた。今夜の仕事はこれで終わりだが、よりによつて現在最も面倒なものが残つていたのだ。

それは“むこう” 俗にあの世や靈界、黄泉などと呼ばれている世界と“こちら”、つまりこの世が繋がる“歪み”を封じる、といふことなのだが、厄介なことにこの“歪み”というやつは視認できないと封じられない。

つまり“歪み”が発生するまでその予定地を監視し続けなければならぬのだ。

だが普段そんな面倒なことをしていたら手遅れになる場所が出てきてしまう。そうならないために、いつもは事前に探知術で正確な発

生時刻を調べてもらつていいのだが……

「やつぱり旭さんがないと大変ですね」

同じことを考えていたらしく、自分より鳥居に近い場所に立つ煉賀

鳴海が呟いた。

呪術師の家系にありながら珍しく近接戦闘を得意とする彼は、大太刀をいつでも抜けるように手をかけている。

だが、いつもと違つていつ“歪み”が発生するかわからないからか、額にうつすらと汗がにじんでいた。

旭というのは美咲の叔父で、煉賀の情報面の一切を取り仕切る人物だ。そして“歪み”的探知のほぼ全ても彼が行なつていて。だが彼は先日起こつた事件の際に怪我を負い、現在は病院で療養中。そのため今の煉賀には探知術を使える者がほとんどおらず（探知術はかなりの実力がなければ会得できない）、こうして後手に回らざるを得なくなつていた。

（お義父さんは代理を‘協会’から寄越してもらひつて言つてたけど、そんなやつ信用できるのかな？）

実のところ、美咲は‘協会’、正式名‘術師支援協会’を好ましく思っていない。そしてそれは鳴海を含むほぼ全員の煉賀家の呪術師が同じように考えている。

‘協会’といえば聞こえは良いが、実際はどこにも所属していない、いわゆるフリーの術師を登録し、仕事を斡旋するという機関だ。世界中に支部があり、様々な能力を持つた術師が登録されているが、所属がない術師はつまり煉賀のような一族から追われた術師や独学で能力を得た者であるため、あまりよい評判がないのだ。

だが質が高いことは確かで、今回のように特定の能力が必要な場合は特に頼りにはなる。

それでも好感が持てないのは、今まで‘協会’から派遣された人物にろくなやつがいなかつたからだろう。

以前の数人の行動を思い出し、美咲は頭を抱えた。

とにかく、‘協会’のやつは信用できない。

ピシリ、とひび割れる音が聞こえた。

「 来た！」

美咲が叫ぶと同時に鳴海が太刀を抜くと、抜き身の刃が月光を映して煌めいた。

それに呼応するかのようにピシ、ピシという音が大きくなつていく。やがて窓ガラスが割れるように、鳥居を門として空間にヒビが入り歪んで割れた。

出現した“歪み”から犬らしき姿の異形が一匹飛び出し、鳴海に襲いかかる。

「鳴海、いつも通り足止めお願ひ！“歪み”を封じるわよー。」

「了解、です！」

“歪み”は「」ちらに出た異形が倒されるたびに新たな異形を吐き出す。なので“歪み”を封じるまで異形を倒してはならないのだ。鳴海は太刀を器用に扱い異形を翻弄している。今のうちに封じなければ。

右手の人差し指と中指を重ねて剣印をつくり呪力を集め、鳥居と直線に並ぶようにして構えて空を薙いでいく。

「我が地に災い為すモノよ　」

右下に一閃。

「汝此処に留まることを赦さず　」

左上に一閃。

「其処より戻り還り給え　」

右真横に一閃。

「此岸に渡ること叶わず　」

左下に一閃。

「彼岸の果てにて朽ち去り給え　」

右上に一閃。

そして呪力で描いた五方星が完成し、

「これにて因果は成った。汝在るべき処へ還りて終結と為す」

剣印を大きく振り下ろすと、“歪み”は砂のように砕け散り消え去つた。

異形の獣を相手していた鳴海は、横目で美咲が“歪み”を封じたのを確認すると、大きく一步後ろにとんだ。

さつきまで自分がいたところを鋭い爪が廻ぎはらつていく。だが鳴海の頭はそれとは別のことを考えていた。

先程の美咲の“歪み”の封印方法、あれは最も手っ取り早く道具も使わず封じることができるのだが、簡単に見えてかなりの呪力量と集中力を必要とする。つまりそれを何ともなさげに実行できる彼女の実力は、煉賀一族でもかなり上位に入る。

美咲の補佐として共に行動するようになつてはや二年。同じ年であるにもかかわらずその力を悠々と扱う彼女は、当主の娘ということに関係なく自分の憧れだ。

ビュツ、という風切り音が耳元で聞こえ、現実は引き戻される。異形の爪が頭ぎりぎりを通りついたのだ。そう、今は戦いだ。油断は許されない。

同時に一匹の異形が飛びかかつてくる。

一瞬の迷いもなく右に跳ぶと右側の異形が向き変えてきた。予想通り。

大太刀で正面から迎えうつ。刃をむいている頭部を撥ね飛ばし、身体は二つに切り裂く。

生物であれば赤い血が撒き散らされるとこりだが、異形から出た血は黒く濁んでおり影のようだ。

背後からきたもう一匹に回し蹴りを喰らわし、ぶち跳ばす。

ギヤアア、と耳障りな鳴き声をだして地面に叩きつけられた異形に近づき垂直に太刀を突き立てると、わずかに痙攣したあと動かなくなつた。

大太刀を抜き、付いた血を払うため一振りする間に異形は夜闇に溶けるように消え去つていた。もちろん血のあとなどついてはいない。

「「」苦労さま」

美咲が近寄つて来ながら労いの言葉をかけてくる。

「いえ、美咲さんこそ。いつもながら素晴らしい腕前です」

「そんなことないよ」

本心なのだが、彼女はお世辞と受け取つたようだ。

「それにいつも言つてるけど、私に敬語はやめてつてば。なんか
むず痒いんだ」

「でもこれは癖ですから。つと、そういうば美咲さん。さつきの異
形、なんかいつもより弱かつたんですけど……」

「弱かつた？鳴海が強くなつたんじゃなくて？」

「はい」

「そつか……」

そう言つて腕を組んで立ち止まつた美咲の背後に、大きな黒い影が
見えた。

とつさに叫ぶ。

「美咲さん危ないっ！…！」

「え？」

彼女が振り返る。だが、
(間に合わない！)

ザシユリ、と歎な音が響いた。

「美咲さん危ないっ！」

「え？」

思考に没頭していると、突然鳴海が叫んだ。

弾けるように振り返ると、そこには自分の数倍はあるであろう巨大な影。そしてそれは全体に比例して大きな爪を美咲の頭上に振り下ろしてきていた。

とつさに腕を交差させ頭を庇
ザシユリ、と厭な音が響いた。

頭上から粘性のある液体が垂れてきた。どうやら頭に傷はないようだ。おそらく両腕は使い物にならなくなっているだろうが。
(？、痛く、ない？)

ふと、痛みがまったくないことに気づいた。
神経まで駄目になつたのだろうか、そう思い無意識に閉じていた目をゆっくり開ける。

腕には大量の黒い液体が附着していた。だが両腕のどこにも傷など存在していない。

視線をわずかに上に向けると、鋭く光る爪がすぐそこにあった。

「ひやっ！」

驚き飛び立たるが、影は動く気配がない。

少し下がつたことによつて影が異形、しかも大きな熊を模したものであろうとわかつた。

だが、それには本来あるべきものが欠けていた。

「何これ……頭がない」

そう、その異形の頭部と思われる場所には何もなく、ただ赤黒い切
断面が覗いているだけだった。

辺りを見回すと少し離れた地面に半分以上消えかかっている黒い塊が落ちていた。おそらくあれがそうなのだろう。

「だ、大丈夫ですか美咲さ……」

「動くなっ……！」

鳴海が我に返り駆け寄ろうとすると、それを制する声があった。もちろん美咲ではない。そもそも結界が貼っているはずのこの神社に二人以外の人物がいるはずがない。

（でも、この声どこかで……？）

心地よい響きを持った声に懐かしさを覚え、美咲は自然と声のした方向へと向き直っていた。

だが

そこにいた声の主であのひつ男性、いや青年はこじらにむかって抜き身の刀を構えていた。

「え

唇の端から思わず声が漏れる。それと重なるように青年が叫んだ。ただ、

「屈め」と一言。

とつさに腰を折り前のめりに倒れ込む。いきなり現れた人物の言つことを聞いてしまったのには正直自分でも驚いた。

でも、何故かそうしなければならないと思つたのだ。彼の言つことは信頼できる、と。

（彼に似てる……）

そこであることに気づく。

青年にかつての幼馴染みの姿を重ねているということ。

「絢文……」

呴いた声は轟音に掩き消された。

「絢文……」

轟音に搔き消されるよりほんの一瞬だけ速く、その咳きは鳴海の元へと届いていた。

聞こえたのは、鳴海にとつて好ましいものではない人物の名だつた。幼い頃に両親を亡くした美咲は、伯父であり煉賀家当主である絢斗の養子となつた。

当主には息子が一人だけいた。その息子の名前こそ絢文といい、美咲の幼馴染みにして義兄の少年だつた。

だが彼は生まれつき身体が弱く、呪力を扱うことに耐えられなかつたため独学でほかの術を学んでいたらしい。

らしい、というのはその時には自分は別の家に修行に出されていたため後から聞いた話だからだ。

そして、六年前の春。12歳のときに彼は行方不明になつた。

煉賀家から追放されたらしいのだが、追放された理由はわからない。美咲は知つているらしいが、聞くつもりはない。なぜなら、彼女は絢文がいなくなつた原因が自分にあると考えているふしがあるからだ。

その話をするときの美咲はとても辛そうだし、何より彼女にそんな想いをさせている絢文というやつが気にくわない。

なので先程美咲がその名を口にした直後、鳴海はその咳きを向けられた黒い帽子とコートの青年を睨もうとしたが、同時に起こつた轟音に気を取られた。

音の発生源はどうやら残されていた異形の肉体のようだつた。それがあつたはずの場所を中心とし、半径約一メートルが石置ごと吹き飛ばされている。

ふと、おかしなことに気づいた。

あれだけの音を出した割には被害が少なすぎやしないだらうか。

よく見ると、吹き飛んだ地面の上に一振りの刀が落ちている。それが今までの青年が構えていた刀だ。

間違いない。彼が何かしたのだ。おそらく先に異形の頭を飛ばしたのも彼だろう。

青年は何事もなかつたかのようこそここに近づき刀を拾い上げると、黒塗りの鞘に収めた。

青色の飾りが静かに揺れている。

「あっ、あのっ！助けて頂いてありがとうございました！」

我に返つたらしい美咲が慌てて礼を言つと、青年はふ、と笑つた。
「別に俺は何もしない。……ひとつだけ忠告しよう。最近はさつきみたいな不確定要素が増えてる。気をつけろよ」
何もしていなはずはないのに、そう言つて彼は踵を返す。鳴海は急いで彼に問いかけた。

「ちょっと待つて下さい！貴方はいつたい…」

「慌てるな。すぐまた会つ」

一度も振り返らず、青年はそのまま立ち去つていった。

1 5 選迺（後書き）

読んでください。ありがとうございます。

翌朝。

結局、あの青年が何者かはわからずじまいだった。

彼が去つたあと家に帰つた美咲たちは、当主や情報部の人には彼のことを聞いて回つたのだが、誰も知らないと言つていた。

そもそも、顔は帽子で隠れてほとんど見えていなかつたし、服も黒いコートだということしか知らないのだから当たり前のことだつたのだろう。黒塗りの鞘の刀だつていくらでもある。

義父は話を聞いたあとに探し出して礼をすると言つていたから、そう時間がたたないうちに見つかるだらう。

少し矛盾するが、はつきり言つて煉賀の情報網はかなり広く、さらに深い。先のように青年のことが何一つわからなかつたのがおかしいくらいなのだ。

「美咲さん」

あるいはあの青年が、その情報網をすり抜けるだけの実力を持つているということなのか。

「美咲さん！」

もしそうだとしたら彼の力は如何なるものなのか。自慢できるほどではないが、それなりに強い自分と鳴海が反応されできなかつたとなると

「みー わー もー さんつ ……」

「べしいつ ……」

「ぐきや！？」

突然頭に衝撃が走り、美咲は変な声をあげて飛び起きた。

「いつたあ～」

はたかれた部分をさすりながら顔を上げると、鳴海が呆れた表情でこちらを見あおしていた。右手には丸めた新聞紙を持つていて、「やつと田が覚めましたか

溜め息混じりに発せられた台詞は聞き逃せないものだつた。

「やつと、つて何よーちゃんと起きてましたー。考え方してただけですー」

「よだれ垂れていますよ」

「嘘つー」

慌てて口元に手をやる。

「はー、嘘です」

ピシッ、と美咲の動きが止まつた。

（はめられた……）

「寝てたんですね？」

「……はー」

「だつたら早く動いて下さー」

やれやれと首を振る鳴海。口で彼に勝てたことはない。
せめてもと一言だけ言い返す。

「鳴海くん、レディーの部屋に入るなんていやりしー。お姉ちゃん悲しいわ」

はあー、と彼は盛大な溜め息をついた。

「何言つてるんですか。ソーリングですよ」

「あ

そうだつた、昨日は予想より帰るのが遅くなつたから、報告が終わつてすぐに眠くなつてリビングのソファーで寝たんだつた。

「あと誰が姉ですか。美咲さんは従姉妹だし、まず同じ年でしじう完璧に言い負けたうえに、冗談さえもが追い討ちとなつて返つてき

た。

完全敗北。

それが今朝の始まりの言葉だつた。

着替えを済ましたあと、美咲は鳴海と並んで廊下を歩いていた。

「当主さまが呼ばれていますよ」

あのあと、そう鳴海が告げたからだ。

「お義父さんが？」

聞き返すと彼は首肯した。美咲を起こしに来たのはそのためだつたらしい。

伝統的な日本家屋の、広い庭に面した長い廊下を一人は無言で歩く。洋風に改築された居住空間のリビングやキッチンとは違い、呪術師としての煉賀家の本部にもなつてゐるこちら側には何となく厳かな雰囲気が漂つており、いつも気後れしてしまつのだ。

どちらも一言も発することなく当主の部屋の前にいくと障子戸の手前に着物姿の女性が一人座つており、中に聞き耳を立てていた。部屋を覗くと拳動不審な行動をとつてゐる女性に美咲は声をかける。

「揚羽さん？ 何やつてるんですか？」

びくつ！ と女性 南雲揚羽は肩を震わせた。

彼女は当主の遠い親戚にあたり、その補佐、いわゆる秘書のような役職に就いていて、情報部では叔父の旭に次いでノ。・2を誇る人物である。

性格は明朗快活で、誰にでも別け隔てなく接するため、養子とはいえ当主の娘である美咲にも普通に話しかけてくれる数少ない者たちの一人だ。

揚羽は声をかけたのが美咲といつては氣づくとあからさまにまくとしたようだつた。

「あら、美咲ちゃんに鳴海くん。おはよう」
おはようございます、と返した一人に屈むように手招きすると、彼女は小声でさつきの行動の理由らしきものを話し始めた。

「今ね、お客様がいらっしゃってるの」

「はあ」

美咲が生返事を返す。はつきり言つてあまり興味はない。
だが鳴海はあることに気づいたようだ。

「あれ、でも俺と美咲さんは当主に呼ばれてきたんですけれど……」

つられて小声で尋ねる彼に、揚羽は微笑んだ。

「ええ、一人が呼ばれてるのに違ひはないわ」

「なぜわかるんですか？」

「わたしが呼んだから。……というのは冗談で、今いるお客様は、
協会の方なんだけれど、あなたたち一人と年が近いみたいなのよ。
だから一人がお客様の補佐として選ばれるんじゃないかな、ってね」「
協会」という言葉が彼女の口から出たとき、美咲と鳴海はそろつ
て嫌そうな顔になった。

さらに補佐にされるかもしれないとあつてはなおさらである。

二人が何か言おうとしたとき、すぐそここの部屋の中から声が飛んで
きた。

「南雲、誰か来たのか

あやと

厳格な声　　当主・絢斗のものである。

「はい。美咲さまと鳴海さまが参られました」
瞬きするうちに着物の裾を正し、なおかつピシリと正座し直すとい
う早業を行なつた揚羽に一人は呆気に取られ、その間に彼女は報告
を終えていた。

再び中から声が聞こえてくる。

「そうか、なら入れ」

「失礼します」

揚羽は一礼し、音もなく障子戸を開いた。

『早く準備して』

戸に手をかけるときに口だけを動かして彼女は美咲たちに告げる。
慌てた一人だつたが戸が開く寸前に何とか姿勢を正し終わり、開く
と同時に深々と頭を下げた。

先に美咲が口を開く。

「煉賀家が一人。呪術師煉賀美咲、当主の命により参りました」

「同じく煉賀家が一人。呪術師煉賀鳴海、参りました」

続けて鳴海が同様のことを告げると、一拍置いてようやく声がかか
つた。

「二人共、顔を上げなさい」

「「はい」」

言われたとおりに顔を上げると、正面右側に鋭い目付きの厳格そ
うな男性、左側には揚羽が言つていた、お客様、であろう人物が座つ
ていた。

厳格そうな男性は言つまでもなく当主・煉賀絢斗である。

「既に知つていいだろ？ がこれらは私の娘と甥にあたる者だ」
一瞬二人は当主が何を言つてているのかわからなかつた。いつもと違
う不自然な言い回しであるような気がしたのだ。

それを尋ねる前に、お客様、がこちらを向き、そして妙に耳に心地

よく響く声で言つた。

「はじめまして。‘協会’から参りました、水流術師・睦月綾といいます。綾とお呼び下さい」

実を言つと、綾と名乗った人物が男性であると完璧に判断できたのはその声のおかげだつた。

中性的な顔立ちに切れ長の目、細身の身体。さらに墨色の髪は美咲より長く（…）、古風な髪留めで結われていたため一見すると美女のようにも見えたからだ。

そこであれ、と思う。

（この声どこかで聞いたような……）

かといって、協会、に知り合いなんていははずがない。気のせいだろうと納得しかけた矢先　正座した彼の足元に、一振りの刀が置かれているのが視界に入った。

黒塗りの鞘に青色の飾り。最近見たような気がする。

聞き覚えのある声に見覚えのある刀。その二つから考えると……

「ああ　つー！」

気づいた瞬間、美咲は大声をあげて立ち上がつていた。

至近距離でその声を聞いた鳴海が耳を押さえながら声を荒げる。

「どうしたんですかいきなり！」

「さつ、昨日の…」

そこで思い出したらしく、鳴海がはつとした表情になつた。

「昨日の変な人…！」

その言葉に鳴海は器用に頭を置にぶつけ、
言われた本人はただ苦笑した。

「ほひ、昨日美咲が言っていたのは綾のことだつたのか
そう言いながらも当主は特に驚いた様子ではない。

「いいえ」

だがそれを本人はきつぱり否定した。

何いつてんだコイツ、という表情の美咲と鳴海をにこやかに無視し、
さらには

「私にそんな大層なことはできませんよ」とのたまつた。

「ちょっとま
「

「そうか」

いい加減なことを言つ綾に鳴海が文句を言おつとするのを遮るより
に、当主は納得の相づちを打つ。驚いた美咲が抗議の声を上げた。

「お義父さん？！」

「本人がそう言つてゐるのだから違うのだろう。

それより、お前たち一人に任務を与える。綾がいこいこする間、その
補佐をすること。これは決定事項だ、拒否は許さん」

当主の綾に対する様子に疑問を感じながらも、有無を言わせぬその
口調に反論することなどできず、一人はしづしづと、だがはつきり
了承する。

「煉賀美咲、了解しました」

「煉賀鳴海、同じく了解」

「それではよろしくお願ひしますね、美咲さんに鳴海さん」

綾がにっこりと笑いつつ、完璧な動きで一礼した。

あのあと、そろそろ拠点とするホテルに戻るという綾の道案内に強
制的にかりだされた美咲と鳴海は、はつきり言つて困つていた。
綾をどう扱うべきか決めかねていたのである。

今までの、協会、所属の術師たちは何かが根本的に違つ氣がするし、年も近いらしい。

そのためか、どうしてもうまく話しかけることができないのだ。しばらくして、美咲が決心したように口を開いた。

「綾さんは」

「敬語使わなくていいですよ」

いきなり出鼻をくじかれた。だがこれで話が続けられそうだと判断したのか、彼女は続けて話しかける。

「いいんですか？」

「ええ、実を言うと敬語使われるの苦手なんです」

「わかり、ううん、わかつたよ綾。じゃあさ、綾も敬語やめてくれる？ホント言うと、私もあんまり好きじゃないのよ」

「なんでそこで俺を見るんです？」

鳴海が抗議すると、美咲はニヤリと笑った。

「だつて何回言つても敬語やめないから」

「だからこれは癖で」

「それも何度も聞いた！」

「そう言われても……つて綾、さんざんどうかしましたか？」

微笑を浮かべて二人のやりとりを見ていた彼だが、気づいたときにはあさつての方向をむいていた。

やがてはあ、と溜め息を吐くと、彼は浮かべていた笑みを一瞬にして消し去り能面のような無表情に変え、言つた。

「まだ気づいてないのか？」

その突然な表情と口調の変化に戸惑い、絶句する一人　いや美咲に、綾は決定的な言葉を続ける。

「同じ年だし義理とはいえ、六年ぶりに兄が帰つて来たのに、ひどいと思わないのか？……美咲」

「・・・あに？」

鳴海が呆然と呟く。

「兄。義理だが」

綾は平然と答えた。

そこで我に返ったのか、鳴海は確認するよつて彼に尋ねる。

「誰が、誰の？」

「僕が、美咲の」

淡々と答える綾。

しばしの無言。鳴海は綾を睨み、綾はただ無表情で立つていて。だが痺れをきらしたのか鳴海は続きを問つた。

「.....つまり？」

「美咲から僕について聞いたことなかつたのか？.....つまり、僕は

「あつ、あ、絢文い つーー？」

今になつて美咲が間の抜けた声で叫んだ。わかつてはいたのだろうが、信じられないといつ表情を向ける鳴海に綾はしつかりと目を見て告げた。

「僕は睦月綾。だが、一応の元の名前は煉賀絢文といつ。.....言つておぐが、僕のことは綾と呼べ。前の名で呼ぶなよ」

何も返すことができない鳴海を一瞥すると、彼はもう一人へも声をかける。

「お前もだ、美咲」

「ふえ？」

まだ驚きが抜けきつていなかつたらしい。次第に意味を理解すると、慌てたよつて口を開いた。

「なんどよー？お義父さんたちからもうつた名前でしょー？なのに

「だから嫌なんだよ。それに、僕と煉賀家は既に縁が切れている。もちろんお前も、その鳴海とかいう奴も含めた煉賀の人間と僕は完璧に赤の他人だ。そしてもう一つ、僕は今の名前に誇りと愛着を持つている。かつては持てなかつた物をな……。それが理由だ」これでわかつたか、と視線で告げる彼。反論できない美咲は論点を変えることにしたようだつた。

「じゃあ、その、お義父さんは綾が絢文だつてこと知つてるの？」

「知つてるな」

「「はい？」」

至極あつさりした返事が返つてきた。

そんな風に返されると思つていなかつた二人は、見事に声をハモらせその後絶句。

「だつて一人が部屋に入つたとき、僕に敬語なんか使つてなかつただろう？部屋に案内されたとき真つ先に『絢文か？』つて聞かれたからな」

「……なんて答えたの？」

ようやく立ち直つた美咲が尋ねる。

「さつき美咲たちに言つた内容とほぼ同じことだ。そしたら僕を‘協会’の睦月綾として扱うことに決めたらしい。さすがに敬語は使わなかつたけど」

「そんな！実の息子をそういうふうに割り切るなんて！！」

「追い出されなかつただけマシだ。『一度と来るな』つて言われたら、協会に帰つてもいいとは思つてたが」

無表情に抑揚もなく言葉をつむぐ綾に、美咲が何か言おうとしたが、それよりも早く

「おー！」と、鳴海が声をあらげた。

「帰つてもいい、だつて？傲慢にも程があるんじゃないのか」
美咲は驚いて鳴海を見る。彼が敬語を使わないのを聞いたのは初めてだった。

「あくまでお前は雇われてるんだ。辞めさせるかどうかは当主をまが決められることだ」

「それは、僕が当主より弱かつたときの話だな」

綾は当然のように言った。そのため一瞬聞き流しそうになつたが、意味を理解した美咲は唖然とし、鳴海は眉をつり上げた。

「何だと？じやあ、お前は自分が当主をまより強いと言いたいのか？」

「さあ？試してみないとわからないな。……ただ、負けることはない。それだけだ」

余裕ある態度を崩すことなく言い切る綾。それがさらに神経を逆撫でたらしく、鳴海からは強い怒りの感情が見てとれた。当主に憧れている彼にとって、当主を見下すような発言は許し難いのだらう。

「そこまで言うんだな」

彼は綾の胸ぐらを掴んで、言った。

「精霊術なんていう、精霊から借りた力で戦う奴がよく言えたもんだ、呪力もまともに扱えなかつたくせに」

「黙れよ」

空気が、凍りついた。

正確にいうと、そう感じさせるほど殺気が爆発的に広まつたのだ。

……先程と何一つ変わらずに佇む、一人の青年から。

「ひとつ、訂正させてもらおう」

絶対零度の殺気に怯んだか、力の抜けた鳴海の手を振り払いながら

彼は何事もないかのように話す。

「呪力が扱えなかつたんぢやない。……何の因果か、それこそ呪いかはわからんが、呪術抵抗がなかつただけだ」

呪術抵抗とは、名前の通り呪術に対する抵抗力のことだ。それがないということは、かけられた呪術はもちろん己が編んだ術さえ全てが自分に影響を与えることを意味する。呪術は呪力より組み立てられるが、呪術が使えないのと呪力が扱えないのとでは意味が異なる。それ以前に、呪術抵抗はどんな人であれ生まれつき持っているものなのだ。一般人が誰かに呪われたとしても、ほとんどがそれを感じないように。つまり、呪術抵抗がないことは呪術師にとつて考えられないほどの異常なのである。

それを綾は本当に初めと変わらぬ口調で言つたのだ。術師として弱点 そこ決定的なものとなる事柄を。

「それに、僕の強さが借りものだと言つのなら 試してみるか？」

と、綾は唐突に放つていた殺氣を消した。

空気は全て元通りとなつたが、美咲の膝はまだ震えていた。間近にいた鳴海は言つまでもない。

「僕は精霊術を一切使わずに、自分の力と得物だけで戦う。やってみるか？」

肩に掛けていた刀の入つた竹刀袋を示してから、彼は唇の端を少しだけ歪めた。

美咲、鳴海、そして綾の三人は昨日の神社を訪れていた。

あのあと鳴海は挑戦（と自身は思っている）を受け、広く闘つても被害がでない場所ということで町外れのこの神社が選ばれたのだが……

「ねえ、……綾」

「何だ」

戸惑った様子で美咲は前を行く青年に声をかけた。

「昨日会ったの、綾よね？」

「そうだ。すぐ会うと言つただろう？」

一度否定したことをあつさりと肯定する綾。

既に確信していたためさして驚きはしなかつたが、そうするとやはり疑問が残る。

「まあ、確かにそうなつたけど。……じゃあ、なんでお義父さんに嘘吐いたの？」

そんな大層なことできない　　言葉こそ謙遜したものだが、彼は違うと言つた。義父の不自然な態度よりも、そんなことをする必要があったのがが気になつていた。

「あれか。あれはそうした方がお互いに都合がよかつたんだよ」

「都合？」

「そうだ……。僕は、協会、に所属している。今回は、今日からが任務開始だつた。つまり、昨日の時点では僕は煉賀と関わりがない。なのに、僕が一人を助けたとしたらどうなると思う？」「協会の術師が関わりがないはずの煉賀の術師を、だ」

「あ……」

そこで、彼女は気づいた。術師の一族は基本的に互いに不干渉つまり、

「、協会、が煉賀と特別な関係にあるという噂が流れる！」

「そう。この町にだつて色々な術師もしくは使い魔がどこかにいるはずだ。当主がそのことを知つていれば、勘づく奴が必ずいる。だからあの場ではそう言つたんだ。当主もそれがわかつてていたから、敢えて僕の嘘にのつた」

「そつかあ……」

それなら綾が吐いた嘘も、義父の態度にも説明がつく。

「ただ」

一人納得している美咲に綾は言葉を続けた。

「ただ？」

「一番長い付き合いだつたお前が僕のことを忘れて、なおかつ変な人扱い……嘘を吐きたくなつても仕方ないだろ？」

そう言つて彼はわずかに笑つた。だが目はまつたく笑つていない。

「あ、あのさ、綾」

「うん？」

「……怒つてる？」

そう聞くと彼は二つと笑つた。だが目はかけらも笑つていない。「怒つてるわけないだろ？」

間違なく怒つている。少女の記憶違いでなければだが、小さい頃、彼が不自然に笑うときは心の中で怒つているのがほとんどだった。はつきり言つてかなり不気味なのである。

「準備できたぞ」

いつも持ち歩いている紺色の竹刀袋から出した大太刀で素振りをしていた鳴海が、綾に声をかけた。心なしか不機嫌そうだ。

「美咲さんに何か言つたのか？」

気まずげに表情を歪めた彼女の姿を見て、さらに綾を睨む。

いつの間にか無表情に戻つた綾は、ごく自然に鳴海に視線を向けた。「別に。なんでもない」

そう言いはしたもの、どう見ても鳴海は納得していない。だが彼は他に何か言うでもなく自らの竹刀袋に手をかけた。

現れた黒鞘の刀を左手で掴み、上げる。

「始めよつか

しばらくして、鋭い金属音が響いた。

二人は10メートル程の間をあけて互いを見合っていた。

美咲は神社の賽銭箱の前に腰を下ろしその様子を眺めており、その瞳はどうも不安げだ。

社から見て右手には鳴海。太刀を構え鋭く綾を睨みつけている。そして反対側、左手には綾。刀を抜くことなくただ左手に提げ、鳴海を静かに見つめている。

しばしの静寂。

先に動いたのは鳴海だった。

脚力を最大限に使用した爆発的な加速によつて両者の間は一瞬にして埋まり、美咲が気づいた時には既に攻撃を始めている。

一撃目は加速の勢いをそのまま利用した強烈な突き。その威力は金属にさえ安々と穴を空けるだらう。

そこで初めて綾が動いた。

太刀の切つ先が服に触れる寸前、軽くサイドステップ。同時にわずかに身体をひねることによつて、刺突を難なくかわす。

突き出した太刀を大きく屈ぐ。

綾の腰辺りを断つはずだった刃は、素早く身を折り屈みこんだ彼にかすりさえせずただ空気だけを裂いた。

咄嗟に反応できずにいる鳴海の懷に潜りこんだ綾は、身を起こす勢いを使い手の平を打ち込む。続いて、鳴海の身体が浮いた隙を見逃さず流れるように上体をひねり、回し蹴りを叩き込んだ。

吹き飛ばされる鳴海。受け身を取り体勢を立て直すものの、着地の際に片手をついてしまう。

反撃されない絶好のチャンス。だが綾は追い討ちをかけず、最初と変わらぬ様子で鳴海を見ていた。

立ち上がり再び構えをとるが、鳴海はかなり苛立つていた。

互いに一撃。だが己が放った突きと斬撃はかすりさえせず、逆に相手の掌底と回し蹴りは的確に自分をとらえていた。特に表面上は平静に保っているものの掌底は内蔵に強い衝撃を与えており、立っているだけなのに膝が折れそうだ。それに、綾はまだ刀を抜いていない。

そして何より許せないのは、

「……なんで追撃しなかった」

追い討ちをかけないというのは、相手が倒すに値しないという意味を示す。つまり、綾にとつて自分は敵でさえないとということなのだ。

そう、ただそれだけがひどく彼を憤らせていた。

「勘違いするなよ」

だが、綾はそれを否定した。

「僕の戦闘スタイルは攻めるのにもむいていない。だから追い討ちをかけなかつただけだ。それに、今のは全力じゃないだろ?」
体術では先のが自分の最速であり全力だった。あくまでも、体術では。

「まさか……！」

「そう、呪術を使え。あまり得意ではなさそつだが、使えないことはないのだろう?」

確かに使えないはない。仮にも煉賀の術師だ、基礎的な術は全て習っている。

だが綾には呪術抵抗がないのだ。どんな弱い術でも当たればただではすまないだろう。

わざかなためらいを見てとつたのか、綾はこう続けた。

「敵の心配など無意味だ。一度は言わん　全力でこい」

次の瞬間、鳴海は無意識に叫んでいた。
「木行壱式、烈華!!」

そこでようやく、綾は刀を……抜いた。

正直なところ、美咲は一人の闘いを目で追うのが精一杯だった。もとより鳴海の剣術と体術は煉賀の一族の中でもトップクラスで、その速さは並みではない。体術だけなら当主には適わないにしても次点を押さえているだろう。もちろん隙などほとんどない。あつたとしても速過ぎて見えることはない。

だから　　鳴海の身体が飛ばされるのが見えたとき、自分の目を疑つた。

綾の体術がどれほどのものかはわからないが、昨夜の動きと先程の殺氣、それを知つていてなお鳴海が攻撃をくらうとは微塵にも思つていなかつたのだ。油断していなければだが、体術の苦手な美咲でも昨夜の異形は倒せないことはなかつただろうし、殺氣は実力に関係なくとも放つことだけはできる。

いや、これはただの言い訳でしかない。要するに、自分と鳴海は読み違えていたのだ。彼の……綾の実力を。

その時、二人の対話が途切れ、声が聞こえた。

「木行壱式、烈華！」

鳴海の叫んだ言葉。それは呪術の一つである、五行に属する術式。呪術抵抗のない綾にとって、かすり傷さえ致命傷となりうる攻撃。

しかも、よりによつて木行、それも烈華とは！

五行が木火土金水の五つの元素から成り立ち、なおかつ様々な物事が当てはめられていることは呪術師なら誰もが知つてゐる。色、方角、数字などもそこには含まれているのだ。

木行　　色は青、方角は東、時期は春。

火行　　色は赤、方角は南、時期は夏。

土行　　色は黄、方角は中央、時期は土用。

金行

色は白、方角は西、時期は秋。

水行

色は黒、方角は北、時期は冬。

そして今の季節は春、鳴海が立っているのは東側。つまり木行の力は格段に強くなる。

加えて烈華という術は葉や花びらが舞い散り、無数の刃となつて相手に襲いかかるもので、桜の木が多く植えられているこの神社ではこれ以上ないほど効果的な術式だ。だが、綾にとつては最悪の術だろう。

咄嗟に止めに入るより速く、舞い上がった花びらが綾に届く直前彼が緩やかに動き、刀を……抜いた。

そこから先の出来事は本当に一瞬だった。

舞う花びらに紛れて鳴海が太刀を振るう。だが綾がそれより速く刀を振るい花びらを来る端から全て落とす。直後鳴海の斬撃が綾を襲い彼も刃を切り返していく。

数度刀同士が打ち合つ高く鋭い金属音のあと、ひときわ大きい鈍い音が聞こえた。

カラーン。

遠くの石畳に何かが落ちる。打ち合いはすでに終わっていた。音のした方に目を向けると、そこについたのは一振りの大太刀。そして視線を戻した先に見えたのは仰向けに倒れた鳴海と、彼の首の真横に刀を突き立てた綾の姿だった。

綾の刀は仰向けに倒れている鳴海の首筋から皮一枚を残して突き立っていた。

そのまま動かない、いや動けない彼を一瞥すると、綾は得物を引き抜いて鞘に収め地に落ちた花びらを踏みながら大きく数歩移動した。放たれていた殺氣はすでに霧散している。

互いに無言。

その沈黙を破ったのは綾だった。

「……一つ、聞かせてもらおう」

その言葉に美咲と鳴海、二人の視線が向けられる。だが彼は特に気にした子もなく、ただ淡々と言つた。

「お前は剣士か、それとも呪術師なのか。どっちなんだ？」

ぐつ、と鳴海が口をつぐむ。歯には音がしそうなほどの力が込められていた。

「呪術師というのなら修行不足も甚だしい。春に、しかもその象徴とも言える桜が咲いていて、さらに東の位置から木行の術を使っておいてあの程度の力しか出せないのなら、もつ一度術を学び直すことをお勧めする」

有無を言わせない綾の口調。

「だが、剣士だと言うのなら、僕がお前に対して言つことは一つだけだ」

ほんの一瞬、能面のような表情が歪められる。

「この、恥さらし」

綾はそのまま身を翻し、彼が石段に足をかけたところひどくやく我に返つた美咲は咄嗟に追いかけ、その腕を掴んだ。

「……何？」

無表情に加えて何を考えているか分からぬ声。

その表情に少し怯んだが、綾の放つた言葉を聞いた瞬間、彼女は

切れた。

「何？って、あんたこそ何なの！？鳴海が恥さらしヽさつきから黙つてたら言いたい放題、何様のつもりな」

「本気で言つてるのか？」

「え？」

振り向いた彼の顔は無表情のまま。だが声が違う。

「だつたら、僕はお前も軽蔑するぞ」

冷たい炎、とても形容すればいいのだろうか。触れたものを燃やすのではなく凍らせるような怒氣がそれには込められていた。

「当主からは剣技だけなら己と互角と聞いていた。剣士の名家と名高い羽斑^{はいばな}に預けられていたこともだ。それなのに術師に技で押し負けた拳句、己の得物を弾かれるなんて失態をおかした。弁明の余地さえないだろ？」

それらの言葉は全て計つたかのように鳴海に届くぎりぎりの声量で発せられていた。なのに鳴海は反応せず、じつと空を仰いでいるだけだ。美咲は何も言うことができない。

「大方、煉賀に戻つて来てから自分より強い相手とほとんど闘つていないんだろう。術を使ってない術師に負けたことなんて、なかつただろうな」

吐き捨てるように言つてから綾は再び石段を降りて行つた。

ただ、最後の一段を降りきつたあと、一度だけ振り返り何かを呴いたように見えた。

それは美咲にか、それとも鳴海に對してだったのかは分からない。だが彼はそれきりこちらを見る事はなく、ごく自然に歩き去つた。

時刻は昼前。くしくも綾と最初に再会してからちょうど半日後。再び、神社には美咲と鳴海だけが残された。

「はあ……」

日が落ちかけた夕方の6時半。あれからまだ大した時間もたつてないがすでに夜の色に染まり始めた空を美咲は自室の窓から眺めていた。

あのあと美咲と鳴海は煉賀に帰り、当主から客の出迎えを命じられた。客とはもちろん綾のことで、あと30分もしないうちにやって来ることになっている。

かつての煉賀絢文としての彼ではなく、‘協会’の術師の睦月綾としてだ。

そして今日から彼は探知術を使い歪みを探し始める。これから行わられるのは煉賀の術師との顔合わせするための会議らしい。

綾が絢文であることを知っているのは当主と揚羽、そして美咲と鳴海の4人のみ。ちなみに帰つてから直接聞いたのだが、揚羽は綾に会つてすぐに気付いたそうだ。自分の鈍さが嫌になつてくる。はあ、とまたため息をついて視線を下げる、視界の右端に明かりの消された部屋が見えた。

そこは煉賀の敷地内にある離れの一つで、鳴海の部屋だ。薄暗くなつてきたにもかかわらずわずかな明かりさえ灯されていない。

屋敷に帰つてきすぐ、当主への報告もそこそこに彼は部屋に消えてしまった。だがその無礼とも取れる様子に対して当主は特別なことは何も言わず、ただ報告について

「そうか」と応えただけだった。おそらく、何があつたのかだいたいの予想はついているのだろう。それでも綾の出迎えを頼んだのは何かしら理由があるからなのかもしれない。

『ああ～っ！やっと見つけた～～～！』

「へ？ つてきやあ～～！」

突然大声が聞こえたかと思つと、何かががすゞいスピードで部屋の中に飛び込んできた。

『ふぎやー!』

それはそのまま直線的に進むと、敷きつぱなしにしてある布団に直撃。その後ふらふらと浮き上がつた。

『うー、着地失敗ー!』

それは小さな手で小さな頭をさすりながら眩いでいた。……失敗とかそういうレベルの突撃じゃなかつたと思うのだが。

「……せ、精霊?」

美咲が思わず口を開くと、『それ』は小さい身体をぐつと近づけ睨み付けてきた。

『精霊じゃなくて妖精! もしくは上位精霊! ピクシーをバカにするな!』

大声でまくしたてると肩で息をした。身体が小さいぶん肺活量も少ないらしい。

身長は一十センチほどで見た目は人とほとんど同じ。ぱっと見で違うのは耳がとがつているのと……半透明の羽が一対生えていること。それ自身が言つた通り、風精霊、いや風妖精。ピクシーの特徴だつた。

突然のことに啞然としている美咲から視線を外すとピクシーは愚痴るように呟いた。

『これだから人間は嫌なんだ。精霊と妖精の区別さえわかりやしない。主人の義妹マスターじゃなかつたら攻撃してるとこだつた』

『マスター?妹?』

まったく意味が分かつていない美咲に苛立つたのか、ピクシーは宣言するかのように再び大声で叫んだ。

『わたしの名はルキウス。最強の術師にして我がマスター、睦月綾の契約精霊だ!』

「契約精靈？」
 『そうだ』
 「あなたが、綾の？」
 『そうだ。わたし以外に誰がいる』
 「…………」

『なんだその目は』
 「いや、あのや…………契約精靈ってなに？」
 盛大なため息をつく妖精 ルキウス。美咲の目線より若干高いところに浮いているので見下された感があり、少しイラついてくる。
 『まさかここまで無知だとは…………』
 「む、無知で悪かつたわね。そんな哀れむような目で見ないでよ」
 『哀れむような、じゃない。實際哀れんでいる』
 「何よつ。人がせつかく恥をしのんで尋ねたつていうの……」
 『ばつ、馬鹿！大声出すな！』

顔を赤くして叫ぶ美咲の口をルキウスは慌てて塞ぐとする……
 が、サイズ的に断念。仕方なさそうに耳元に回りこみ、少し警戒しながら言つた。

『わたしが此処にいるつてばれたらまずいんだ。マスターからも注意されたし』
 「なんで？」
 『まあ、理由は色々あるんだ。…………で、契約精靈が何かだつたな？』

誤魔化された気がしたが、確かに知りたいことではあったので素直に頷いておく。

内容を考えていたらしく、少しの間をおいてルキウスは話し始めた。
 『とりあえず、精靈には階位ランクがあることは知っているな？』

「そりや、まあ…」

『で、そのランクの最も低いのが『元精』、略してフエノ。自我を持つていなかから、自然現象そのものを指す。台風なんかこの『元精』の集合体だ』

「はあ」

『次が『精靈』。一般的に精靈と言つたらこのフォースを指す。各個としたものではないが自我を持つ。精靈術の強さは『精靈』の数で決まる』

「んー?」

『その次、わたしが当てはまるのが『妖精』、または上位精靈。現象ではなく生命がある、つまり『元精』や『精靈』と違つて死ぬこともある。種族があつて、もし死ねば同じ種族から新しい生命が生まれる。種族の例は、ピクシー以外の風妖精でシルフ、水妖精のケルピーやウンデイーネだ』

「へえ…」

『最後が『竜』。常に各属性に一個体しかいない究極存在で姿形さえ不明』

「ほー」

『そのうち『妖精』と『竜』には『元精』と『精靈』を操れる力がある。個体によつて力の強さは違つけど、『妖精』たちと、契約、を交わすことでその力を借りて自由に使えるようになる。そして、契約、を交わした人間を精靈術師、精靈のことを契約精靈と呼ぶわけだ』

「…………」

『…………わかつてないだろ?』

「…………はい」

『だらうなあ』

ものすごくむかつくが反論できない。本当にわかつていないので。美咲の顔は妙な具合にひくついていたが、何とか自制出来ているらしい。かなり怖いが。

『……とりあえず、精霊には階位があつて下から《元精》、《精霊》、《妖精》、《竜》。その中でも人間と、契約した《妖精》と《竜》を契約精霊と呼ぶ』「これだけはわかつたな?』

美咲はしばらく唸つたあと、頷く。

「まあ、なんとか

『なら良い』

はあ、とため息混じりでルキウスは言葉を続けた。

『同じ一族、年齢なのに何故理解できないんだ。マスターはこれより難しい言葉をいくらでも使っているというのに』
「それは失礼しましたつ。で用件は何なのよ?』

2 2 精霊（後書き）

説明ばかりですみません。しかもわかりにくいです。
ちなみに精霊の区別は作者の創作です。この小説だけの設定ですの
で、一般的なものと違いますが気にしないでください。

『……用件？』

一瞬の間のあと、ルキウスはきょとん、とした目を美咲に向かた。
「そりよ。何か用事があつたから来たんじゃないの？」

『え、あ、ああもちろん！用事もないのに危険をおかしてこんなと
ころに来るわけないだろう！？まさかマスターに頼まれたことを忘
れていたなんてそんなわけ』

「……」

慌てたようにまくしたてる妖精に美咲が冷たい視線を送ると、ゆ
っくり目を逸らされた。

「忘れてたんだ？」

『……』

質問に対しても無言のルキウス。

質問をして再び冷たい視線を送る美咲。もちろん無言。

『…………』

『…………』

『…………』

『…………忘れてた、忘れてたよ忘れてました忘れてましたよ！－それは悪かつたなこれで満足か！－？』

沈黙に我慢できなくなつたのか、それとも美咲の視線に耐えきれなくなつたのか、ルキウスがいきなり叫び出した。どうやらプレッシャーに弱いらしい。

「別に悪いとは言つてないじゃない。ただ偉そつとしてた割には天然なんだなと」

「誰が天然だ誰が。馬鹿にするな！そもそもお前が当たり前のことを聞くから話が逸れたんだ！」

「どこが当たり前のよ、あれのどこが！」

『術師の世界では常識だこの世間知らず！』

「言つたわね羽虫のくせにつ！－」

『言つたな馬鹿！』

「馬鹿つて言つた方がバカよ！」

今時小学生でさえ言つているのかわからない低レベルな口げんかを始める一人。どうやら精神年齢は同じくらいらしい。

だが、結局大した時間もたたないうちに終わることになる。なぜなら

「美咲ちゃん！－誰か来てるの！－？」

「あ、揚羽さん！－？」

いきなり揚羽がガラリと部屋の引き戸を開けて現れた。

「あら、どうしたの？」

「他人の部屋に来るときに気配絶ちしないでください！－寿命縮むかと思いましたよ」

「『めんなさいねえ。くせになつちゃつてるからつ』…………」

心臓が飛び出そつなほど驚いていた美咲の言葉に、申し訳なさそうに揚羽は答える。だがさらりとす『』ことを言つていた。

そんな彼女に呆れ半分、驚き半分、といった表情で美咲は尋ねる。

「揚羽さん、何かようなの？」

「いえ、用つて訳じやないの。ちょっと近くを通りかかつたら話しが聞こえたから」

誰もいないわねえ？と不思議そうに呟いた揚羽と同じように部屋の中を見回すが、なぜか風妖精の姿は見当たらなかつた。

「んーと、電話。携帯で電話してたんだよ」

「そう？」

咄嗟に近くに放つてあつた携帯を見せながら言つと、怪訝そうにしながらも納得したらしく揚羽はきびすを返した。

「じゃあまた後でね」

そう言つた揚羽の顔が見えなくなつて、足音さえもが完璧に聞こえなくなつた瞬間、美咲は脱力した。

『危なかつた……』

そんな声がした方向を見ると、一体何処にいたのか、いつの間にかルキウスがさつきとまったく変わらない位置で浮いていた。

「『二』にいたの？」

『何処つて、『二』』

目を丸くして尋ねる美咲に、ルキウスはさも当然であるかのよつに答えた。むしろ何故そんなことを聞くのかとでも言つたげだ。

「でも、さつきいなかつたわよね？」

『いや居たぞ。姿は消していたが』

「へえ姿を消して……って姿消せるの！？」

『当たり前だろつ。姿見せたまま街中飛んでどつある』
まあ確かにそうだ。妖精が堂々と天下の往来を闊歩していいたらどうなることか。パニックじや済まされないだろつ。

『そんなことより、ほら』

ルキウスが差し出してきたのは一枚の封筒。文字も絵柄もない真っ白でシンプルなものだ。

「なにこれ？」

『見ての通り、手紙』

「宛先もないのにわかるか？」

手紙だつたらしい。

だがそれ以前に、

「……どこから出したのよそんな大きい物」

手紙の封筒の大きさ自体は美咲の手のひらほどだが、どう考えてもルキウスの体長の半分を軽くこえた大きさがある。わざとまで身一つだつたのにどこから出現したといつのか。

『言つたらわかるのか？』

「さあ？」

『じゃあ言つだけ無駄だ』

そこままであつさつ言わると悔しい、が反論できるのかと言つたら

「それで！その手紙がどうしたの？」

『露骨に話を逸らしたな……。まあいい、これがわたしの用件だ』

「これが？」

手紙を受け取り部屋の明かりに透かしてみると、もう机の上には便箋が入っていた。それにしては薄っぺらい。

『正確に言うとマスターにその手紙を煉賀鳴海に渡してくれと言われた』

「鳴海に？ 績から？」

あれから大した時間もたっていないのに、何を考えているのだろう。

美咲は未だに綾との距離が掴みきれていなかつた。‘協会’の術師としての今の彼と、義兄として、幼馴染みとしての幼い頃の彼。その二つの差は、予想以上に大きかつた。

だからこそ余計に、彼女には綾が何故今、鳴海に手紙を渡そうとしているのかがわからない。

『確かにお前に預けたぞ。鳴海とやらに渡しておいてくれ』

「まつて！」

そう言つて早々に窓から出て行こうとするルキウスを美咲は慌てて呼び止めた。

「なんで私なの？直接鳴海に渡せばいいじゃない」

その言葉に風妖精は深いため息をついた。

『普通、自分が完敗した相手の使いの話を素直に聞くと思つのか？』

「あ」

『それにマスターがお前から渡した方がいいって言われたんだ。わたしはそれを実行しただけだ』

そのままルキウスは出でていった。窓の外をうかがつても、その姿はすでにはない。

美咲の手には、一通の手紙が残された。

やがて日が沈み、夜闇が近づいて来る。
異形のものたちが現れる時間が、訪れる。

数分後、悩んだ末に美咲は一旦外へ出て離れの前に立っていた。先程と変わらず中は灯り一つなく、ガラス越しに見えたのは薄暗い闇だけだった。

何なのかは分からぬが重みのある手紙を右手に持ち、ためらいがちに左手で入口の戸を叩く。

「あの、鳴海？ ちょっとといい？」

。

返事はない。ただ、耳鳴りがしそうなほど寂寥が辺りを覆つていた。

美咲は意を決し、戸に手をかける。

「……鳴海？ ……入るよ？」

カラカラカラ

引き戸特有の音を響かせ、ゆっくりと足を踏み入れる。離れと言つても大した広さはないので、靴を脱いで短い廊下を歩くと、すぐに一つきりしかない部屋の前に着いた。

「鳴海、いるの？」

扉を開けた先は案の定真っ暗だった。だが確かに人の気配がするから居るのは間違いないだろう。

「もう！ 鳴海、居るんなら返事くらいしなよ」

そう言いながら美咲は何も見えない部屋の壁を手で探り、スイッチを押した。

とたんに白い蛍光灯がつき、一瞬目が眩む。その後光に慣れた目に映つたのは、こちらに背を向けて床に座つた鳴海の姿だった。背後からなのでよく分からぬが、寝ているというわけではないらしい。

「どしたの？ なる……」

「おかしいんですよ」

「へ？」「

唐突に言われたため、間抜けな声を出してしまった。わずかに視線が宙をさ迷ったが気を取り直して美咲は尋ねる。

「おかしいって、何が？」

「……ちょっとこっちに来てもらえますか」

「あ、うん」

不思議に思いながらも鳴海の正面に回りこみ、彼と同じように床へ目を向けてみる。

「……なに、これ」

わずかに間が空いたあと、少女の口から呆然とした声が漏れた。そこにあつたのは先程も鳴海が試合に使つていた大太刀『椿』^{つばき}。三年前、彼が煉賀に戻つた時に当主から与えられた刀で大きい割に軽く、切れ味も良いためスピード重視の鳴海にはぴったりだつた。それが……

「うそ、だつて鞘にしまつた時はこんなことになつてなかつたのに……」

「俺も帰つてから気付いたんです。弾かれたし地面に落ちたから、刃が欠けてないかと思つて。……まさか、折れてたなんて」

そう、『椿』の刀身は半ばで真つ二つに別れており、細かな欠片と共に白布の上に広げられていたのだ。驚かないはずがない。さつき美咲が言つた通り、綾との試合のあと太刀を鞘に入れた時は折れなどいなかつた。だいいち、折れいたら鞘に入るはずがない。

「どうして……」「

美咲のつぶやきに答えられる者はいなかつた。そして、もし答え
るとしたら、あの人物しかいない。

「あいつなら、綾なら知つてゐるんでしょうか……」

複雑そうな顔で鳴海が言つた。

それを聞いて美咲がはつとした表情になる。

「そうだ。鳴海、これ！」

「なんですか。……手紙？」

「そう、手紙！綾からあなたへつて……」

「……」

思いもかけなかつた出来事に、驚愕のあまり鳴海は声を失つた。

そんな彼を急かすように美咲は言葉を続ける。

「もしかしたら何か分かるかもしないよ。ね、早く開けてみて」「は、はい……」

その勢いにおされたのか、快く思つていない相手からの手紙にも
かかわらず素直に封を切つた。

すると中から何かが転がり出た。

「うわっ、と」

床に落ちる寸前に鳴海がそれをすくい上げる。その拍子にそれは
彼の手の中でカチリといつ音をたてた。

「…………？、石？」

鳴海が呟く。確かにそれは石のようだつた。ルビーより深い赤色
の板状の小石が二つ、手のひらに乗つていた。

「鳴海！それよりも手紙！」

「あ、そうですね」

とりあえず石を封筒に戻し、代わりに便箋を取り出す。便箋、と
いうより単なる白い紙は丁寧に折り畳まれていた。

ゆっくり開き、読む。

「『刀を折つてしまつてすまなかつた。代わり、といふわけではな
いが、同封している石の一つを折れた部分に当てて呪力を流してみ
ると良い』…………なにこれ」

「かなり一方的な文章ですね……。しかも後半は説明不足すぎます」
二人は顔を見合わせるが、まったく書き手の意図が掴めない。

「悩んでも仕方ないし、試すだけ試してみたら?」

「…………そうですね」

鳴海はため息をつくと、封筒から石を一つ取り出し、手にひとつ

眺めた。

ルビー

「紅玉よりも柘榴石に近そうですね。色がすごく深い

「そう? 言われて見ればそうかもだけど、よく分からないよ」
じつくり見た後、静かにそれを摘まむと『椿』の折れた刃と刃の
合わせた部分に当てた。

「じゃ、いきます」

「うん」

すう、と深呼吸をして石を持つた指先に呪力を集め、徐々に流し
こんでいく。

最初は弱く。だんだん強く。

しかし、五分あまりたつても変化は現れなかつた。

「なんにも起こんないねー」

ぱつりと美咲が言い、鳴海自身も諦めて手を離そうとした瞬間、

紅い閃光が爆発した。

「きやあつ!」

「うわっ!」

しかしそれも一瞬のことと、思わず閉じていた目を開いた時には
変わらない部屋の光景が広がっていた。

だが、鳴海の手からはあの石の感触が消えており、ふと手元に視
線をやつたところ

「「なつ!?」

「

二人は絶句した。

彼の手元、そこには傷一つない、光を反射する美しい刀身を持つ
た大太刀『椿』の姿があった。

「うそ……」

無意識に言葉が漏れていた。そしてそれは美咲の心情をこれ以上なく端的に表したものだった。

折れた太刀、赤い石、呪力の流れ、閃光。単語ばかりが頭の中をぐるぐると回り、半ばパニックを起こしている。

ただ、はっきりしているのは折っていた太刀が元通りになつたということだけだ。それでも信じられず、何度も目を瞬かせる。だが、見える光景はまったく変わらず、そこには傷一つない刀身があつた。

ふと、先程から黙りっぱなしだった鳴海が静かに動く。

「え、鳴海？」

驚いた美咲が声をかけるが、鳴海は答えず《椿》を手にとった。確かめるように何度も握り直し、ゆっくりと立ち上がりと刀を構えて静止。

ざんツ

一呼吸のあと、鋭い斬撃が空を切った。

ザツツ

返す刀でさらに一線。だが、実際のそれらの動きは美咲にはわからなかつた。

理由は一つ。ただ速かつたのだ。彼女が今までに見た鳴海の斬撃よりも。

「……軽い、軽すぎるくらいだ」

唐突に、鳴海が口を開いた。

「どうということ？」

驚きのあまり逆に冷静さを取り戻し始めた美咲だが、簡潔すぎるその言葉の示す意味が咄嗟に理解できず疑問の声を上げた。

「……切れ味も抜群、重さも刀としての動きに支障がないぎりぎ

りの状態。これはただ《直つた》なんでものじやありません

「じゃあ、なんだつていうの……？」

「……さあ、俺にはちょっと……」

そう言いながら鳴海は傍らに置かれた封筒に目を向けた。正確に

は、その中にあるもう一つの紅い石にだろうが。

「その石が何なのか、《椿》がどうなつたのか、知るはただ一人。

……つてことか」

美咲のつぶやきに鳴海は黙つて頷いた。

そして、全てを知つている人物はもうすぐここにやって来る。

「行きましょ、美咲さん。さつきから訳の分からないことだらけでいらいらしてゐるんです。しつかり説明してもらわないと」

「あ、うん」

鳴海は太刀を鞘に收め憤然と立ち上がると、きびすを返した。慌てて美咲も腰を浮かせる。

便箋を封筒に戻し、それを持って部屋を出たところでの角から揚羽が姿を見せた。

「あ。美咲ちゃん、鳴海くん、ちようじよかつた。つこせつきお密さん 綾くんが来たわよ」

それを聞いた二人はどちらともなく互いに目を合わせる。

「 行こつか」

「 はい」

揚羽のあとに続いて、二人は離れから出た。

日が沈み、宵闇が訪れた世界に、皓々とした臥待月が妖しく輝いていた。

2
7 紅石（後書き）

感想等もりあると嬉しきです。

煉賀の屋敷の西奥にある一間続きの座敷。そこで美咲と鳴海、揚羽、当主の絢斗を含めた十人の呪術師が一同に介していた。

呪術師は全員煉賀とその分家の血筋に連なるものたちで、皆それ相応の力を持つている。……とは言え、先の四人にはどうしても劣ってしまうのだが。

襖が取り払われ縦に長くなつた座敷に、上手の当主を境界にして皆一列で向かいあうように座つてゐる。

下手から見て右側の列は次期当主の美咲。続いてその護衛の鳴海。そして分家・篝の当主、その息子と続き、もう一つの分家、壬杉の当主とその妹……と並んでいた。

左手の列は最も上手が空席、次に揚羽、そして情報部である南雲の呪術師が二人並び、さらに二つ空席……となつてゐる。上手の空席は本来なら煉賀当主・絢斗の弟で、鳴海の父親である旭が情報部の長として座つてゐるのだが、彼は現在入院中のためここにはない。下手の一席は基本的に客用のため空けてあつた。

ちなみにこの十人の中で十代なのは美咲と鳴海の二人だけで、他の者たちは最も若くて二十代半ばである。

普通なら何故そんな年齢の者がここにいるのかという声の一つでも上がりそうなものだが、誰一人として言つことはない。一人が煉賀の直系というだけでなく、その強さが己を凌ぐことを皆が知つてゐるからだ。

とは言えど、それは実力を認められた美咲たちだからこそ納得しているのであり……つまり、見ず知らずの、協会、の術師が十代ということを聞かされた分家の四人……特にそれぞれの当主は、かなり見下した考え方を持つてゐるようだつた。

今彼らが行なつてゐる会話の中でも文句を言つてゐるし、加えてその態度や表情を見ればそれは一目瞭然である。

「…………はあ」

「…………」

そんな中、美咲は小さくため息をつき、鳴海は顔を曇らせていた。はつきり言って美咲、そして鳴海はこのよつたな状況と空気が嫌いだつた。生来正義感が強い一人は、嫌なら正直に言えば良いのにと思ってしまうのだ。

絢斗や揚羽もその会話を快くは思っていないだろうが、表面上はただずつと何と言つこともなく静かに話を聞いている。

「ですから、‘協会’の術師など…………」

「成人もしていない未熟者に…………」

広い部屋に篝と千杉の正論とはほど遠い発言が飛び交う。

「……わざわざから何度も言つてるんだか」

「同感です」

小さく呟かれた美咲の言葉に鳴海も同意した。実際、篠と壬杉は先程から同じことばかり大声で怒鳴り散らしているのだ。

篠の息子である緋萩は無表情に座つており、壬杉の妹の小春は困ったような表情を浮かべてはいるが、どちらも何も言おうとはしない。当主の一人ほどのないが、疑問があるのは確かなのだろう。

苛立つたように篠が声を上げた。

「やはり、協会、のような無法者の集まりにこのよつた重要な仕事を任せるのは……！」

「……篠殿」

それを遮り、口をはさんだのは絢斗だつた。

「口を謹んでいただきたい。『協会』は私たちの要望通り、現在手が空いていて探知を行なうことができる術師を派遣してきた。それに年齢が関係あると？仕方ないから、と貴殿たちは依頼するのを認めたのではなかつたか？」

「いや、それは……」

「文句を言つるのは、探知術を使えるようになつてからにするべきだろ？……私を含めてな」

煉賀当主の言葉に一の句をつぐ者、いや、つげる者はいなかつた。彼が言つた通りなのだから当然である。

込められた迫力はさすが綾の父親と言つべきか、彼と同じように反論する気力を失せさせる力があつた。美咲は改めて綾が絢斗の息子なんだなあ、と実感する。

「失礼いたします」

シン、と不気味に静まり返つた部屋に、使用人として働く術師の声が響いた。

「、協会の方を」案内しました

「入りなさい」

絢斗が許可を出し、下手の襖が開かれる。

「失礼します」

開いた瞬間、清廉で静謐な空気が部屋中に広がった。

姿を見せたのは、綾。だがその気配は昼前に会った時とは違い、風のない水面のようになめらかで固く、深海のように重く暗い。

強いて言つなら、人と一線を画した何かであるような

「、協会、から参りました。精霊術師、睦月綾と申します」

再び綾が声を発し、よつやく美咲は我に返る。……完全に、彼の気配に呑まれていた。

改めて彼の姿を見るが、服装や髪型は昼前となんら変わらない。表情も絢斗と会っていた時と同じ柔らかな微笑み（おそらくこれが彼の表向きの表情なのだろう）を浮かべている。が、やはりどこかが違う。

「…お、おお、君が件の精霊術師か。優秀な術師と聞いているし、よろしく頼むぞ」

「ええ、もちろんです」

美咲、鳴海、絢斗、揚羽の四人を除く人々の中で最初に我に返った壬杉が先程と正反対の言葉を言い、綾がゆるりと頷き返す。わずかに壬杉が落ち着かない様子なのは、綾の気配に圧されたか、それとも その美貌に圧倒されたのか。

綾の容姿はとても中性的だ。髪を長く伸ばしているのもその要因の一つなのだろうが、整った顔つきが男とも女とも言い切れなくなるのだ。

だがところどころ男らしい部分がある。例えば声は低めのバリトンだし、肩幅もそこそこある。線が細く見えるのは無駄な筋肉がないでいいからだろう。

それでも美青年ではなく美人という形容が似合つのは・・・その気配のせいなのか。

「美咲さん、どうしたんですか？」

鳴海に小声で話しかけられ、美咲は我に返つた。

「な、なんでもないよ」

「……ならないんですけど」

鳴海は変なところで勘が鋭い。もし綾のことを考えていたとわかれれば不機嫌になるだろう。綾は悪い人では（多分）ないわけだし、もう少し仲良くしてもらいたいものだが・・・誰だって自分が負けた人と普通に接するなんて簡単にできるものじゃないから仕方ないことだろう。

そうは思つていても、何故鳴海が綾を目の敵にするのか美咲はわかつていないので二人を仲良くさせる方法などまったく思いつかないのだが。

「綾殿、申し訳ないのだが至急に“歪み”の探知を行なつてもらえないだろ？」「

「ええ、それは構いませんが……。何かあったのですか？」

「少し、な。そこにいる私の甥が、異形の強さに違和感を覚えたらしい。そこで今日“歪み”を封じた後で調査を手伝つてもらいたいのだが……」

当主と綾、二人の会話の矛先が一瞬だけ鳴海に向いたとき、綾の

視線がこちらに動いた。

「そうですか……」

綾は目を細めて言った。だがその奥にある瞳が鳴海をじっと見ていたように感じたのは　　気のせいだったのだろうか。

「わかりました。お手伝い致しましょう。　　もひ、探知を始めても？」

「ああ構わない」

「では、皆様すみませんが外へ」

そう言いながら庭へ出でていく綾に続いて、皆が廊下に出来る。

「あれ、お義父さまは？」

「私はいい」

襖を閉める直前、絢斗が動いていないことに気付いた美咲が問い合わせたが、彼はそう断つた。

「美咲、よく見ておきなさい。呪術とは異なる術を、そして綾の力の片鱗を」

「は、はい」

「どことなく違和感を感じる物言いではあったが、美咲は素直に頷いておいた。言われなくとも、綾の実力を見る絶好の機会だ。見逃せるはずもない。

美咲が出て行った後、絢斗は深くため息をつくと天を仰いだ。

「…………それにして、綾は　　絢文は本当にお前にそつくりになつたよ。なあ　　^{ふみ} 芙美」

お前が認めるほど、良い奴に育つたか？

虚空に尋ねるが、それに答える者はいない。

この部屋にも、この地上のどこにも。

彼女は、いない。

妖しく、冷たく、そして美しい月を背に彼は立っていた。
黒髪が月光で輝き、または影に融ける。

白い肌がより一層白く、光と影に浮かび上がる。

綾を含め、外に出た10人の誰一人として口を開かず、痛いくらいの静寂が辺りを包んでいた。

いや、正確に言つと綾以外の全員が彼を取り巻く力に呑まれ、言葉を発することが出来ないのだ。

それほどまでに圧倒的な、一種の神々しささえ感じる氣配。
その中で、綾が動いた。

「……來い」

そう彼が呟いたように見えた。だがその声は誰かに届く前に搔き消された。 突然の暴風によつて。

「きやつ！」

「うわ！」

吹き付ける突風に思わず美咲と鳴海は目を閉じた。

「ううう」と唸る風の音が世界を支配し、塗り潰していくのだけを感じ、さらに固く目を瞑る。

すう、と視覚を失つた空間で何かが動く気配がした。一つではない無数の、力タチがない何かが風の中に潜んでいる。でも……これだけの暴風だというのに、それらに悪意や敵意は覚えなかつた。むしろ心地よくさえ感じた。

ふと気付いた時、すでに風は止んでいた。

加えて、辺りに広がっていた気配が綺麗さっぱりなくなつてゐる。まるで、風と共に消え去つたかのように。

「あ、れ？」

おかしい。

さつきまであんなに強い風が吹いていたといつて、何故庭の桜

が散つていらないのだろう？

今が満開のはずの桜の花は、花びら一つ舞い散ることなく元の姿を保つていた。それに綾のすぐそばにある小さな蓮池にも、わずかな波紋さえ起こっていない。

「誰か、書くものをお持ちの方いらっしゃいませんか？」

「あ、私持つてますー」

突然の綾の呼びかけに応えたのは、揚羽。彼女は先程の光景に対しさして驚いた様子がなく、いつもと同じように見えた。

「失礼ですが、今から言つことを書き取つていただけませんか？」

「いいですよ」

揚羽は着物の袖から手帳と鉛筆を取り出ると、綾に向かつて微笑んだ。

綾も彼女に微笑み返すと、一息置いてから言つた。

「では……」

1時 の 方 向、舞 楠 駅 大 通 里 路 地。 2 3 時 1 1 分。

4 時 の 方 向、葉 月 南 公 園 入 口。 2 1 時 4 7 分。

6 時 の 方 向、葉 月 神 社 第 一 鳥 居。 1 時 2 1 分。

11 時 の 方 向、北 針 マ ン シ ョ ン 工 事 現 場。 2 0 時 4 9 分。

以上四ヶ所、“歪み”的発生予想地と時間です

「はい、お疲れさまでした。では……」

「ちょっと待て！」

揚羽の言葉を遮つて、篝が声を荒げた。

「あんなものが探知術だと！？単に風を起こしていただけではないか！そんなことで“歪み”が探れるわけが」

「では、お聞きしますが。貴殿には单なる風を起させるのですか？」

綾の辛辣な台詞に、篝は言葉を呑み込んだ。

「それに、もし“歪み”的予測が間違つようであれば、私はここにいません。違いますか？」

「そこまで！」

パン、と手を叩いて揚羽が仲裁に入った。

「篝さん、緋萩さん、壬杉さんに小春さん。追つて指示を出すと思
いますので、客室にお戻りください。綾くんと美咲ちゃんと鳴海く
んは私についてきて。では解散とします！」

強引にそう告げると、揚羽は綾を引っ張り奥に行つてしまつた。
美咲と鳴海は慌てて一人を追いかける。

廊下の角を曲がる時、後ろで憤然とした声が聞こえた気がした。

「綾、どういひこと？」

「何がだ？」

あのあと、美咲たちは揚羽に連れられ屋敷の一角にある和室にやつて来ていた。

ちなみに、揚羽はさつき

「「ゆつくり」」とのんきな笑みを浮かべて部屋を出ていったのだが、このメンバーが集まつてゆつくりできるのか甚だ疑問である。そして案の定、彼女が居なくなつた途端なんとも気まずい空気が流れた。と言つてもそれは美咲と鳴海にとつてだけであつたのだが。三人とも無言のまま時間がたち、結果しひれを切らした美咲が言ったのが先程の言葉なのである。

「まず私のところに来た妖精のこと。もうひとつは封筒に入つてた紅い石について。とぼけたりしないでよ」

詰め寄る美咲に綾はあつさりと言つた。

「その妖精はこいつだろう」

「え？」

パキン、と彼が指を鳴らすと一瞬視界が歪んだ。そして気付いた時には先程までいなかつたものが現れていた。

「あ、さつきの…」

『わわつ！？』

美咲が声を出すと、それはかなり慌てて綾に飛び付いた。

『ちょっとマスター、勝手に術解かないでください！』

「ああ、悪い。こつした方が手つ取り早かつたんでな」

そう言つて軽くあしらわれ、妖精 ルキウスは膨れつ面で黙りこむ。

「なんなんだ、これ

それらの一連の出来事をぽかんとした顔で見ていた鳴海が、ようやく口を開いた。

その後、ルキウスの言葉の発先が彼に向かつ。

『これって言うなー私は風妖精ピクシーのルキウスだ。お前とりあえず謝れ』

「やめろルキア。無駄にややこしくなる」

そう綾に言われ、しぶしぶながら体を引くと彼の肩に座つた。だがその目は警戒心丸出しで鳴海を睨んでいる。

ふと、美咲は綾の言葉に違和感を感じた。よくよく考えてみると、自分が知っているものと違う部分があることに気づき彼女は声をあげる。

「…………綾、さつきルキアって言つた?」

「ああ。…………もしかしてこいつ、ルキウスって名乗つたか?」

「うん」

「こいつの名前はルキアだ。ルキウスっていうのはルキアの男性名のことだ、こいつが勝手に名乗つてただけ」

『マスター、なんで言つちやうんですか?』

『隠すことでもないだろ。女なんだから女名名乗れ』

そんな会話を見ながら、美咲が精霊たちにも性別あるんだ……と考えていると、鳴海が苛々したように言つた。

「…………つまり、よくはわからないがそのルキアとやらはお前の契約精霊なのか?」

『マスターをお前呼ばわりするな!』

「あれ? 契約精霊のこと知つてるの?」

口を挟んだルキウス、いやルキアを無視して美咲は鳴海に尋ねる。

『え? まあ一応。呪術以外でも基礎的な術の種類と仕組みは一通りとたん無言になる美咲。つられて鳴海も黙つていると、綾がおもむろに口を開いた。

「美咲、僕には小学生のときお前と一緒に揚羽さんから精霊術について教えてもらつた記憶があるんだが

2 12 疑問（後書き）

読んで下さりありがとうございます。

「俺もそれくらいの時に羽斑^{はむい}の家で」呆れた口調の綾の言葉に加え、悪気はないのだろうが追い討ちとなる鳴海の言葉。

そして美咲はといふと……あさつての方向をむいていた。そんな彼女に、鳴海の不思議そうな視線と綾の呆れたようなため息がぐさりと突き刺さる。

「…………」

なんとも言えない雰囲気の中で口を閉ざす三人に、ルキアが綾の肩の上で美咲を指さし言つた。

『つまり知らなかつた、いや覚えてなかつたのはお前だけ』

「…………ルキア、失礼だろう。事実とはい言わないことがいいこともあるんだ。そつとしておいてやれ」

「…………あんたの方が失礼よ黙りなさいバカ絢^{あや}——」

「——」

あからさまにからかいにぶち切れた美咲は大声でそう叫ぶと、綾に殴りかかつた。

体術が得意ではないとはい、美咲の動きは一般人に認識できないほど速い。だが一般人とはほど遠い綾は、そのパンチの連打を最小限体を傾けるだけで全て避けていた。

「絢ねえ……。随分懐かしい呼び名」

綾はよけながらぼそりと呟いたが、切れた彼女には聞こえていなかつたらしい。だんだんと拳や蹴りの回数や量が多くなっている。

しばらくの間彼は美咲の攻撃をかわしていた（時折ルキアに当たりかけ本人は悲鳴を上げていた）が、らちがあかないと思ったのかふと動きを止めた。

そして綾がよけるのをやめた時、たまたま美咲の拳は彼の顔面に向かっており、あと少しで直撃するかと思われたが

「すつ

「きやつ！？」

突如鈍い音と共に短い悲鳴が上がる、拳は当たる直前に勢いを失い、美咲が体勢を崩すのに合わせてそのまま脇へそれていった。

「いたー！なんのよもう！」

いきなり頭を襲った痛みに、わけが分からず痛い場所を押さえる美咲。涙目で周りを見回すと、自分のすぐ傍に拳大の塊が落ちていることに気付いた。

「何これ……氷？」

透明なそれをつついてみると、ひやりとした冷たさと張り付くような感覚があった。やはり氷のようだ。

「いたいどこから……」

「落ち着きましたか、お嬢さん？」

彼女をわずかに見下ろす形で、揶揄するように綾が言い放つ。そして美咲が触れていた氷を拾い上げると右手の平に乗せた。

「なんで氷が？」

鳴海の疑問の声に応えることなく、綾がそのまま右手を握ると氷の塊は音もなく粉々に砕け辺りに飛び散った。

「！」

その欠片は置や机の上に落ち、それらを濡らすかと思われたが宙に舞つた一瞬のうちに跡形もなく消え失せ、あとには水滴一つ残されていなかつた。

『マスター、そんなことに術使うのやめましょ』
「いいじゃないか。どうせ疲れるのは僕なんだ。ルキアは心配性すぎなんだよ』

『それは、そうですけど。……誰が心配かけてるんですかねえ？』

「僕だな』

『わかつてゐならもつと自重して……』

「ちょっとまつたーつ……』

延々と続きそうな綾とルキアの会話に、美咲は強制的に割り込んだ。そんな彼女に、綾がうろんげな目を向けてくる。

「突然叫んだり殴り始めたり、おまけに人の会話の邪魔をしたり。一体何がしたいんだ』

「そんなことさせてるのはあんたでしょ！？黙つて人の話を聞け！あと質問に答えなさい！』

「黙つていればいいのか答えればいいのかはつきりしてほしいんだけど』

「ああもーつ……』

「み、美咲さん落ち着いて』

『口でマスターに勝てるわけないだろ。人の揚げ足取らせたら日本一、いや世界一……』

「……ルキア、色々覚悟できてるんだよな？』

綾が混ぜかえして美咲が怒り、鳴海がなだめてルキアがちやちやを入れ、綾に怒られる。そんな会話が数回繰り返され

「……で、さつきの氷は……お前が出したのか？』

ようやく本題に戻り、鳴海が綾に尋ねた。美咲はまだ怒っているのか睨むように彼を見ていたが、一応大人しく鳴海の横に座つている。

「そうだ』

「……やけに簡単に認めるんだな」

「別に。お前らに隠しても仕方ないんでな」

「へえ、私には隠す必要もないってわけ？」

綾の言葉に反応した美咲が挑戦的な言葉を放つたが、本人は軽く頭を横に振った。

「そういう意味で言つたんじゃない。これから先行動を共にする奴らに嘘を吐いたら、もしもの時自分の損になる可能性が高いし、それに 分家の奴と違つて、お前らの方が信頼できる」

すると、美咲の顔が一瞬にして赤くなる。よくもまあそんな恥ずかしい台詞が堂々と言えるものだと鳴海が別方向で関心していると、ふと疑問が頭に浮かんだ。

「……なあ、……綾」

「何？」

「お前、なんで俺をそこまで信用できるんだ？」

「ちよ、ちよっと鳴海？」

信頼できると言つてくれたばかりなのに、どうしてそんな不審さを煽るようなことを言つのかと声を荒げる美咲。だが綾は別段気にした様子もなく淡々と言葉を促した。

「……つまり？」

「つまり……、美咲さんは長い間一緒にいたんだから信頼するのはわかる。けど、なんで今日、いや昨日会つたばかりの俺まで信頼できるんだ？」

「……」

無言で一人を見つめる視線が、一瞬にして呆れたものに変わったのを感じ鳴海はわずかにつらたえる。

「な、なんだよ」

「いや……。つべづべお前らの記憶力は残念なことになつてるんだなあと」

「なにそれ。喧嘩売つてんの」

その言葉に一転して怒氣を放つ美咲を手で制し、鳴海に向き直つ

た綾はわざとらしくゆっくり言った。

「お前は知つて、いや覚えてないんだろうが、僕は昨日よりずっと前からお前のことを知つてゐるし、覚えてもいるんだよ。……揃いも揃つて僕のことを忘れてるなんて、ほんと薄情な従兄弟たちなことで」

そう言い終わったあと、彼は皮肉っぽく口元を歪めた。

「まあ、お前何言つて

「いいじゃんじゃ、話したじつもあるから」

100

しきなり自分のことを知二でしると言われた鳴
げた。だがそんな彼の反応を見つつ綾は続ける。

「お前小学校に上がる直前まで煉賀にいただろ？」「

101

よく考えてみる、その時僕が「」にならなかつたらどうか?」

「え、ってことはひまつ..... 鳴海、小さい頃私らと会つたこ
と忘れてたの？」

「い、いえ。美咲さんのことばかりやんと……」

「ほおお、美咲のことは覚えてて僕のことは忘れてんだ？」

「ニギヤハシヒヨウガニヤウ...」

悲しいなあ。同じ年とはいって、一番年長だった僕のあとを付いてきて『兄ちゃん』と呼んでいたお前がこんな薄情者だったなんて」「う、嘘だ……」「

「嘘じゃないよ? 私も呼んでたし」

すると美咲は少し考えこんだように黙り、やがて思いついたように顔を上げた。

「そつか！ 小さい頃仲良かつたのに、何で鳴海は綾のこと毛嫌いしそうだ？ て思つてたんだけど、これで納得！ 忘れてたんじや警戒する二つ巴、どうしつ鳴海、

美咲の真横で正座をしたまま鳴海は固まっていた。そして綾はとても気の毒そうな目で一人を見た。

「な、なによ綾その日は」

『まだ気付かないのか？ほんつと鈍感だな』

綾の肩の上で偉そうに言うルキアを、むかついた美咲はつかんだ。
そしてそのまま障子を開けてふりかぶり

『ちよっとやめ、やめひでばーびうこかしてくださこマスター！

!』

大切な自分の契約精霊のピンチ（？）に対して綾は、

「口は災いのもとだよ、ルキア？」

そう言つて口元を指しながらにっこり微笑んだ。なんとなく、顔に『自業自得』つて書いてある気がしてくる。

『そんなあー！助けてくだ』

「逝つけえええええ————！」

『ぎいいやああああああああああああ————！

!—』

ものすごい勢いで外に放り投げられたルキアの姿が見えなくなつてから、美咲は改めて綾に向き直つた。鳴海もなんとか復活したらしく、頭を抱えながらも口を開く。

「そ、そんなことはどうでもいい！」

「そんなこと、ねえ……？」

「そんなことはどうでもいい！——何でお前は嘘をついたんだ？」

「嘘！？え、どこが？何が？」

思いもよらない質問に驚いている美咲に説明するよつて鳴海は続けた。

「最初、当主様の部屋で俺たちと会つた時、こいつは『水流術師』と名乗りましたよね？でもせつゝの集まりの時は『精霊術師』だつた。まあこれは別にいいんです。今の……その、信頼？の違いで説明できますし。でも、『水流術師』つてどう考へても水の精霊術師でしよう？なら水の精霊と契約してははずですか、氷を出せるのは当たり前です。けど風の精霊と契約してはなんておかしい。だから、なんか嘘をついてるんじゃないかなって」

少し考へている様子だった綾は、そう言われて何か思い出したらしく、唐突に言つた。

「ああ、そうこう言つてなかつたな。
「協会」の術師の呼称と階位^{ランク}」

2 15 虚偽（後書き）

明けましておめでとうございます。石榴石です。
今回綾が変だなあ。

「呼称にランク? そんなのがあるの?」

「ああ。‘協会’の中での実力や功績、能力をもとに決められる。確実に依頼をこなすためにあるんだが、ここでの呼称がそのまま仕

事での通称にならざることか多しな

へえ、おもしろいね。どんな呼称とかがあるの?」

「とにかくさしつけたが……」

好奇心で目を輝かせながら問いかける美咲を制し、綾が視線を鳴海に向けると、本人は再び固まっていた。

一
お
い
」

.....

100

.....

「…………お、い、一、」

Г

」

じつと鳴海を睨んで

パキン

小気味のいい音と共に、一度目の氷が出現し鳴海の頭に落^ハ下^スし

二二

「アリサ...?」

またいい音と共に悲鳴が上がった。

「つて、あれ?」

不思議そう「さよなら」と辺りを見回す鳴海に綾が呆れた声を
する。

かける。

で、続きを話してもいいか？」

גַּעֲנָנָה עֲנָנָה

「あ、ああ」

「まず……、精靈には主に四つの属性、つまり四大元素の種類である地、風、火、水がある。ここが呪術との最も大きな違いだな」「あ、そつか。呪術は陰陽道の流れをくんでるから五行が基本だもんね」

「そうだ。まあ五行の元素への当てはめ方やその逆もあるんだが、ややこしいから今は割愛する」

「何で主に四つ?」

「雷や光の精靈もいるにはいるんだが、ほとんど姿を見せないからだ。見えない奴とは契約できないからな」

「そりなんだ……」

「次にいくぞ?」

まず、協会、内での精靈術師のランクだが、初めて精靈と契約した術師、これを『陣術師』と呼ぶ。契約する時に 陣 を描くのが由来らしい。最も、陣は人であり刃であり神だから、関係ないかもしれないが。そして契約した精靈の属性を取つて『炎陣術師』、『風陣術師』とか呼ぶのが一般的だな」

「ふーん」

「で、二人目、つまり二属性の精靈と契約すると『流術師』と呼ばれるようになる。契約精靈のうちメインの方の属性を取つて『地流術師』つて感じのが多い。由来はその流れをくむ術師だから、だな」「……つまり、『水流術師』である綾は、水の精靈とメインに契約していく、風妖精のルキアとも契約してること?」

「『名答』

綾は軽い拍手を美咲に送つた。それを見てようやく鳴海が動く。

「……俺の、勘違いだつたつてことか?」

「いや、僕の言葉が足りてなかつただけだ」

そして立ち上がつた綾は、そのまま襖の前まで歩いて行きながら言った。

「今日のところはここまでにしよう。……ルキア! いつまでも拗ね

てなごで出でるご。お出のじりに行へや」

『 』

ぴょこん、と襖の向こうから飛び込んできたのは、美咲が全力を
持つて投げ飛ばしたルキア。

そして廊下に出ていく綾を鳴海が慌てて呼び止める。

「おい！ おた質問は答えてないだろ？」「何？」

「紅い石のことだよ。」

「ああ……あれか。

賢者の石？

「ええええええええええええええ——?」

悲鳴寸前の叫び声を上げる美咲と鳴海を無視し、「じゃあ揚羽さん。あとはよろしくお願ひします」

「ほーほーい。任されましたー」

そう、綾と入れ替わりに入つて来たのは、少し前に立ち去つたはず揚羽だつた。

2.16 階位（後書き）

説明だけで読みにくくてすみません。分かりづらかった方は下をお読みください。

四大元素について

- ・精霊術の属性のこと。

- ・地、風、火、水の四つである。

五行について

- ・呪術の一種である、陰陽道での力の区別。

- ・木、火、土、金、水の五つである。

階位ランクについて

- ・一人の精霊と契約している精霊術師を『陣術師』と呼ぶ。

・一人以上の精靈と契約している精靈術師を『流術師』と呼ぶ。

・『流術師』は、基本的にメインとなる精靈（一般には先に契約した精靈）の属性で呼ばれる。

例

風の精靈だけと契約したあと、水の精靈と契約した術師は『風陣術師』。

風の精靈と契約したあと、水の精靈と契約した術師は『風流術師』。

上の説明でもわかりにくかつた方はメッセージをください。改めて後書き等で説明します。

多分わかりにくいだろうなあ……

一般的に知られているものをいじくっています。

「あ、揚羽さん！？」いつの間に…」

「少し前に綾くんの契約精霊さんが飛んで行つたくらいかしらねえ。私が来た途端に話を終わらせるなんて、綾くんの恥ずかしがり屋は治つてないのねー」

そう言つて笑う揚羽だが、目の前にいるにもかかわらず何故か彼女を見失いそうになる錯覚に襲われる。おそらくそれは、姿を現した後もずっと消えたままの気配のせいなのだろう。

普段は気さくなお姉さんだが、さすが当主・絢斗と情報部の長・旭に次ぐ実力者といったところか。今の美咲と鳴海では、姿を隠した瞬間に彼女を見つけることはできなくなるに違いない。

そんな影の実力者は、ひとしきり笑つたあと小さくため息をついた。

「それにしても、綾くんはすごくなつたわ。隠れてたのを気付かれるなんて私もまだ修業不足ね」

「え！ あいつ揚羽さんに気づいてたんですか！？」

「そうよ。じゃないと私に声をかけるはずないもの。それに、まだ、協会のことについて少ししか説明してないのに話すのをやめたのも、私がいたからなんでしょうねえ」

「なんでそんな、隠すようなことでもないのに……」

「あの子にしてみれば、気配を隠して近づいてくるような人は信用できないんでしきう。ちょっとした遊び心のつもりだったのに、綾くんに嫌われちゃつたわ」

遊びで気配消してやつて来ないで欲しい、まずはそれは自業自得だろう、と二人は思つたが口にはしなかった。誰でも命は惜しいからだ。

「それに賢者の石だなんて、どこで見つけたのかしら。危ないことしてないといいんだけど」

「ちよ、ちよっと待ってください。賢者の石なんて存在するんですか！？」

賢者の石 それは鉛をも金に変えると言われる道具。中世の時代、鍊金術師たちがこぞって造り出そうとしたが、誰一人として成功することはなかつたはずの、至高の貴石。石と呼ばれながらもその形状は一定ではなく、製造方法さえも不明。

故にそれは存在しないはずなのが……

「存在しないとは言い切れないわ。未だかつて誰も造れていないとはいえ、今、そしてこれから造られないとは限らないもの。だから、綾くんがそれを持っている可能性はゼロじゃない。ゼロじゃないなら……持つっていてもおかしくないわよね」

「……やけにあつさりと信じるんですね、揚羽さん」

「だつて、そう思わせるくらい今の綾くんは変わったから」とても嬉しそうに揚羽は言った。

昔から彼女にとつて美咲たち三人は妹や弟のようなものだった。もちろん三人にとつても揚羽は姉みたいな存在だった。だからこそ、綾が強くなつて帰ってきたことが人一倍嬉しいのだろう。

だが揚羽は不意に真剣な表情になると、つぶやくように言った。

「……ただ、変わることが良いことだとは限らないんだけど」

その時の彼女の目は、少しだけ哀しそうに見えた気がした。

2 17 揚羽（後書き）

冬休みがもうすぐ終わるので、また更新が遅くなると思います。

2章はあと数話で終わる予定です。まだまだ長いですが、どうか最後までお付き合ってください。

「あ、そういうこと、ええ、揚羽さん。聞きたいことがあるんですけど、暗い雰囲気を吹き飛ばすように、美咲が努めて明るく言った。

「ん、なあに、美咲ちゃん？」

思つた通り、すぐに揚羽も微笑んで返してきた。やはりこの女性が笑つていないとどうも落ち着かない。

「ずっと気になつてたんですけど……。綾、いえ絢文の今の名前つて『睦月綾』ですよね？」

「ええ」

「なんとなくなんですけど、『睦月』って名字に聞き覚えがあるんです。揚羽さんは何か知つてますか？」

「知つてるわ」

あまりにあつさつとした返答に美咲は一瞬目が点になつたが、はつと我に返ると瞼みつぶくような勢いで揚羽に言つた。

「知つてるんですかっ！」

「もちろん。……睦月は有名な呪術師の家系だつたのよ。呪いと呪いまじなに特化した、呪術師という名前に最もふさわしい一族だつた

「……だつた、ってことは何かあつたんですか？」

黙つて聞いていた鳴海がふと口を挟んだ。

それに対して、揚羽はゆつくりうなずく。

「その通り。睦月は今から数年前、一族全員が行方不明になつたの

「一人は、『守護十二家』つてわかる？」

「あー、聞いたことはある気が

「はい。呪術師の中でも特に強くて、様々な影響力を持つ十一の家のことですよ。昔聞いた時は確か、煉賀も入つていたはず」

「鳴海くん正解。でも今は色々変わっちゃつてねー。睦月もその

ひとつだったんだけど」

「けど？」

「……一族全員が行方不明なものだから、欠番、つまり十二家からなくなっちゃったの。それだけじゃないわ。残りの十一家、『煉賀』、『羽斑』、『成宮』、『遊姫』、『蒼葉』、『九世』、『空領』、『天照』、『城ヶ原』、『影森』、『深涙』のうち、天照、城ヶ原、深涙の三家は呪術師じゃなくなっちゃったし、成宮に至っては睦月と同じ欠番。守護十一家はもうほとんど機能してないのよ。一応交流が続いているんだけど……」

「ちょっと待つてください！じゃあ、あいつはなんで『睦月綾』なんですか！あいつは……煉賀の直系のあいつが、何故睦月を名乗っているんですか！？」

「ちょ、やめなよ鳴海！同姓なだけってこともあり得るんだから！」声を荒げた鳴海を美咲が慌ててなだめる。揚羽に対して怒鳴つても意味はないはずだ。

「……そろそろ、美咲ちゃんも鳴海くんも本当のことを探るべきかしらね」

「え？」

揚羽から放たれた言葉に、二人は動きを止める。

「それは

「彼女が言葉を続けようとしたとき、音もなく襖が開いた。そこにいたのは、わずかに田を細めてこちらを見据えている綾だった。

「あれ、綾なん……」

「風に人の呪力と血の香りが混じってる。……何か起きたらしい。誰か、死んだかもな」

至極淡々と、一方的に、そう告げた。

現実逃避に更新です。

これで二章は終わりです。前にあと数話と書いておきながら、すぐに終わってしまいました。もう少し長くなると思つてたんですけど。とはいって、ここまでお読みくださつてありがとうございます。できれば感想、評価等いただけると嬉しいです。

説明ばかりだった二章と違い、次の三章は色々動きます。新キャラも出ます。

今回のを読んで、あれ?と思つた方がいてくれるといいんですが…。

「ねえ綾一さつきのどういうことなの！？」

美咲が、自分の前を音もなく駆けていく青年に向かつて叫ぶ。
夜の帳が訪れた街中を美咲たちは駆け抜けていた。今しがた通り過ぎた商店街は昼の喧騒が嘘のように静かで、閉まりきったシャッターが連なりわずかに街灯に照らされるだけとなつて夜闇に浮かんでいる。そんな時刻。

午後九時を前に、不自然なほどの静寂に包まれた夜道。
美咲の手には呪符の束、鳴海の背には大太刀《椿》。そして二人を先導するように走る綾は腰に黒鞘の刀をさしており、三人の姿は完璧に武装したものだった。

彼らの走る速度は尋常ではなく、遅めの車ならとつに追い越すほどだ。とはいっても、普通人間がそんな速さで走れる訳がない。美咲と鳴海は術を使って跳躍力を上げ、歩幅を大きくすることで速度を上げているのだ。

「おい、無視かよ！」

鳴海が苛立つた声を上げると、ようやく綾は少しだけ一人に視線を向けた。呪術を使えない彼だが、こちらを見ている間も美咲たちよりさらに速く走り続けている。

部屋にやつてきて一方的に告げたあと外へ出た綾を追うように羽に指示され、言われるままに術道具を持つてついてきたは良いものの、本人がまったく喋らないので未だに状況が掴めないでいた美咲がそのことに気付いたとき、不意に彼が口を開いた。

「20時49分、北針マンション工事現場から人の気配が消えた」

「！」

「ねえ、それって今日“歪み”が起きるって言つた時間と場所よね！？」

「ああ」

一時間近く前に綾が探ししたのだから、本来なら当主の命令で赴いた術師が“歪み”を封じているはずだ。だが、今の時刻は発生時間で過ぎていい。既に“歪み”は生まれているのに、そこに人の気配がないということは……

「……じゃあ、そこに何があるってんだよ」

「歪みと、異形。あと 死体と屍肉と、血の海だ」

淡々と語られた言葉、それはあまりにも簡潔で生々しかつた。途端に美咲と鳴海の顔が暗くなる。

「……まさか、お前ら見たことがないのか？」

「……そんなわけないでしょ」

「……あるに決まってる。単に……嫌なだけだ。平気な方がどうかしてる」

美咲が、そして鳴海が否定する。何を、と綾は言わなかつたが一人にはわかつたようだつた。

「……となく悼ましそうな表情となつた美咲たちに對して綾はふ、と嘲るような笑みを浮かべ、言つた。

「それは」愁傷様。ここから先は、お前らひとつて 地獄だろうな

「え……？」

そう言つた直後に、三人は人払いと隔離を兼ねた結界を突き抜けた。その先には建設中のマンションや機械があるだけ……のはずだった。

そこには、異常なセカイ

むせかえるような血の香りと濁んだ死の匂いが、砂を巻き上げた風に乗つて広がつた。

3 2 死屍（前書き）

グロテスクな表現があります。苦手な方は『』注意ください。

3 2 死屍

それは、あまりにも濃密な“死”の気配。ここでは一瞬たりとも氣を抜くことは許されないと空気が物語つている。

「な……」

鳴海が発しようとした言葉は、息と共に飲み込まれた。同時に死臭をも勢い良く吸い込んでしまい、咄嗟に鼻と口を押さえる。が、ほとんど意味をなさないようだった。

絶句した美咲は、ただ呆然と目の前の光景を見詰めている。

それは

まず、先導していた綾から五メートルと離れていないところに赤い水溜まりがある。その中には引き千切られたような切断面を覗かせる一本の腕が落ちている。肩の部分にはなにもない。布切れがわずかにまとわりついている。その水溜まりから赤い筋が伸びている。その筋の先には目玉が転がりさらに向こうの押し潰された頭蓋を見ている。無色の液体と赤い液体と肉色の半液体の欠片レットが入り混じり凄惨なパレットと化しコンクリートの灰色の地面に人間色の炎を描いている。少し離れたところに上半身。外れた部品の断面から様々な中身が覗いて自己主張し溢れた薄紅の管が濡れて艶やかに光る。身体に敷かれた左腕はジグザグに折れ曲がって骨が頭を出し赤に良く映えている。色々なモノが散つて落ちて広がつて混ざつて転がつて砕けて破れて壊れて 嘰わされて、いる。

「危ない、美咲さん！」

「え？」

我に返つた美咲の目前には赤黒い何かが迫っていた。だが反応が遅れ、動くことができない。そしてそれは美咲に触れ

「え、きやあつ！」

突然弾き飛ばされ、美咲は尻餅をついた。

宙を見上げる彼女の目に映つたのは三つの眼を持つ、赤くぬれた漆黒の獅子。そしてその顎が大きく開かれ牙を剥き出しにしたままもがいている様子だった。

どうにかして動こうと身体を奮う獅子 恐らくは異形 から赤い零が振り撒かれる。だがそれは美咲を濡らすことはなかつた。何故なら………… 異形の獅子と彼女の間には薄青く透き通る壁が現れ、それから伸びる幾本もの鋭い棘が異形を串刺し空中に固定していたのだ。やがて動きが弱まり、痙攣を繰り返した後動かなくなる。

異形の獅子が消滅すると同時に、その壁は緩やかに溶け崩れ地面に染み込んでいった。それにつれて、いつの間にか乾き切つていた美咲の足元は何事もなかつたかのように元の姿を取り戻す。まるで手品のような、わずかな時間の出来事だった。

「あ、………… ありがとう」

埃を払いながら立ち上がつた美咲は氷の壁を出現させた人物に礼を言つたが、言われた本人は当然であるかのごとく無視した。

綾の見ている方向を美咲と鳴海が見やると、そこには“歪み”があつた。

直径一メートルほどの、夜闇よりも暗い穴がぽっかりと宙に浮かび、渦巻くようにうごめいている。

「…………」

無言で《椿》を構える鳴海と、呪符を扇形に広げ持つ美咲。二人に緊張が走る中、空気が動く。

「来た」

綾が端的に言つた瞬間、“歪み”から水柱のように闇が吹き出した。

そして闇は爪の形を取り、腕が現れ、角が突き出し、牙が生え鱗が付いて

瞬く間に歪な龍へと変貌した。

異形の龍は“歪み”から巨大な半身を突き出し、首を大きくもたげた。ところどころ濃さに違いはあるものの、全て黒一色で作られた身体は見上げるほどだ。

グウウオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!

天を引き裂くかのように、異形が吼えた。強大な音の波動に周りの音が消え去り、ビリビリと空気や地面が震える。隔離の結界が貼られていなければ、小規模ながら地震とされていたかもしれない。

一瞬飛ばされそうになった美咲を鳴海が支え、二人はなんとか耐え切る。たが美咲たちよりも龍に近いはずの綾は、顔色ひとつ変えずに刀を鞘ごと地面に突き立てバランスを保っていた。

余韻が残る中、音が戻った結界の内側には悲惨な光景が広がっていた。

吹き飛び、地面に当たった衝撃で折れ曲がった鉄骨。土砂にまみれて転がる木材の数々。瓦礫の山と化した建設途中のマンション。そして屍体の部品は血の線を描きながら転がり、フェンスにぶつかって嫌な色を広げていた。

唖然とする一人を他所に、異形は最も近くにいた綾を喰らいにかかる。綾は強く地面を蹴り、異形を避けると同時に大きく横へ跳ぶ美咲と鳴海の襟元を掴みながら。

「きや　！」

「うおっ　！」

その直後、巨大な胴体が一瞬前まで美咲たちがいた場所を廻り払つていった。

「まったく、こんな状況でぼんやりするなんて死にたいのか」

何度も跳躍し、黒い龍から距離をとったところで美咲と鳴海は地面に放り投げられた。呆れた、と態度で物語る綾を睨みつけながら

一人は立ち上がる。

「……それにしても、投げることはないんじゃないの」

「なら、お姫様みたいにすればいいのか？守られるしか能がない役立たずとして扱つてほしいと？」

「誰もそんなこと…！」

「お前が言つてるのはそういうことだ」

「なつ……」

「美咲さん！言い合いでいる場合じゃないです、よつ！」

異形の突撃ですれ違いざまに迫る爪をよけながら鳴海が叫ぶ。巨体の割にかなり素早く、軽々と避けていた綾が信じられないくらいだ。

「食らえつ！」

“歪み”に戻るために龍が身を引いた瞬間、反射的に鳴海は抜き身の『椿』で切りつける。

切り飛ばされた異形の腕の一部が落下し鈍い音を立て、そのままわずかに痙攣したあと動かなくなつた。

「鳴海さすが！」

「危ない下がれ！」

二人分の声が重なつて響く。直後黒い腕の欠片が大きく震え、溶けて闇のよう暗い液体となつて地面に広がつた。そして次の瞬間ににはシャボン玉のような塊となり、吸い込まれるように異形へ混ざつていく。

だが、咄嗟に跳んで後ろに下がつていた鳴海は液体が触れた場所を見て絶句した。彼の視線の先、そこは腐蝕し溶け崩れていた。

「くそつ、洒落にならないぞこれっ！」

再び襲いかかってきた異形を跳び避け、続いて振るわれた爪を『椿』で受け止める。ズアリッ、と嫌な音が響き、鳴海は一旦綾達がいる所まで退いた。刃が駄目になつたかと思ったが、削っていたのは『椿』ではなく黒龍の爪のほうだったようだ。大太刀には傷一つついていない。

欠けた爪は先程と同じように地面を溶かし、しばらくすると異形の龍に取り込まれ爪が再生する。どうやら強力な酸のようなものらしいが……。

「あの酸みたいなのよりも再生するのが厄介ね……」

「そう、ですね」

眉を寄せてつぶやく美咲に鳴海が同意する。それをどうにかしないとこの異形は倒せそうになかった。それに「倒すとしても、『歪み』を先に封じないと意味がないな」「わかつてゐるわよそれくらい」

綾の言葉に若干むつとする美咲。再会してからこの方子供扱いされてばかりだ。確かにこちらのほうが年下なのに間違はないのだが、小さい頃と同じ扱いをされるのは嫌だつた。

「……その方法が思いついたら苦労はしないよ」

「それにこの異形、『歪み』を護つてゐみたいだ……」

鳴海の言う通り、漆黒の龍は全身を現したあと『歪み』を隠すようになっていた。攻撃をする時も最低限の距離を動き、片時も『歪み』から離れようとしない。

「方法がないって訳じゃないけど

ぼそりと呟かれた綾の言葉を、美咲は聞き逃さなかつた。

「え、あるの！？」

「そりやあるよ。あれを“歪み”から引き離して“歪み”を封じたあと再生できないくらいに粉微塵にすればいいんだろう?」

「……だからそんなことできたら苦労はしないって」

『粉微塵にならできるけど』

『え?』

声のした方向を見ると、いつの間にかルキアが綾の肩に座つていた。風妖精はさも当然そうに言つ。

『マスターが私の力を使えばあんな異形一瞬で砂にできる。それにマスターには水の精、もがつ!』

『余計なことは言つなんルキア』

『むぐ~、むむむぐむむむつー』

『別に今言つことでもないだろ?つ?』

『むむむ……』

『なあ?』

『…………』

『よろしい』

ルキアの口を塞いでいた手を外すと、綾は優しく彼女の頭を撫でた。ルキアは膨れつ面をしていたが、少し恥ずかしそうだ。……美咲たちには綾たちの会話の意味がまったくわからなかつたが。そんな彼らに月の光を遮つて影が落とされた。

『へ?』

『あ!』

『うわあー!』

『……ああ、忘れてた』

そう綾にはつきりと言われた異形の龍は、四人(?)を噛み砕かんとばかりに大きく顎を開き

『……いけ』

風の刃に首を切断された。

『「「た、助かった」』

息をついた美咲たちに向かつて綾は、

「胴体から離れたから溶けるぞ」

と言つて無情にもさつさとその場を離れた。

足元には異形の首が転がり、溶け始めていた。美咲と鳴海の必死な悲鳴が、結界にひびいたのはその直後だつた……。

黒い液体からなんとか逃れた美咲と鳴海。息を弾ませている一人の隣で綾がゆっくりと息を吐いた。

「……ふう、危なかつ」

「「あんたが言うか！？」「

一人の声が重なるが、綾は気にせずルキアに話しかかる。「にしても風じやちよつと無理そうだな。切り刻んでもまた溶けて復活しそうだし」

『ですね……。今のが効かないことは、風での攻撃じゃ倒せそうにはないです』

「つてことは“あつち”か……」

「ちよつと綾。結局あれを引き離して“歪み”を封じるついでやせりびりうわの？」

会話を遮り、美咲が言った。『の一人（？）を放つておいたら延々と話し続けていそうだ。危機的状況にある今、悠長に会話している場合ではない。

「そう難しいことじやない。囮を使って引き付けつつ、“歪み”から遠ざかっただ瞬間に封じればいいだけだらう」

確かにそうだ。あの異形が“歪み”的近くにいるからこそ厄介なのであって、離れてしまえばただいつも通りに封じることができるのでから。だが……

「まあ、その方法なら確実だらうけどさ……」

「……囮って、誰がするんだよ」

「やつ、この作戦に必要不可欠なもの。それは囮。

当然誰もやるうとする訳がなく、再び攻撃してきた異形の龍を避けた三人は全員ばらばらの方向に散った。“歪み”と美咲たちを頂点として、異形を囮のように四角形が描かれる。黒い龍をやや横側から見据えながら美咲が言った。

「「このままじゃ、おんなじことの繰り返しよね……」

その言葉に、美咲の反対方向にいる綾が言つ。二人の距離はそれなりに離れているのだが、何故か普通に聞こえているらしい。

「だつたら美咲、お前が囮をすればいいだろつ

「冗談！！絶対イヤ！」

「美咲さんにそんな危ない」とさせれません！』

「じゃあお前がやれ』

綾の言葉の矛先が鳴海に向いた。突然だつたためか一瞬詰まつたあと、噛みつくように言つ。

「はあ！？お前がしろよ！』

「どうやら敵さんはお前をターゲットに決めたらしいぞ』

「そんなわけ……つて、え？』

綾に反抗したものの、ふと異形に田を見開いた。

直後、黒い龍の正面にいた鳴海は大きく後ろに跳んだ。一瞬にして鳴海が移動する前にいた場所の地面が抉り取られる。そしてそのまま鳴海に突っ込んできた。

「なつ！？』

慌てて回避する鳴海を執拗に追いかけ回すように攻撃する異形。鳴海はできる限り小さな動きで避けながら、『歪み』から離れるよう走り出した。

後方から淡々とした声が聞こえる。

「その調子でよろしく』

「不本意極まりないけどな！？』

綾に対して叫ぶ鳴海だが、徐々に異形の龍を引き連れて離れていく。一応囮を務めはするらしい。

「じゃあ、こっちも始めるか』

刀は抜かず、いつの間にか片手に三本ずつ計六本の透き通る剣を持つて、綾が呟いた。

透明な剣はざら氷ができる、「お互いが軽くぶつかる度に澄んだ硬質な音を立てる。

「美咲」

「な、なによ」

急に話しかけられ、なんとななく警戒しながら美咲は応えた。綾が続ける。

「“歪み”の封印は頼んだ。僕にはどうにもできないからな」

「え、私が！？」

「お前以外に誰がいる」

突然のことに呆然とする美咲。その様子を見て綾は溜め息を吐いた。

「あのな……、僕は呪術を使えないんだ。一時的に抑えこむことはできるかもしれないが、封じるのは無理だ」

あまりに堂々としているので忘れていた。綾は呪術が使えない。呪術抵抗がない彼には、呪力を扱うことさえ危険が伴うのだ。つまり、“歪み”を封じるのは美咲の役目。

「わかった……。私の力、しっかりと見ときなさいよ。あんたがいなくなつてから、どれだけ強くなつたのか！」

「ああ、もちろん」

綾の返事を聞くと同時に、美咲は駆け出した。目指すのはもちろん“歪み”。少しずつ巨大化する黒い円を、一刻も早く封じなければならぬ。

美咲は走りながら、左手に持つた何十という符の中のうち五枚の符を引き抜いた。自身が用意できる符の中でも最高クラスの呪符で、五行の力をこめてある。

「まず……木！」

投げられた呪符は矢のように飛び、“歪み”の上端で静止した。

「次 火！」

もう一枚、今度は右上で止まつた。

「 土！」

続いて右下で動きを止める。

「 金！」

左下の空中で固定された。

「 ラスト 水つ！」

美咲が叫び、呪符が左上に浮かんだ。が、まだ完成ではない。この五枚をベースにして術式を編む必要がある。

大きく深呼吸をすると、美咲は柏手かしわでを打つた。

パン、パンッ！

その音が辺りに染み込むようにして、周りの空気が変わる。

神社などで行われる柏手は、本来不浄を追い払う為のものだ。音の届く範囲を浄化し、守る為の結界。それを行うことによって、術は安定した効力を發揮できる。

柏手の音に反応したのか、異形の吼える声が聞こえた。だが美咲はそれを無視する。今しなければならないのは、“歪み”の封印ただ一つのみ。

「木は力を奪いて土に克かつ。よつて五行は流転す」

美咲は“歪み”を囲む呪符のうち、上 木の符を指差すと、右下 土の符に向かつて移動させた。それをたどるように白い直線が一本呪力で描かれ、木と土の呪符を繋いだ。

3 6 術式（後書き）

中途半端ですみません。もう少しで異形との戦闘は終わりです。

「土は力を留めて水に克つ。よつて五行は流転す」

次に、火の符の位置にある指先を左上に動かす。すると先程と同じように白い線が跡を辿り、呪符同士を繋いだ。

「水は力を消し去り火に克つ。よつて五行は流転す」

続いては真横 右上の火の位置へ。やはり指の動きの通りに繋がつた。

「火は力を溶かし金に克つ。よつて五行は流転す」

手は流れるように左下に移る。白い軌跡を残し、金の呪符へ。

「金は力を刈り取り木に克つ。よつて五行は流転し」

左下から上へ。金から木へ。指先が線を引き、五枚の呪符を頂点とする星が完成した。だが、術式はこれで終わりではない。五芒星

セーマンは呪術、主に陰陽道の基礎ではあるが、巨大な“歪み”を封じるにはこれだけでは足りない。

ならば必要とされるのは封印の術。それをセーマンに重ね、ようやく術は完成する。

「その力全てが渦巻く最果てに於いては何も意味をなさない。嘗ては神と崇められし、瀕死をも留めたまう！」

声を呪力にのせ、術式に力を加える。効力が強いぶん編むのにも時間がかかる術だ。普段ならもつと小さい術でも十分に封印は行えるし、そもそも大きな術を使う時間がないのだが、未だに肥大化し続ける“歪み”を封じるため、隙を作るのは承知の上だつた

今ならそんな心配は杞憂だと笑い飛ばせる。何故なら……

「木火土金水、相克相生すること幾何か。力は檻に、知は鎖に。重ねられしは不動の束縛」

美咲は言葉を紡ぐ口と文字と線をセーマンに描き加える手とをそのままに、一瞬だけ視線を動かした。

その先にいるのは美咲の幼なじみであり、従兄弟である一人。黒

い龍を引き付けて大太刀の振るい闘う鳴海と、時折離れようと/orする異形をガラスのような剣で地に縫い止め或いは切り裂く綾。

こうして三人が同じところで協力しているなんて夢みたいだ、と思った。呪術が苦手な鳴海とも違い、呪術そのものを使うことさえできなかつた綾 紗文と、術師として共にいられることが嬉しかつた。

『じゃあまたな！』

小学校に入る前、羽斑の家に預けられるとき鳴海はそう言った。三人が一人になつた。

中学校に入る前の年、紗文がいなくなつた。

二人が一人になつた。

けれど、今は三人。幼き日を共に過ごした彼らがここにいる。なら、大丈夫。異形の相手は向こうの二人の役目、なら自分の役目は……“歪み”を封じることだけ。

美咲は指を振るい、術式を描き終えた。同時に最後の言葉が発さられる。

「森羅万象、全ての理じぶわをもつて歪曲へんくされし空間を封する！」

凛と叫び、美咲は術を完成させた。

美咲が術を編み始めたころ 鳴海は異形の攻撃を避け、或いは太刀で受け流し、また或いは徐々に反撃を加えていた。

いきなり囮にされたときは動搖したが、少し時間が経ち冷静を取り戻してくると相手を攪乱するように立ち位置を調整しながら少しづつ“歪み”から離れていく。一気に動くと警戒されるかもしれないで一度に移動する距離はわずかだが、確実に黒い龍は“歪み”に構わず鳴海を付け狙うように動き始めていた。

そうしているうちに、改めて愛刀である『椿』の変質がはつきりと感じられた。今までよりも自分の思った通りに動く太刀に、感嘆とわずかばかりの恐怖が生まれる。

第一、異形を切り付けて酸のような液体が付着しているはずなのに、溶けるどころかむしろ振るう度に鋭さが増していくようだつた。銀色の刃が月明かりに煌めき、鳴海の動きに合わせて光を散らす。そもそも鳴海は呪術師の中でも刀剣術に特化した羽斑の家に幼い頃から預けられていたのだから、刀の扱いは並みではない。それどころか一流と言えるだろう。力の流し方、無駄のない動き、速さに力、全てが揃つてこその一流。だからこそ 煉賀に戻り、次期当主である美咲の護衛となりえたのだ。その実力を、煉賀で知らぬ者はいない。

唯一の欠点は感情的になりやすいことだ。綾に負けた理由は自身にあることを鳴海は理解していた。そして、慢心が己の中についたということも。

異形を避け続ける鳴海の動作は、徐々に洗練され軽やかになっていく。まるで舞っているかのごとく、流れるような動き。今や黒い龍の攻撃に沿つて鳴海が移動するのではなく、鳴海の動作に合わせて黒い龍が動くようになっていた。

時折、綾が氷の剣で異形を切り裂き、切斷面を凍らせていくのが視界に入る。鳴海とは別に、確実な方法で少しづつ力を削いでいるようだ。……おそらく、倒さないようだ。

綾が異形の龍を倒そうと思えば倒せることを、鳴海は直感的にわかつていた。探知の時に巻き起こしていた風、あの全てを攻撃に回せばルキアが言つていたように粉微塵なんて簡単だろうし、まだ綾は本分であるはずの水の精靈の力をほとんど使つていない。あの口ぶりからしてルキアの力よりも強いのだろうから、この異形を再生させることなく倒すことはできるはずだ。

ただ彼がそれをしないのは、美咲が“歪み”を封じるまでの時間稼ぎだから。“歪み”を封印しない限り無限に現れる異形を相手にするのは無駄でしかない。そのため、先に“歪み”を塞ぐのだ。だが……、鳴海の囮も、綾の時間稼ぎももう終わる。

「森羅万象、全ての理をもつて歪曲されし空間を封する！」

美咲の声が響き、辺りが一瞬太陽よりも眩しい白い光に包まれる。やがて夜に戻った視界の中から、黒い円は消え失せていた。

白い光が消え、夜闇が戻つた世界の中。三人は再び一ヶ所に集まつていた。

“歪み”が消え、安定した空間には似合わない黒き龍を見据えた綾は、硝子のように透明な剣をやらりと構え、言い放つ。

「さて……さつさと終わらせようか」

伴われたのは仮面の「とき無表情。行わるのは冷酷無悲な攻撃。無言で加わる美咲と鳴海にさえ田を向けることなく、綾は刃を以て異形を蹂躪し始めた。

綾が片腕を振るうことに、氷の刃が投擲され黒龍を穿ちその行動を阻害する。また逆の腕が動けば、その度に風の刃が巻き起こり異形の手足を切り飛ばす。そして、その一部が黒い液体に変わる前に氷の剣が放たれ欠片を凍らせる。それを風が襲い、灰塵に還す。

「はああつ！！」

綾の攻撃の合間に鳴海が『椿』を用いて斬撃を繰りだし、黒龍を引き付ける。何度か切りつけるうちに、傷の回復には深さに関係なく一定の時間が必要らしい上に、回復するにはわずかに動きを止めなければならぬということに気付き、鳴海は動きを速めた。

「火行二式、火舞羅！」

美咲はなめらかに呪術を編み、異形の胴体の一部を爆碎させて抉り取る。火行の術ならば液体に変わる間もなく消し飛ばせるため、時に鮮やかな火の粉を辺りに散らしながら術を放ち続ける。

幾度となく同じことを繰り返し、対する異形の反応や動きを注視していた綾はある一点を見て目を細め、口を開いた。

「首の中間だ！僕が切り裂いたあと一瞬見える白い玉を壊せ！」咄嗟に反応したのは鳴海だった。攻撃する手を止め、身を翻し異形の正面へ駆ける。

美咲は半瞬遅れで気付いたが、その時には既に鳴海が駆け出していた。異形の手が鳴海を追うように動くのが見え、美咲はすぐに術を放ちそれを邪魔する。

「爆！」

黒い龍の爪が小規模の爆発によつて弾かれ、一瞬怯んだ隙に鳴海は飛び、首筋に向けて太刀を構えた。直後、一陣の風が吹き付け、異形の首を大きく裂く。そして切り開かれた場所から白銀の球体が覗いた。

だがそれが見えた瞬間、異形の龍が溶けた。

「なつ…………！」

鳴海が動きを止めた。その一瞬に輪郭が崩れ、爪が、手が、牙が、頭が形を無くしどろりと姿を変えていく。やがてそれは完全に黒いジエル状の塊と化し、真下にいた鳴海へと落ちて

「鳴海いいつ……！」

美咲が叫び、駆け寄ろうとしたが、その腕を綾が掴んだ。

「放してよ！ 鳴海、鳴海がっ……！」

「落ち着け」

「でも…………！」

鳴海を飲み込んだ黒い塊を綾が覗むように見つめていると、それはゆっくりと溶け崩れ、端々から地面に吸い込まれるようにして消えていった。そして、全ての液体がなくなつたそこには、呆然と立ち尽くす鳴海が。

「鳴海っ…………え？」

鳴海の周りには、彼を取り囲むようにして薄い透明な膜らしきものが張られていた。美咲が走り寄り恐る恐るそれに触れると、ぱちりとシャボン玉が弾けるような音と共に消え失せる。

「今…………綾、か？」

「違う。僕じゃない」

鳴海の問いかけに返されたのは、否定。

「じゃあ誰が

「

「私ですよ」

美咲と鳴海が勢いよく振り向く。その視線の先、工事現場の入り口から現れたのは一人の若い男性。

ゆっくりと近寄る男性を警戒する一人を後目に、綾が問う。

「貴方は？」

「ああ、申し遅れました」

男性は茶色がかつた黒髪を揺らして三人に会釈をすると、顔を上げた。

「守護十二家が一つ、結界術師『空嶺』の術師にして現当主の息子、空嶺陽^{ひなた}方と申します。初めまして、煉賀の皆さま」

そう言つと、穏やかな笑みを浮かべた。

「うー、よね？」

「……地図によるなら、ですけど」

異形との戦闘の翌日、美咲と鳴海は隣の市にやつて来ていた。

一人が立っているのは広大な敷地を持つ日本家屋の門前。正面に見える門の横には『空領』という表札がかかっており、確かにここが二人の目的地であることを示している。だが……

「で……家はどー」

「……見事に、森しか見えませんよね……」

開け放たれた木製の門。その向こう側に広がっていたのは、視界を覆い尽くす緑の木々だった。山奥でもこうはならないだろう程の、獸道さえ存在しないように密集した様々な植物たちが顔を覗かせている。

そもそも何故美咲たちがこんなところに居るのかといふと、その理由は昨夜にあった。

「……守護十一家の空領ー？」

鳴海が驚きの声を上げる。出かける前に聞いたばかりの家の人物に会うことにならうとは、まったく予想していなかつた。予想できるはずもないのだが。

「ええ。と言つてもまだ端くれですよ。あなた方は？」

どことなく優雅な陽方の動きに思わず見とれてしまつていた美咲が慌てて一礼して言つ。

「わ、私は煉賀の当主の娘で煉賀美咲です。それと、隣にいるのは

…

「煉賀家当主の甥で、鳴海とります。美咲さんの護衛です」

美咲の言葉を引き継いで鳴海が名乗る。すると、一人の紹介に陽

方の表情が驚きに染まった。

「煉賀の『ご令嬢と直系の護衛ですか。まさか』こんなとこでお会いできるとは……」

「い、いえそんな『ご令嬢とかいう大した者じやないですよーそれに、貴方も…』

「貴方じやありません」

「え？」

いきなり遮つてきた陽方に、美咲がきょとんとした顔を向ける。それに微笑み返すと陽方は優しく言つた。

「貴方、ではなく陽方とお呼びください。私も、名前で呼びますから。美咲さん？」

「は、はい。わかりました。えつと…陽方、さん。陽方さんも空嶺の…『ご子息じやないですか。そんな、改まつたのはちょっと…』『ああ、失礼しました。どうも癖になつて…』あの、もう一人の方は？」

陽方が目を向けた先に美咲と鳴海も視線を移すと、少し離れた所で綾が黙つてこちらを見ていた。その表情はいつの間にか微笑に変わつている。

「あ、えつとその、綾は…」

「初めてまして、空嶺陽方さん。僕は睦月綾、『協会』の精霊術師です」

「協会、！？」

陽方の顔に驚愕と嫌惡の色が一瞬だけ浮かぶ。だがすぐさま何事もなかつたように美咲たちの方に振り向き、口を開いた。

「協会、……ということは、煉賀の依頼ですか？」

「……はい。探知術を行える人がいないので、代理を頼んだんです」

「そうですか……」

直接本人に聞けば良いのに。そう思いながらふと美咲が鳴海を見ると、少し複雑そうな顔をしているのが見て取れた。

「美咲さん」

「え、なに？」

急に声をかけたのは綾だった。微笑みを浮かべたままゆっくりと美咲に近づき、すれ違いざまに素早く美咲の耳に口を寄せる。美貌と言える整った顔が間近に迫り、美咲の顔が赤くなつた。そして彼は

「後のこととは任せた。僕は帰るぞ」

そう囁いて、未だに凄惨な光景の残る工事現場からあつという間に姿を消した。

「はあ！？」

美咲が我に返つたのは、綾の姿が見えなくなつてからさらに数分後のことだった。

綾が立ち去ったのち、遅れて来た揚羽たち情報部の術師に後を任せ美咲と鳴海、そして陽方は煉賀家当主である絢斗へ報告を行なつた。そして絢斗の意向により、空嶺に協力を仰ぐため礼を兼ね翌日二人は空嶺の家を訪れたのだが……

「確かにお昼過ぎに来てください、って陽方さん言ってたよね?」「そのはずですけど……えっと、今一時半だから、普通にお昼過ぎですよ」

「本当にここなのかな?」

門より先に見えるのは緑の木々ばかり。人が住んでいるとは到底思えない有り様だった。

「一応教えてもらつた通りに来ましたし、表札もあるから場所は間違つてないはずです」

「だよね。……どうしよう」

二人そろつて途方に暮れる美咲と鳴海。しばらくして、美咲が口を開いた。

「結局、綾来ないみたいだね……」

一応後から電話して一緒に行つてくれないか尋ねたのだが、『用事があるから』と切られてしまった。(しかも掛け直したところ携帯の電源ごと切られていた)

「……来なくてもいいですよ、あんな奴」

不機嫌そうな声色で鳴海が応える。その目にはわずかに剣呑な光が宿つていた。

そんな従兄弟の様子に美咲は呆れたように溜め息を吐く。それを見て鳴海が少し眉を寄せ、あさつての方向を向いた。

沈黙が広がり、居心地の悪い空気が一人の周りを漂う。穏やかな

昼下がりには似つかわしくない雰囲気のせいか、街の喧騒がやけに遠く聞こえた。

「…………美咲さんは」

意外にも、先に話しかけたのは鳴海だった。

「どうしてあいつと普通に話せるんですか」

「…………どういう意味？」

「…………何年も行方不明で、久しぶりに帰つて来たと思ったたら名前が違うだの精霊術だの勝手なことばかり。美咲さんに心配かけてたのまったく理解してない。…………俺の記憶が正しければ、絢文はあんな自己中な奴じゃなかった。落ち着いてるのは変わつてないけれど、喋り方も違うしそれに」

「…………もつと穏やかで優しかった？」

一瞬、鳴海は目を見開いて美咲を見、直後慌てて目を逸らした。その様子から自分の言葉が正しかつたとわかり、思わず美咲は笑つてしまつた。

どうやら、鳴海の綾に対する反発は昨日の試合が原因のものではなく 幼なじみだった絢文との違和感のせいであるようだ。

遠くを見ながらも、突然笑い出した美咲が気になるのかちらちらと視線を向けてくる鳴海を視界に入れながら、美咲はゆっくりと口を開いた。

「私はさ、確かに心配もしたし突然すぎてずっと怒つてばっかりだつたけど……落ち着いたらすごく安心したんだよね」

「…………」

「良かつた無事だつたんだ、つて。それに、私は綾の今の性格嫌いじゃないんだ」

「…………どうして」

「昔、綾が……絢文がいなくなる少し前なんだけど…………」

3-1-2 追憶（前書き）

過去の話。

絢=絢文=綾のことです。

『縮一。お一せー!!』
『おー!!』
『おー!!』

ある日の夕方、美咲は絢文を探して家の中を歩き回っていた。ついさっき、夕食を運ぶ手伝いを一人にしてほしいと揚羽に頼まれたからである。

今日は月に一度、煉賀家で会合が行われる日で煉賀に属する呪術師が数多く集まっている。そのため普段の人数ではまかない切れず、美咲たちも時折手伝っているのだ。

『もー、どうしたのよー』

いつもなら小学校に行くとき以外は引きずりでもしない限りめったに部屋から出ないのに、この時に限って絢文の姿は見当たらなかつた。早く行かないと、ただでさえ忙しい揚羽に心配をかけてしまうだろ？。

むー、絢ー…………あれ?

様々な部屋を覗きこみながら廊下を歩いていふと、どたん、ばたん、と物音が聞こえてきた。耳を傾けると、どつりや、中庭のほうから音がしているらしい。

中庭には絢文が世話をしている花壇があつて、たまに一人でばたばたと土や肥料を運んでいる。部屋にいないのはその時多いため、今日もそうなのかと思い美咲は絢文を呼びながら庭へと歩いていった。

『あーやー！ 楊羽さんが呼んでるよー。』

その直後、庭から小さな声が聞こえた。

やべ……誰か来

……ぐそ……けばいい……
……いーはやく……

……だよ……

そしてたくさんの足音らしいものが聞こえなくなつてすぐ、美咲は中庭に到着した。

『あ、あやつ！？どうしたのそれ！？』

『え、ああ……美咲』

どこかぼんやりとした絢文は少し困ったような笑みを浮かべ、美咲の名前を呼んだ。庭の桜にもたれかかっているその体は泥と土だらけで、肌にはところどころ血がにじんでいた。半袖半ズボンからのびた手足には何ヶ所か痣らしいものも覗いている。

『いや……、ちょっと猫を助けようとしたら木から落ちちゃてね。助けた猫には逃げられるし、散々だよ』

そう言つて苦笑する絢文に、美咲はどことなく違和感を覚えた。辺りを見回してみると、絢文一人分とは思えない数の足跡が地面に残つている。

『ねえ、絢。これーー』

『そこ、さつきまで他の術師の子供たちが遊んでたんだよ。僕の手伝いをしようしてくれた子もいたんだけど、美咲の声に驚いて逃げちゃつた』

『へえ、そなんだ……。そうだ！絢、ケガつーー』

『大丈夫、大したことないから』

美咲に何か言う暇を『ええ、先回りして答える絢文。ますます怪しかつたがそれよりも……』

『つ、ちよつ、ちよつと美咲！？引っ張らないで、いたつ！』

『それのどこが大丈夫なのよ！揚羽さんに手当してもらつんだからさつさと来る！』

『でも、揚羽さん今忙しいんじや……』

『そんなことどうでもいいの！絢の手当でが優先！！』

自分の本来の目的を忘れ、絢文の腕を引っ張りながら屋敷へとず

んずん進んでいく美咲。絢文は最初こそ抵抗したものの、土を払いながら大人しくついていった。

屋敷に戻り、入り組んだ廊下を揚羽がいる台所を目指して二人は黙々と進んでいった。美咲が先に歩いて絢文がついていく。いつもど同じ構図なのになぜか今は息苦しくて、美咲は足早に台所へ歩いていった。

その途中、ある部屋の前を通りがかったとき、ふと立ち止まってしまった。その部屋——客間から、絢文の名前が聞こえた気がしたのだ。

3-1-2 追憶（後書き）

久々の更新です。まだテスト残っています。何してるんだ私……

過去のお話はもう少し続きます。

『美咲、行かないの?』

急に立ち止まつた美咲に絢文が問いかけた。

『え、あ、…………ごめん、ちょっと落とし物したみたいだから先行つて』

『一緒に探そうか?』

『大丈夫、だいたいわかるから。絢、ちゃんと手当をしてもらいたいな』

『はいはい』

絢文はそう言つと美咲に背を向け、廊下の角を曲がつて行つた。

『…………』

黙つて客間の戸を見つめる美咲。落とし物と言つのは嘘で、ただやけに気になつたのだ。

それに、絢文の様子がやはりおかしい。いつもならあれくらいの嘘はすぐにばれてしまうのに、気づいたようには見えなかつた。そしてその理由はこの客間から漏れる会話にあるように思えた。

――時に、呪術師は鋭い勘を發揮することがある。遠い昔、陰陽師が星を読み未来を見ると詠われたなごりなのか、得てしてその血を引く呪術師たちの直感は確実と言つていいほど、真実を見抜くことに長けていた。そしてそれは、美咲も例外ではない。

ただ、真実を知ることが良いものであるとは限らないといつだけで……

美咲はできるかぎり気配を殺して客間の戸に近付き、耳をすませた。

『…………しかし、あれが煉賀を継ぐことができるのでしょうか』

『継ぐ? そんなことがあつてたまるものか! あやつは当主の奥方の命を奪つて生まれた鬼子ではないか!』

『それでも、煉賀の直系であることに変わりはない。当主に必要な

のは統率力だ』

『……私には、統率力があるとは思えませぬがね』

『力なきものは、いつの時代も認められない。……あなたがたも見
たのでしょうか。庭で子供たちは何をしていましたか?』

『……』

『やはり鬼子は鬼子だ。役にもたたない者を、何故御当主はいまだ
に煉賀に置いておられるのか……』

『その理由は明白でしょう。あれが芙美さまとの間に生まれた子供
だからですよ』

『愛した者との子は、可愛いものか。それが奥方がお亡くなりにな
る原因となつたとしても……』

『いや、それだけが理由ではないでしょう』

『といふと?』

『美咲さまですよ』

突然出てきた自分の名前に、美咲は思わず声をだしそうになつた
が慌てて両手で口をふさいだ。

その間にも、声たちの会話は進んでいく。

『絢文さまが次期当主候補から外れるとしたら、直系は美咲さまと
鳴海さまだけになります。ですが鳴海さまは剣士としての素質が強
かつたため現在も羽斑に預けられています。つまり、呪術師として
最も才能があるのは美咲さまです。その美咲さまが懐いてらつしや
るのは——』

『……あやつ、といふことか』

『はい。……幼い頃から従兄である彼を兄と慕い、それは御当主に
引き取られてからも変わらず今に至ります。美咲さまから絶対的な
信頼を得てているのは絢文さまお一人のみ——』

『——美咲』

びくりと体がこわばり、意識が廊下側に引き戻される。おそるおそる振り返ったその先には、

『何、してるの?』

いつもと何一つ変わらない、笑みを浮かべた絢文が立っていた。

3-1-3 真実（後書き）

過去の話はこれで終わりです。

「それが今から六年前の3月31日。私が小六になつて、絢文が中学に入学するはずだつた一週間前のこと」

「え？ あいつ確か俺や美咲さんと同一年だつたんじや……」

同一年なら学年は同じのはずだ。美咲の学年と年齢は一致しているから、美咲が留年していた訳ではないだろう。ならば……

「あ、言つてなかつたつけ？ 絢文の誕生日つて3月20日なんだよ。で、私の誕生日が4月20日。1ヶ月しか違わないから同一年つて言つてるんだ。まあ、それでも一応あつちが義兄で私が義妹なんだけど」

つまりちょうど今の時期だけ年下なんだよ。と美咲は笑つた。

「話戻そーか。……あの口私は絢文に初めて違和感を持つた。なんで気付かなかつたのか不思議だつた、あの笑顔。……「ごめん、うまく言えないと……あれは綾が猫を被つた時と同じで、相手を騙すためのものだつたんじやないかつて。私はずつと騙されてた、そう考えた」

ふう、と息をつき空を見上げると、青空を鳥が飛んでいるのが見えた。

ふと、綾は鳥にも似てゐると思つた。自由に飛び回る渡り鳥。煉賀の家での十二年間も、彼にとつては巣立つまでのわずかな間でしかなかつたのか。そして今美咲や鳴海と関わつてるのでさえ、たまたま立ち寄つた木の枝でしかないのだろうか……

「相手を騙すための仮面。それが綾の他人に向ける笑顔で、それが絢文が私に向けていた笑顔だつた。……騙そう、なんて考えてなかつたかもしれない。ただ純粋に嫌な面を隠したかつただけかもしれ

ない。けど、私にとつては騙されてるのと同じだった」

だから、嬉しかった。自分たちの前で、だけ傍若無人で勝手な言動ばかりすることが。信頼していると言つてくれたことが。ただ無条件に笑顔を見せてくれた昔よりずっと、嬉しかったのだ。

「いなくなつたのは寂しくて悲しかつたよ。でも、ちゃんと帰つてきてくれた。私はそれだけで満足なんだ」

でも、わかつても怒っちゃうんだよねえ。と付け足して、美咲は照れたように笑つた。

彼女のとでも綺麗な笑みから視線を逸らし、鳴海は口をつぐんだ。そんな笑顔を見せられたら、あいつのことを悪く言えなくなるじゃないか、と彼が心の中で思つたことを美咲は知らない。本人さえ気付いていない小さな嫉妬の炎を、彼女は知らない。

「そういえば、美咲さん

「ん、なに？」

「今度の誕生日何か…」

「すみません、お待たせいたしました」

声に驚き振り向くと、門から陽方が出でてくるところだった。

「あっ、いえ。こっちが早く来すぎただけなのでお気にしないでくださいっ！」

「……美咲さん、文が少しおかしいですよ」

「へっ？」

何のことがどうさに理解できなかつたらしく、美咲が一瞬呆けた顔をし、それを見た鳴海がわざかに吹き出した。

「……わ、笑うなあ！」

「す、すみません！」

顔を真っ赤にしながら美咲が言つたが、謝る鳴海の表情は依然として笑みの形のままで、余計に彼女の神経を逆撫でる。耳まで赤くした美咲は、鳴海の胸ぐらをつかむとがくがくと揺すり始めた。

「ちょ、美咲さ、やめ、いた、痛いで、すっ」

「わーらーうーなあーっ！！」

「わかつ、わかり、ましたっ、わかりま、したから、やめ、やめて、くだつ、さ……」

「うわああーん！！」

「えー、美咲さん？ 鳴海さんが青くなつてますよ？」

「あ」

陽方に言われ、美咲が小さく声を上げて腕を止める。掴んでいる服の先を見るとぐつたりとした鳴海の顔色は美咲と対照的に薄青くなつており、目が白目を剥きかけていた。

「じつ、ごめん鳴海！ 大丈夫！？」

「……大丈夫、大丈夫ですから揺すらないで下さいお願いします……」

「え、あ、ごめん！」

そんな一人をじつと見ていた陽方は、ふつと笑つて口を開いた。

「……お一人は仲がよろしいんですね」

「え？ あ、あー、仲いいって言うんですかね？」

「……はあ、まあ…」

美咲は少し困ったように笑いながら、鳴海はまだ少し青い顔で頭を押さえながら言った。一人の曖昧な反応に陽方が不思議そうに首を傾げる。

「おー一人の会話を聞くかぎり、単なる主従とは思えないんですが…」

「まあ、やうですね。従兄弟どうしだし、それに仲が悪いってわけじゃなこですよ」

「美咲さんとは同じ年ですから、護衛でも主従つて感じはしませんし」

「だから敬語はやめてつて言つてるんですけどねー？」

ひらひらと鳴海を見る美咲。鳴海は少しそむりとして、わずかに見下ろすように美咲を見る。

「……悪かったです。敬語やめなくて」

「悪いと思うならやめてよ」

「お断りします」

ぐすくすと笑いながら一人の会話を聞いていた陽方だが、ふと考え込むと遠慮がちに声をかけた。

「あの、鳴海さん」

「はー？」

「さつき、美咲さんとは

同じ年だって言いましたよね？ 同い年じゃない従兄弟の方もいらっしゃるんですか？」

「えー、あー…………はい。一応」

「ずっと同じ年だと思つてたらしきんですねけどね。さつき違うつて教えたばかりなんですよ」

美咲からかうように言つた。だが本当のじとひなので言つ返せず、鳴海は憮然とした顔でそっぽを向いた。

「…………そですか。さつとお一人と同じで素晴らしい方なのでしょうね」

「あはは……。私達を含めて素晴らしいかはわかりませんけど、陽方さんももう会ってますよ」

「？それははどういう」

「兄さん！！」

唐突な呼びかけに三人が驚いて振り向くと、道のむこうから少年が走つて来るのが見えた。

3-1-5 会話（後書き）

ブログを作つてみましたので、良かつたらご覧下さい。URLは作者紹介文にあります。

中学生くらいに見える少年は三人の前まで駆けて来ると、美咲と鳴海に会釈した。少年の少し長い黒髪が揺れ、春風になびく。

陽方が少年に向き直り、口を開いた。

「お帰り、此方」

「ただいま、陽方兄さん。……お客様ですか？」

前半は陽方に、後半は自分たちに向けられたその言葉に、美咲と鳴海はどう答えたものかと言い濶む。だが何かを言つより早く、陽方が答えていた。

「ええ。今朝話した煉賀のお一人です。あ、美咲さん鳴海さん。この子は私の弟の此方です。……ほら、挨拶を」

「あ、はい！ 申し遅れました、空嶺此方と言います！」

陽方に促され、少年　此方はそう言つとにこりと笑つた。少しつり目ぎみで猫のような愛嬌のある顔立ちをしているためか、見ていて安心する笑顔だ。

「私は煉賀美咲。初めてまして、此方くん」

「……煉賀鳴海。美咲さんの護衛です」

「美咲さんに鳴海さんですね！ よろしくお願ひします！」

「さて。此方が帰つて来ましたし、中に入りましょうか」

「あーー！」

突然声を上げた美咲に、陽方と此方が怪訝そうな顔をする。

「どうしました？」

「忘れてた、私たちも挨拶！」

「ああ、と頷いてから陽方は笑つた。

「気にしなくていいですよ。お呼びしたのはこちらです！」

美咲は首を振ると、服装を正した。

「いえ、そもそもいません。　鳴海！」

「はい。　煉賀家が呪術師、煉賀鳴海」

「同じく、煉賀美咲」

「「空嶺家当主にお目通し願いたく参上致しました」」

鳴海が刀の袋を下ろしたあと、二人同時に片膝をつき、深く礼をする。流れるようなその動作に、此方が目を輝かせ見入っていた。

「空嶺陽方、了承しました。では……」

そう言って陽方は門に向かい、此方もその後ろに小走りでついていく。だが門の内側に見えるのは木々ばかりで、どう見ても人が住む場所があるようには見えない。

「あの、ここって本当に空嶺の……？」

おそるおそる尋ねた美咲に、此方は疑問符を浮かべたが、陽方はわずかのうちに微笑んだ。

「ここが空嶺の本家ですよ。普段は術師にだけかかる幻術の結界を張つてあるんです」

「…ぼくたちは結界術師ですから、鍵とかよりもこうして結界を張ることが多いんですよ」

少し遅れて、質問の意味を理解したらしい此方が説明を付け足した。それを受けて納得する美咲たちに陽方が言う。

「少しだけ結界を解きますから、お一人もこちらへ」

言われるままに美咲が陽方の隣へ、鳴海が一人の後ろ、此方の横へ移動する。

「解」

くらり、とした一瞬のめまい。やがて美咲たちが目を開くと、門の向こうの木々は消え去り伝統的な日本家屋が覗いていた。陽方が振り返り、ゆっくりと一礼する。

「ようこそ、空嶺へ」

3 16 空嶺（後書き）

若干スランプ気味。一応話は書けるけど地の文がうまいかない……
いつか大幅に改稿するかもしれません。

「え、じゃあお二人は高校に入学するより前から任務についてたんですか！？」

此方の驚いた声が静かな廊下に響く。

美咲たちは陽方に案内され、談笑しながら空領の当主の部屋へと向かっていた。とはいへ話しているのは美咲と此方ばかりで、鳴海は時折相槌を打つたり話を補足したりする程度、陽方に至つては微笑を浮かべて耳を傾けているだけだったが。

「うん。正確には中3の始めくらいかな。……鳴海が私の護衛についたのもそのときだよ」

「うわあ、すごいです！」

「そうかな？」

「そうですよ！それに比べてぼくは……実践型の修行はあっても、実際の任務についたことはないですよ……」

「早く実践を行つたからって強くなるとは限らないよ。じっくり修行を積んで大成した術師だって沢山いるんだから」

「そう……ですよね！すみません、愚痴を言つてしまつて。修行をしつかりして実力を高めておかなければ、できることもできなくなりますよね！」

「そう、それに怪我なんかしたら意味ないからね。慌ててもいいことないよ」

「確かに、美咲さんが言つと説得力がありますね」

「……鳴海、それってどういうこと？」

「言葉のままです」

「なによそれ！」

ふくれつ面になる美咲を見て、鳴海は呆れたよつたため息をついた。

「……一週間前の任務で、怪我したのは誰ですか」

「うう」

ゆつくり鳴海から目を逸らした美咲は、此方がじつと自分を見ているのに気付き、視線を宙に泳がせた。

鳴海の言葉通り、美咲は春休みに入つてすぐの一週間ほど前にちよつとしたミスが原因で怪我をしていた。と言つてもかすり傷程度で、加えて術を使ったのですぐに治つたのだが、心配性の鳴海は事ある毎にそれを持ち出してくるため、美咲にうつとうしくて仕方ない。

とはいえ、だからとこつて否定もできないので、余計に反応に困つているのだ。

「……もひ、その話はナシ！ 偉そつと言つてすみませんでした！」

「誰も偉そうとは言つてませんが

「はいはいそうでしたね！」

完全にふてくされてそっぽを向く美咲は再びため息をつく。

「え、あ、あの、美咲さん？ 鳴海さん？」

おろおろと二人を交互に見やる此方。だが美咲はまつたく反応を返さず、それを見た鳴海が仕方なさそうに口を開いた。

「気にしないで下さい。いつものことですから」

「え、でも……」

「いぢいぢ氣にしてたら身が保ちませんよ。それにこれで仲違いするくらいなら二、三年も護衛してません」

「はあ」

「……鳴海、今とつても失礼なこと言わなかつた？」

「いえ、特に何も？」

美咲がジト目で見てくるが、鳴海は白々しく答える。それを見て此方が小さく吹き出した。

「もう、此方くん笑わないでよー」

「あははっ、す、すみません。ただ……」

「ただ？」

「楽しそうだなあつて……」

「どこがー！」

「すつ、すみません！」

「美咲さん……いいかげんに……」

余計に怒らせてしまい恐縮する此方。こめかみを押された鳴海が本気で怒りうとしたとき、ずっと黙っていた陽方がようやく口を開いた。

「そこまでー喧嘩は駄目ですよ」

「「喧嘩なんてしてません！」」

息の合つた二人の返答に陽方は一瞬目を丸くしたが、すぐに微笑んだ。

「でしたら、そろそろお静かにお願いしますね。もつすぐ着きますから」

そう言われると黙るしかない。美咲と鳴海は互いに別々の方向を見ながら歩き始めた。

そんな二人を此方は困ったように、陽方は苦笑しながら案内するのだった。

ピタリ、とある一室の前で陽方が立ち止まつた。

「父上、お客様をお連れしました」

「入りなさい」

「失礼します。お二人とも、どうぞ」

「失礼致します」

陽方に連れられ、美咲と鳴海はその部屋に足を踏み入れた。

まず正面に見えたのは 造りの広い和室と、その中央に座する穏やかな顔をした男性。美咲はおそらくはこの男性が空領の当主なのだろうと思った。雰囲気は柔らかいが、気配、もしくは存在感がどことなく義父おやちに似ている。だが……

（何か、おかしい）

この部屋全体に満ちる違和感。男性だけの気配ではなく、何か別のもの……

「 さん、美咲さん！」

小さく呼びかけてきた鳴海の声でハッと我に返る。瞬間、最初からなかつたかのように部屋の違和感は消え失せ、ただ、落ち着いた雰囲気の座敷があるだけとなつていた。

「 ……失礼致しました」

先に膝をついていた鳴海にならい、スツ、と流れるように膝をつき礼をする。今しなければならないこと、それは煉賀からの使いとして空領に協力を要請し共に事件の解決を図ること。

人が、それも実力のある術者が殺されているのだ。早急に解決を目指さなければ、いずれ一般人に被害が及ぶ。それだけは避けないといけない。

……それに比べればあの程度のこと、気にかけている暇はない。無理矢理自分を納得させ、美咲は面を上げた。いつの間にか陽方と此方は男性の左右に座り、美咲と鳴海を見つめている。

「煉賀に所属する呪術師で、煉賀美咲と申します。こちらは

「同じく煉賀の呪術師、煉賀鳴海です」

「空嶺の現当主、空嶺誠一です。初めまして、煉賀の御息女に術師

殿

見た目と同じように、落ち着いて優しげな声が男性から発せられる。男性 空嶺誠一は一人をしっかりと見据えると、やがて口を開いた。

「噂には聞いていましたが……一人ともお若いですね

「え？」

「煉賀家の術師に二十歳を待たずして一流の術師として活躍している者たちがいるという噂は、呪術師の中では有名なんですよ。そしてその者たちは、当主の娘と甥であるということも」

「一流なんてそんな……私たちはまだ未熟者で

「誠一様、失礼ですが本題のほうに入らせて頂いてよろしいでしょ
うか？」

美咲の言葉を遮り、鳴海が尋ねた。言葉こそ丁寧だが、鳴海の言
い方はどこか棘をはらんでいる。だが相手は術師の一族の当主、い
くらこちらが同列の術師一族の直系とは言え、相手が持ち出した会
話を遮るのはあまりにも無礼。慌てて美咲が声を上げた。

「ちょっと鳴

「ええ、構いませんよ」

その返答に美咲は驚いて誠一を見た。その表情は穏やかで、鳴海の発言を気にしている素振りも見せない。

「ありがとうございます。……ほら、美咲さん」

「え、ああ、うん」

鳴海に促され、姿勢を正す。先ほどと同じだ。これぐらいのこと
を気にしていては埒があかない。

今回の本題を頭の中で反芻し、美咲はゆっくりと話し始めた。
「まず最初に昨日のことについて、改めてお礼を申し上げます。陽
方さん、ありがとうございました。

……次に、昨日出現した、歪み、と異形について、そして今回の事
件において協力を求めたいという話。すでに煉賀本家から大まかな
連絡が入っていると思われますが、詳細については
……」

3 18 当社（後書き）

長らくお待たせ致しました。かなりスローペースになるとは思いますが、更新再開したいと思つ……思つて……思つて、ます。一応。もう次いつ更新とか言いません。気長にお待ちくださいすみませんでした！

2、3ヶ月書いてなかつたつむになんか文章がおかしくなつてます
が、見逃してください。

「……ねえ、どう思'う?」

「……何をですか」

やや日が傾いてきた、夕方に近い時刻。二人が空嶺の門から出ですぐ、結界が張り直されたのを見て美咲が口を開いた。

だが鳴海は疑問に疑問で返すと、くるりと門に背を向けて歩き始める。

数歩ぶん離れてそれを追う美咲から、撫然とした声が漏れた。

「分かってるくせに……」

話を終えてしばらくして、力を貸すことを誠一は了承した。その後は原因の調査について話し合い、調査は明日からで、その際に空嶺の術師を数人派遣させることなどが決められ、会談は終わりとなつた。

……だが、礼を言つて立ち去ろうとした美咲と鳴海を、誠一がこう言つて引き止めたのだ。

『 煉賀の御当主から少し伺つたのですが、現在煉賀には、睦月綾という、協会、の術師がいて、彼は御当主の息子の煉賀絢文である、というは本当ですか?』

それを二人が肯定すると、誠一は難しい顔をした。

『……確信が持てないので言つか言つまいか迷つていたんですが』

『あくまでも推測ということを頭に置いて聞いてください』

『……守護十二家のうち《睦月》の家はもう存在しないことは御存

知ですね?』

『そのことからもわかるよう、本来 彼 が『睦月』である筈がありません。そして、 睦月綾 であることも有り得ないんです』

『なぜなら 睦月綾 は実在し、既に死んでいるからです。『睦月』の行方不明事件において、唯一死体が残っていた者として』

『 煉賀絢文は数年前に行方不明、睦月綾は数年前に死亡。もし 絢文 と 綾 が同一人物だとしたら、 彼 は 綾 でも 絢文 でもないことになるんですよ』

『わかりにくい言い方になつてしましましたが、とにかく 彼 には気をつけてください。本当に 煉賀絢文 なら、そんな必要はないんですがね……』

「……俺としては
はつ、として美咲が顔を上げると、鳴海は立ち止まることも歩調を緩めることもなく、淡々と帰路を辿りながら言った。
「綾あいづも空嶺の人たちも同じくらい信用できませんし、逆に言えれば同じくらいにしか信用してません」

だから。と前置きして、

「俺は空嶺の御当主の話も、あいつ本人のことも、言われたことを鵜呑みにして信じたりしない。それだけです」

そう言つたつくり、鳴海は口を閉ざした。

「……ねえ、それってつまり

数分後、黙つて後を歩いていた美咲がゆっくつと尋ねた。

「全部疑つてる、つてことなんじや?」

「……そつとも言いますね」

一瞬の間の後、鳴海がとぼけるように言葉を返す。

その反応を見て美咲は……

「だつたらわざわざ難しく言わなくとも良いでしょ？が！　一言一
言で済むようなことを長々と言つ必要はないでしょ？！」

「より正確に俺が考えていることを表そうとした結果です。それが
偶々言い換えると一言一言になつたというだけで」

「なあにが偶々よ？！　そつきの言い方からして確信犯のくせに！」

「……そんなことないですよ」

「なら私の目を見てもう一度言つて？」

「……回りくどい言い方でも伝わればそれで良いんですよ？」

「話をそらすなーっ！」

鳴海がからかいながら逃げ、それを怒りながら美咲が追い、二人
は騒がしく夕刻の街中を駆けていった。

……ただ、鳴海の言葉によって気が楽になつたものの一度生ま
れた疑いを完全にぬぐい去ることはできず、美咲の心の奥には様々
な不安が残された。

3.19 疑心（後書き）

これで三章は終わりです。
もう少し長い予定だつたんですが、わかりにくくなりそつだつたん
で今回の話で切ることにしました。
四章は短めになると思います。

実は、この三章で全体の折り返し地点を過ぎました。残りは四章、
五章、エピローグの予定です。
更新は相変わらず遅いと思いますが、これからも「深淵の王」をよ
ろしくお願いします。

4 1 友人

日時 3 / 22 土 21 : 07
FROM ユイネ
TO みさちい
TITLE 明日ヒマ?
内容 やほー。ユイネです。タイトル通りなんだけど、明日ヒマ?
? ちょっと中学の時のメンバーで集まってカラオケでも行こうか
つてなったんだけど、来れそう? 後で連絡ちょーだいな。
日時 3 / 22 土 21 : 38
FROM 美咲
TO 唯音
TITLE Re : 明日ヒマ?
内容 ごめん、私はバス。明日はちょっと用事が。
もし時間がで
きたら行くから、またその時に。

日時 3 / 22 土 21 : 42
FROM ユイネ
TO みさちい
TITLE 了解
内容 りょーかい。みんなにも伝えとくね。

日時 3 / 22 土 22:00

FROM 美咲

TO 唯音

TITLE Re:了解

内容 ごめん。じゃあ、また今度ね。

力チ、とメール送信のボタンを押した後、美咲はベッドに仰向けに寝転がった。

用事というのは勿論今回の事件についての調査のことだ。明日から調査開始で、人の命に関わることなのだから遊んでいる訳にはいかない。

だが、特殊な力を持つているものの美咲も高校生。仕方がないとは言え昔なじみの友人たちと遊べないのは少し寂しい。春休みに入つてから仕事の連続で、まともに友人と会つてさえいないのだからなおさらだ。

ぼんやりと自室の天井を見上げながら取り留めのないことを考えていると、入口の戸が控え目にノックされた。

「美咲ちゃん、起きてる?」

「……揚羽さん?」

「あ、良かつた。起きてたのね」

「……どうしたんですか、こんな時間に?」

既に時刻は夜中の十時を過ぎていて、人によれば眠っていてもおかしくない時間帯だ。美咲自身、明日に備えてそろそろ寝ようかと

思っていたくらいである。

「んー、ちょっとね。……今、少し時間取つても大丈夫?」

「? ええ。まあ、問題ないんですけど」

「あのね、ついつき綾くんが来てね。……美咲ちゃんと話したいらしいんだけど、いいかしら?」

「え」

一瞬、美咲の動きが止まつた。

つい数時間前、空嶺の家で告げられたことが頭の中で再生され、思わずうろたえてしまう。……できれば心の整理がつくまで、なるべく綾には会いたくなかった。だが、今ここで断つたとしても明日には必ず会わなければならない相手だし、揚羽に起きていると知られているのに断るのは不自然だ。何故会いたくないのか疑われては困る。それに、

……問いただすのが、怖いのだ。

「……美咲ちゃん?」

「! あ、はい! 大丈夫です!」

「なら、呼んでくるから少し待つてねー」「はーい」

足音が遠ざかり、ふう、と美咲はため息をついた。

戸越しだつたから揚羽には勘付かれてないだろうが、多分綾とは直接会うはず。おかしな言動をしないように注意しなければ

……つて。

「……呼んでくることは……綾がこの部屋に……?！」

確かに昔はお互いの部屋を頻繁に行き来していたが、それとこれは事情が違う。散らかっているわけではないが、だからといって見られても大丈夫ということにはならないし、何より（絶つ対、からかわれる……!）

慌てて色々ものを押し入れや本棚にしまい、同時に一応ゴミが

落ちていいか確認する。できるだけ見た目がすつきりするように物を動かし……。と、そこで美咲の動きが止まつた。

「……なんか私、彼氏を部屋に呼んだ女の子みたい」

次の瞬間、一気に美咲の顔が赤くなつた。どうやら、自分が言った言葉に恥ずかしくなつたらしい。

（な、何考へてんのよ私？！ 綾は……絢文は自分の兄じゃない！ 誰が彼氏よ！ そうよ、絢は兄……なのかな、本当に……）

「美咲、いるのか？」

「ひやいつ？！」

いきなり戸の外から聞こえた声に、驚いてかなり変な声を上げてしまつた。すると、やや間があつてから呆れた声がした。

「……なんだ、今の奇声は」

「あ じゃない。……綾？」

恐る恐る尋ねると、返ってきたのは厳しい声。

「僕以外に誰がいる。……入るぞ」

「え、あ、ちょっとまつ？！」

そんな美咲の制止よりも早く、音もなく戸が開かれる。その先に立つていたのは……やはり、綾だった。

ためらいもなく戸を開けた青年に美咲がジト目を向けると、彼の冷徹そうな目と視線がぶつかった。

「…………」

「なんだ、その目は」

「……べつにー？ 許可もなく女の子の部屋に入るなんて、サイティーとか思つてないけど？」

「……そんな心情の割には顔が赤いぞ」

「！」

ぱつ、と両手で頬を覆つた美咲に、綾はため息をつく。

「……思つてないなら、あからさまな態度を取るな。別に僕は気にしないが、分かりやすいにもほどがある」

「わ、悪かつたわね！ 嘘がつけなくて！」

「別に悪いとは言つてない」

「……あつそ」

美咲は仮頂面を作ると、綾に背を向けた。と同時に綾に見られたくなかったもの 自分の部屋の内装が目に入る。

それはピンクの水玉模様のカバーが掛けた布団だつたり、可愛らしいレースがついたカーテンだつたり、本棚に詰まつた少女漫画

だつたり、机や棚の上に所狭しと並べられたぬいぐるみだつたり

そして、一番隠したいものが奥側の壁……ちょうど美咲の真っ正面に置かれていた。

「……いい部屋だな」

「へ？」

一瞬、美咲は何を言われたのか分からなかつた。綾の今までの態度からして、てっきりからかつたり呆れたりするものだと思つていたからだ。

美咲が可愛いもの好きだということを知つてゐる人は少ない。嗚

海にも教えていないし、ばれているのは揚羽と数人の女友達ぐらいだろう。

だが……絢文は知っている。小さい頃一緒にいたのだから当然だ。彼が今更美咲の趣味を馬鹿にするはずがない。

なのに、美咲はさつき綾が自分をからかうと思い込み疑つていなかつた。綾が絢文なら、そんなことは有り得ないのに。

思考に浸かっている美咲を後目に綾は部屋の中に入り、奥の壁のところに置かれているものに近付く。その行動に気付いた美咲が止めるより早く、綾はそれに触れていた。

「……まだあつたんだな、これ」

そう言つて綾が撫でたのは、大きさが子供の身長程もあるテディベア。確かに優しく触れてから、わずかに綾は微笑んだ。

「……覚えてるの？」

小さく問い合わせた美咲に、当然だ、と言葉が返る。

「妹への誕生日プレゼントを忘れる訳がないだろ？」

大人でも抱え上げなければならないほどの大きなテディベア。それは、美咲が小学校五年生だったときに絢文に貰つたもの。絢文がいなくなる前に貰つた、最後の誕生日プレゼント。そして、美咲の宝物。

「大切してくれてるんだな」

「……うん」

「六年間何もあげれなくて悪かった」

「そんなこと、ない」

「今年は、ちゃんとプレゼントするから」

「うん。……ありがと」

それだけの会話に安堵している自分を、美咲は確かに感じていた。そして、綾の言葉を嬉しく思つてはいる自分からあることに気付く。

言葉を交わし終わり、二人して黙り込む。穏やかな、心地良い空氣に浸りながら美咲は思った。

私は、ただこうやって綾に 絢文に安心させてもらいたかった

のだ、と。

もし、綾……『彼』が絢文でなかつたとしても、心の底で疑つていたとしても、私は『彼』を、自分を安心させてくれたこの優しい青年を、信じたい

そう、心から思つのだ。

『なに田え潤ませてるんだ。ロリでも入ったのか?』

「え?」

突然聞こえた声に顔を上げると、顔の真正面、つまり文字通り目と鼻の先に妖精が浮いていた。

ぱちり、と美咲の視線が妖精の視線とぶつかり合つ。その一瞬後、美咲はとっさに後ろに飛び退いた。だがすぐにその妖精に見覚えがあるのに気付く。

「え、…………ルキア?！」

『軽々しくわたしの名前を呼ぶな!…………といつか、何をそんなに驚いてるんだ!』

落ち着いてよく見るとそこには確かに風妖精のルキアで、昨日会つたときと同じ偉そうな口調で美咲の顔を覗き込んできている。

美咲は服の袖で目元を拭うと、彼女に問いかけた。

「い、いつからいたの?」

『最初からだ。姿は消していたが、マスターと一緒にここに入ったぞ』

それがどうした、といつよつと言つるキアに、美咲は軽いめまいを覚えた。

(…………最初から、見られてた……………)

綾が戸を開けたときの慌てぶりも、そのあと顔を赤くしたのも、テディベアを見つけられたときの動揺も、その後の会話で安心して嬉しそうにしていたのも、全部。

今度こそ羞恥で顔を真っ赤にして座り込んでしまった美咲に、ル

キアが不思議そうに呟いた。

『……いきなり顔赤くしたり泣きそうになつたりして、変なやつ』
ルキアはぱたぱたと軽く背中の羽を動かし綾の元へと飛んでいく
と、その肩に座り彼に話しかける。

『マスターはなんであんな奴を気に掛けてるんですか？』

「さあな。自分で考えてみる」

それを軽く流し、綾は美咲を見た。

普段は一つにまとめられている髪が、寝る前だつたせいか下ろされてカーテンのようになに美咲の顔を覆い、綾からは表情がまったく見えない。だが、さつきの状態からしてまだ顔は赤いに違いない。

そんな美咲の様子に綾はため息をつく。そしてティベアから手をのけ、おもむろに立ち上がり美咲の正面に屈み込むと右手でその額を弾いた。

「いたつ！ 何すんの？！」

がばりと頭を上げた美咲は、反射的に前にある顔を睨みつける。まだ美咲の顔は赤みがかっているが、どちらかといつと「パンをされた痛みに対する驚き」といつた様子だ。

その視線を臆することなく受け止めた綾は、何事もなかつたかのように美咲の机の椅子を引き出して座つた。

「……本題に入りたいんだが

「え、あ、うん！」

綾がそう言うと美咲はすぐに睨むのを止め、大人しく座り直す。

が、その際一言言つておくのは忘れない。

「……勝手に人のに座んないでよ」

「悪かったな」

そつは言えど綾に椅子から退く氣はないらしく、美咲は諦めて姿勢を正す。

その一連の様子を、ルキアが綾の肩の上からやや不審そうに見下ろしていた。

「で、本題つて？」

続きを美咲が促すと、綾は一度目を閉じてから口を開いた。

「……一つは、明日からの活動についてだ。大まかな部分は当主から聞いたが、確認ついでに細かいところを話し合つて決めておきたい」

「わかった。……じゃあ、とりあえず明日の予定からでいい？」

「ああ」

肯定の言葉を受け取ると、美咲は先程の綾と同じように一旦目を瞑り、闇に閉ざされた視界の中で聞いたことや話すことをまとめ、再び目を開く。

「明日は朝から街の見回り。たとえ一回きりでも“歪み”が発生したことがある場所に行つて、一つ一つ封印の確認をしたり、おかしいと思う部分がないか調べる予定よ。これだけは直接見聞きしないといけないからね。何が起きてるのか具体的にわからない現状じゃ、勘に頼る部分も多いし」

そこで区切り、綾に視線を投げ掛ける。美咲の視線を受け止めた綾は静かに頭を振つた。どうやら、今のところ質問や疑問はないらしい。その肩に座っているルキアは何故かこちらを睨んでいたが、無言で促す綾に応え、美咲は続きを話した。

「で、それぞれの探索班の編成なんだけど、今回は空嶺の人達が協力してくれるから数が多くなるの。いつも見回りは大体二、三人班が十個くらいなんだけど、明日は一十近くになるんじゃないかな。一班につき一、三人つていうのは変わらないけど、一班に一人は空嶺の人だと思う。結界術つて攻撃には向いてないけど後方支援としては強力だから、煉賀の呪術師との相性を考えて班を決めることになってる」

「……一つ、質問いいか？」

唐突に、綾が口を挟んだ。

「もちろん」

「……僕はどんな立場で参加することになるんだ？」

「……えーと、扱いは煉賀の呪術師と同じよ。でも空嶺の人と二人で組んでもらうわけにはいけないから、私が鳴海を補佐として付ける。つてお義父さん　当主さまが言つてた」

「わかった」

「もう一つは？」

「……空嶺当主の息子も、協力者の中に入つてるのか？」

「……今なんて？」

思わず聞き返してしまった。だが、綾はまっすぐに美咲を見つめたまま、繰り返し問う。

「だから……空嶺の当主の息子は明日の調査のメンバーに入つているのか、と聞いたんだ」

「え、あ……陽方さんと此方くんのこと？　……うん。入つてるよ、明日のメンバーに」

「そうか……」

それきり黙ってしまった綾を美咲が不思議そうにじっと見たが、考え込んでいるのか、それに彼が気付く様子はない。

しばらくお互の口を開ざしていたが、やがて耐えきれなくなつたのか美咲が綾に尋ね掛けた。

「ねえ、綾。……一人がどうかしたの?」

「あ? えー……。あー……なんでもない。ただ気になつただけだ」

「本当に?」

「ああ。……それより、話を切つてすまない。他に何があるか?」「特にない、けど」

よほど集中していたのか、はつ、としたように言つた綾が、美咲には不自然に見えた。そして、なんでもないと言い切るには彼の様子はやや違和感がある。

(今は……慌て? いや焦り? うつん、違つ。なんていうか……不安、かな?)

何に対しかははつきりしないが、美咲はなんとなくそう思つた。あくまでもなんとなく、だつたが。

『「けど」、何なんだ? サッサとはつきり言え人間。マスターを待たせるな』

不機嫌顔のルキアが吐き捨てるように言つた。その中には美咲への嫌悪が隠そともせずに表れていたが、美咲にしてみれば敵視される理由がわからない。むつとして言い返そうとしたとき、美咲を遮るようにして綾が口を開いた。

「ルキア」

ぴたりとルキアが動きを止める。その声は、今までよりも幾分強く、鋭く美咲には聞こえた。

綾の肩からその横顔を見つめたルキアが、不満そうに呟く。

『マスター……』

「ルキア、悪いが少しだけ静かにしていてくれ」

その綾の言葉にルキアは顔を伏せると、そのままふわりと宙に浮かび姿を消した。窓や襖は開いていないので、いなくなつたわけではなさそうだった。

そんな様子に、美咲は少し居心地の悪さを感じていた。が、だからといって押し黙つている訳にはいかないと思い直し、先程言おつとしていたことを口にする。

「あのさ。この話、私たちだけで話していいの？」

「……どういふことだ？」

「つまり……鳴海は呼ばなくて良かつたの？」

「……ああ」

納得したように頷いた綾は、皿身の長い黒髪に指を通しながら皿を閉じた。

「……今会つたら、色々と余計にややこしくなるだけだからな」

「……そつか」

やう言われてみれば、あの鳴海のことだ。綾に会つたときに素直に「言つ」とを聞くとは思えない。

その光景が実際のことのようになつて、田に浮かび、美咲は思わず苦笑した。

「明日のことについては他にはないか？」

「うん。班編成は明日に当主さまが言つようになつてゐるからね。明日からは……今のところ見回りや封印の強化くらいしか聞いてないかな」

「わかつた。……こんな時間にすまなかつたな。迷惑をかけた」

立ち上がつて言つた綾に、美咲は微笑みかける。

「気にしないで。…………恥ずかしくはあつたけど

「何か言つたか？」

「つうん、何も」

そうか、とそのまま綾が部屋を出よつとしたとき、美咲が思い出したように声を上げた。

「あー、そう言えば一つ聞きたいことがあるんだけど、いい?」

「……構わないが」

綾はそう言つと襖に掛けていた手を放し、振り返つて戸に軽くもたれかかった。

「単刀直入に言つけど、鳴海に渡したあの赤い石って何なの？」

その質問に、綾は何事もないよう答える。

「……賢者の石だと言わなかつたか？」

あまりにあつさりした返答に、美咲はやや眉を寄せた。

「聞いたよ。けど、あれは賢者の石です。はいそうですか。なんて納得できないよ普通。本物の賢者の石がこんな所にあるわけないでしょ？」

それは誰もが求める奇跡の石。鉛を金に変える、存在そのものを変質させる、錬金術師が生まれた理由。そんな物がここにあるとは思えない。

「……まあ、確かに本物ではないな。とは言え、それ以外の何かといつ訳でもない」

「え、……じゃあ、何？」

わけがわからぬ、といつた表情の美咲に、綾は淡々と答える。だが、その内容は全く普通ではなかつた。

「あれは賢者の石の模造品だレプリカ」

「模造品……？」

「ああ。本物の賢者の石の力は鉛を金に変えるものだが、この模造品は物質を変化・修復することができる」

「……嘘、そんなものあるわけないでしょ？！」

我に返つた美咲が叫ぶ。対照的に、綾は落ち着き払つて言った。

「ある。賢者の石は存在する。だからこそ模造品は存在しつる。…

…あいつの刀は直つたんだろ？…」

「う、うん」

あいつ、とは鳴海のことなのか。美咲は戸惑いながらも頷いた。

「直つた刀に違和感はなかつたか？」

言われるままに美咲が自分の記憶を探ると、それはすぐに見つか

つた。

「そう言えば……鳴海が刀が軽いって」

「それが何よりの証拠だ」

「それは、そうだけど……。じゃあ、変化ってどんな？」

「自分を落ち着かせるために、純粋にわからなかつた部分を問う美咲。だが、ここでも平凡な答えが返ることはなかつた。

「刀を使う金属なら、妖精銀ミスリルになるだろうな」

「ミミスリル つ？！」

妖精銀。それは存在しないとされている金属。桁外れの強度と力を宿すもの。だが実際は存在しなのではなく、常人が見つけられるような場所にないだけなのだ。

妖精は自然を操るものであり、その力は絶大だ。だが、妖精の力が宿る金属は銀しかない。その数は希少という言葉にさえ届かない。なのに、ただの刀をそんなものに変化させるということは「まあ、つまりこの模造品は妖精の力の塊つてことだな」至極自然に、綾は言つた。

「……な、なんでそんなもの持つてるの？」

「貰つた」

「もらつたあつ？！」

「前に仕事で鍊金術師に会つた時にな」

「……でも！ そんな凄いもの鳴海にあげて良かつたの？」

そんな物を普通に他人あげるという神経が美咲には計り知れない。綾にしてもその鍊金術師にしても、「どうせ使わないからな

「せつかくの貰い物なのに？」

「鍊金術師には多分使わないと言つてあるから問題ない」

「……そういう問題なの？」

美咲がため息混じりに言つた。驚き過ぎて逆に落ち着いたようだ。だが、綾はそんな美咲を気にする様子もなく背を起こし再び襖に手を掛ける。

「もう一つの石は自由に使つてくれ。僕には必要ないからな

「……うん。わかつた」

綾は襖を開く寸前、唐突に振り返つて言つた。

「一つ言つて忘れていた。……陽方とやらとは、関わらないほうがいい

「え？」

あまりにいきなりすぎるその言葉に、美咲の思考が停止した。その数秒後、思わず口をついて出てきたのは短い疑問。

「……どうして」

「さあな」

応じる声もまた短く、戸は開かれ、綾が廊下に足を踏み出した。とつさに美咲が叫ぶ。

「待つて！ もう一つだけ聞かせて！」

既に綾は部屋の外。月明かりで影が落ち、その表情は読み取れない。

綾の言葉に対し再び浮かんだ疑念。それを拭い去るべく、美咲は問いかける。

「……今日、どうして一緒に来なかつたの？」

「……それを」

小さく、だがはつきりと彼は言つた。

「お前に言つ義理はない」

襖が微かな音を立てて閉じた。

庭に面し月光が照らす廊下を、彼は玄関に向かつて歩いていた。ふと、廊下の先から人影がやつて来るのに気付く。

それが揚羽だとわかると彼は静かに会釈して横を抜け、

「綾くん、嘘はついちゃ駄目よ？」

そこで立ち止った。沈黙。お互に振り返らず、わずか数十センチの距離を置いて背を向け合う二人。そこに疑問はなく敵意はなく好意もない。

「それに女の子を泣かすのも、ね？」

それらは単なる注意だ。決して忠告ではない。断じて警告ではない。

揚羽の顔を見る」となく、彼は応えた。

「……わかっていますよ

その言葉は短く、故に意味は深く。

そう、と揚羽は頷いた。

「……ならいいの

「でも、揚羽さん」

再び歩を進めようとした揚羽に、彼は言葉を重ねる。

足を止め、揚羽は肩越しに視線を後ろへ投げた。だが、彼は背中を向けたまま動かない。

「……嘘をついたほうがいいことも、知らないほうがいいこともありますよ

淡々とそれだけを告げ。

一度も振り返ることなく歩き去る彼を、揚羽は静かに見詰めていた。

「……どうしよう。この状況」

ぱつり、と空嶺此方は呟いた。

美咲と鳴海が空嶺家を訪ねてきた翌日の日曜日。此方は陽方と共に煉賀家にやつて来た。まだ実践訓練を積んでおらず、正式な術師として認められていないので任務ではないが、良い機会だからと父空嶺当主により見学として参加させてもらえることとなつたのだ。

実は、このことに此方は内心とても興奮していた。

理由は一つ。一つは守護十一家のまとめ、総合的な実力において一番だとそれでいる煉賀の術を見ることができる」と。

空嶺は結界に属する呪術に特化した家系である。

結界術を駆使した守り、もしくは隔離に置いてはトップクラスではあるものの、攻撃系統の術は普通よりやや劣るのが空嶺に属する術師なのだ。剣術を極める代わりに呪力の総量が少ない羽斑家も似たようなもの、つまり何かを特化すればするだけどこかを捨てることになるのが呪術師だと見える。現に、聞いた話では守護十一家のうち空嶺、羽斑を含めた十一家はそのような感じだつたらしい。

しかし、煉賀家だけは個人の得意不得意はあるものの、長い歴史の中で全ての分野に磨きをかけて来たという。『結界術では私たち空嶺に劣り、剣術では羽斑に劣り、呪いにおいては睦月に劣り、符術においては成宮に劣り、何においてもトップと言える分野はない。だが、守護十一家で最も強いのは煉賀だ』とは先代空嶺当主であつた祖父の言だ。

そこまで言われる人々と技術に、呪術師として興味が湧かないわけがない。と此方は思う。

そしてもう一つ。此方にとってはこちらが最大の重要事項なのだ
が……

「納得できません！」

「だーかーらー、仕方ないって言つてるでしょ！」

若くして呪術師としての頭角を表し、煉賀のトップクラスにいると言われている人物 煉賀美咲と煉賀鳴海。昨日初めて会つて、此方の憧れとなつた二人が……喧嘩をしていた。

現在は朝8時。日曜ということを考えれば早いと言える時刻だろうが、今煉賀家の門周辺に残つてるのは美咲、鳴海、陽方、此方、そして「協会」の術師であるらしい綾という人物のみ。他の煉賀と空嶺の術師は既に全員出払つている。

ちなみにチーム分けは美咲と綾と此方、鳴海と陽方となつていた。だが、美咲たちの言葉を聞く限りどうやらそれが喧嘩の原因となつているようだつた。

「だいたいなんであんな奴が美咲さんと同じ班に……」

「当主さまが決めたんだから私に言わないでよ。それに、一応面識があるからつて陽方さんと綾を一人で組ませるわけには行かないんだから」

よく聞いていると喧嘩というより何故か怒つている鳴海を美咲が宥めている、という様子だと此方は気付いた。とはいえ雰囲気は喧嘩と変わらず、一触即発的な状況が続いており此方にはどうすることもできない。兄は微笑んで二人を眺めているだけであるし、美咲と鳴海を止めるものはいない。……よくわからないもう一人を除いて。

ざり、という足音に此方は反射的に顔を上げた。気付けば隣に綾という人物が立っている。

「あれ……どうにかした方がいいですかね」

それは此方に話しかけたのか、それとも独り言なのか。考えているうちに綾が微笑みかけて来、話しかけていたのだとわかつた。

「えっと……多分、そうだと思います」

なんとなく、ぎこちなさげに此方が答える。

「協会」の人間を信用するな それは呪術師の間でよく言われる言葉だ。此方も、父や兄に言われたことがある。

「協会」に所属している人々は、何らかの事情で家を出たり独学で学んだりした術師がほとんどであるという。そのためか自己中心的な性格の人物が多いらしく、以前一度だけ依頼で来た術師にはあまりいい印象が残らなかつた。

……だが、綾は何故か違う気がする。どこが、と聞かれたら答えようはない。強いて言えば……気配、だろうか？

長い黒髪に長身瘦躯、眉目秀麗というのが似合う顔立ち。ともすれば女性と見紛おうかという容姿をしているのに、そのことを感じさせない力強さ。かといって荒々しいわけではなく、流れるように循環する力は、綾の実力をありありと思い知らせてくる。……が、未熟な自分でもわかるほどの圧倒的な気配が近くにあるせいか……何となく落ち着けない。

そんな此方の思いを知つてか知らずか、綾は視線を此方から外し口を開いた。

「……でも、もう手遅れみたいですね……」「え？」

その言葉に此方が思わず顔を上げると、困ったような綾の微笑が

目に映つた。とつさに彼の視線を追うと、その先には美咲と鳴海が。だが、その雰囲気はどう考へても好友的なものではなく……

「あーもう、このままじゃ切りがない！ 綾、此方くん、さつさと

行きましょう！」

突然そう言つた美咲は、ずんずんと綾と此方の方までやつて来るそのまま一人の腕を掴んだ。

「（ボソッ）あーあ……」

「うわわわっ？！」

何かを呟いている綾といきなりの出来事に大慌ての此方を引っ張りながら、美咲はあつと/or間に鳴海と陽方の側から離れていく。

「え！ ちょっと待つ、美咲さんっ！？」

向こうから鳴海の声が聞こえるが、地味にかなりの速さで進んでいる美咲に聞く気はないようですが、すぐに鳴海と陽方の姿さえ見えなくなつた。

そこでようやく美咲はスピードを緩め、此方たちを解放した。そこでやつと、意外なことが多すぎて停止していた思考がやつと動き出す。

憧れていた美咲たちの思考が思つていたより自分とかけ離れていないと実感したことや、美咲が女性にしてはかなりの握力を持つていると体感したことなど、色々思うところはあるのだが……

数十メートルとかではない単位の間男一人を引っ張り続けたのも関わらず疲れた様子が見えない美咲。そして自分よりも身長が高いせいか、かなり無理な姿勢で引きずられていた綾。

「此方くんー、早くー！」

「此方さん、行きますよ」

一人が、何事もなかつたかのように歩き出しているこの光景。これが煉賀の常識なのだろうか……？

「……僕、ついてけるのかなあ……？」

盛大な勘違いをしたまま、此方は一人を追いかけていった。

だが、先に歩く綾と美咲が
「……馬鹿力」
「誰が馬鹿力よ！」
「手の跡が残つたんだが」
「う、それは……」
「かなり痛かつた」
「……」
と小声で話していたことは、誰も知らない。

「え！ 陽方さんってほかに兄弟がいらっしゃるんですか？」

「ええ、高校一年生の弟が一人。……意外ですか？」

美咲が綾と此方を連れて逃げるよう立ち去つてから数時間が経ち、鳴海と陽方は街外れの廃工場を歩いていた。

半ば仕方なく陽方と共に割り当てられた範囲の封印を確認し強化して回っていた鳴海だが、今では移動中に陽方と話を交わしている。基本的に人付き合い……特に会話が苦手な鳴海にとつて、これはかなり珍しいことだった。

「いえ、意外というか……昨日家に伺つたとき、一度も聞かなかつたので驚いてしまつて。……すみません」

「ああ、確かに。お話していませんでしたね……。私が言つていなかつただけですから、謝ることはないですよ」

そう言いながら陽方は廃工場を出て、かつての工場地帯に面した海に近づいていった。その後を鳴海が追い、やがて二人は海岸に沿うようにして並んだ。

鳴海が自分よりやや低い位置にある陽方の顔を覗き込むと、彼の目は海の向こうを見据えているように見えた。そして陽方は小さく、だがはつきりとした声で言つた。

「もう一人の弟と私は本当の兄弟ではないんですよ」

「……え」

「正確に言うと私と此方が実の兄弟で、もう一人は父方の従兄弟にあたるんです。しかも、どうやら私は嫌われているようで……彼、

今月の始めに中学卒業してすぐ家を出て、高校の寮に入ってしまった。心配ではあるんですが……いつも避けられてしまうんです」困ったものですよ、と苦笑する陽方を見て、鳴海は思わず口を開いていた。

「……同じですね」

「はい?」

「え、あ、いえ……美咲さんとその……弟さんが同じような立場だな、と思つて……」

「……ああ、そう言えば美咲さんは煉賀の御当主の姪にあたるんでしたね。……なら、私の立場に当たるのは 紗文さんですか」

「……そうなりますね。あいつが美咲さんをどう思つてるかなんて、想像もつきませんけど」

突然す、と陽方は微笑みを消し目を細め、鳴海に向き直る。その瞳には どこか、ぞくりとするものが含まれている気がした。

「 鳴海さんは、あの方が紗文さんだと思っているのですか?」

あの方、というのは綾のことを指すのだろうか? 陽方の様子に圧倒されるままに鳴海は曖昧な言葉を返す。

「そ、そういう訳ではないですけれど……」

今のところは、と小さく付け足すと、陽方は厳しい表情を見せた。

「父は……空嶺当主ははつきりと言いませんでしたよね。ですから、これはあくまで私の独断です。ですが……

睦月綾を信じてはいけません。

私はあなた方に傷ついてほしくない。だからこれは……警告です」注意や忠告ではない、警告。驚愕と不審さが混じった顔を浮かべる鳴海を一瞥したあと、陽方は再び視線を海へ投げた。

「何故、といった顔をしていますね」

「……」

「 私と紗文は……友人だつたんですよ。」

彼は六年前に、死にました

「……そん、な」

鳴海はとつさに記憶を辿る。だが……自分は、そんなことは知らない。

「……そ、そんなこと、美咲さんや当主さまは一言も！ 友人がいたことだつて……！」

「美咲さんは、あの日のことを忘れています。……煉賀の御当主は、隠しているのでしょうか。あのときあの場所にいなかつたあなたに、知られては困るから」

「あの、日……？」

「そう、あの日……六年前の三月三十一日。絢文が死んだ日。何が起こつたのか……知りたくありませんか？」

真剣な声と表情、冗談を言つてゐるようには見えない。だが、当主が何かを隠している？ 美咲が何かを忘れている？自分が知らない？ 何かくが……六年前に起こつていた？

混乱した頭のまま、鳴海が口を開こうとした時

「あの」

突如、背後から声が聞こえた。

瞬間に鳴海は左へ、陽方は右へ飛び退き、同時に振り返る。話をしていたとは言え背後には人がやって来るのに気づかないほど、鳴海に力がないわけではないはずだ。だが……現実には人がそこにいる。

鳴海だけではなく、様子からして陽方も気づいていなかつたらしい。つまり、相手はかなりの

警戒心も露わに振り返った先にいたのは、一人。全身黒尽くめの人物は困ったように言った。

「あの……ここ、どこなんでしょう?」

「……はい?」

「……本当にすみません。お手数をおかけして……」

「いえ、いいんですよ。ね、鳴海さん」

「え、あ、はい。問題ないですから」

十数分後、鳴海と陽方は黒尽くめの人物を連れて街中を歩いてい

た。

あのあと、単純に道に迷つてしまつただけだつたらしい彼は一人に道案内を頼み、つい先ほど工場地帯からやつて来たところなのだ

が……

「……それにしても、どうしてあんな所に居たんですか？ ショッピングモールを歩いていたはずだつたんでしょう？」

「それが、連れを探しているうちに気付けば周りが工場だらけだつたんですよ。……不思議ですよねえ」

陽方の質問にややハスキーな声とのんびりとした口調で彼は返すが、鳴海は内心不性感でいっぱいだった。彼が居たというショッピングモールから工場地帯までは、直線距離で数キロ離れているのだ。普通、不思議で済まされることではないだろ？。

それに、と鳴海は自分と陽方に挟まれるようにして歩いている人物に目をやつた。

黒のスニーカーに黒のジーンズ。春先にはまだ寒そうなまたまた黒の薄手のセーター。そして墨色の髪に同色の瞳。身長は陽方よりやや低いといったところだろうか。手には買い物帰りと思われるビニール袋が二つ。整つた顔には常に微笑みをたたえ、どこかひょうひょうとして掴みどころがない雰囲気を纏つている。……実際、先の会話から分かるように掴みどころがないのは確かなのが。

「……でも、本当にありがとうございます。あのままふらついていたら、隣町に行つてしまつたかもしれませんでしたし

「さすがにそれは……」

ないですよ、と続けようとした鳴海に、彼は苦笑して言った。

「いえー、それが前に一度隣県まで行つてしまつたんです」

「……そなんですか」

……鳴海も陽方も、笑うしかなかつた。

「だが、

「あ、いました！」

と彼が指差した先

とあるショッピングモールの中庭で言い争

いをしている人物たちを見た瞬間。

「あ

と、鳴海が呟き。

向こうもこちらに気付いて

「あ」と口を開けたのが見えた。

時間は少しだけ遡り

正午を回り、調査が一段落ついた美咲たちは、食事をとるためにあるショッピングモールにやって来ていた。

美咲、綾、此方の班に振り分けられたのは街の中心部の調査で、先ほどまでは“歪み”が一度でも発生したことがある路地裏や袋小路、工事現場やビルの屋上をしらみつぶしにチェックして回っていた。おそらく街の様々な場所を動き回つても目立ちにくい年齢である三人だからこそそれが割り振られたのだろう。が……

「あーもう、疲れた……」

「ですね……」

「ほら、すぐそこに長椅子がありますから。頑張ってくださいよ——人とも」

猫被り状態の綾に支えられるようにして美咲と此方はふらふらと歩き、中庭らしき場所の長椅子に座らされると思い切り脱力していった。

「……それもこれもお前のせいだからな、美咲」

「……なんで私のせいなのよ」

「お前の友人數名に追い掛け回されたのは確實にお前のせいだと思うんだがな」

「う……ごめん」

此方が疲れで半分意識を飛ばしているのをよそに、美咲と綾は小声で話す。会話の内容にも出たように、三人……主に美咲と此方が疲れているのには訳があった。

つい数分前……三人は美咲が昨日誘いを断つた友人たちのグルー

プに出くわしたのだ。だが、ただ出会つただけなら問題はない。美咲ひとりが出会つただけならば。

が、今は誰がどう見ても美人に見える綾と、やや幼いながらも整つた顔をしている此方、そして凜とした美少女である美咲が一緒にいるのだ。

常に街を歩くだけで周りから見られている三人だが、綾以外の一人に自覚が欠片もないのが良かつたのか、特に誰かに話しかけられることもなかつた。だが……それは見知らぬ他人だからであつて、美咲の友人たち、特に女性陣は綾と此方に遠慮なく話しかけていき、男性陣は美咲に憧れの目を向けたのだった。

慌てて逃げ出したものの、術を使わずに意外としつこかつた彼らを振り切るのに手間がかかり、美咲と此方は疲れきついていた。……ただし、綾だけは何時の間にかどこかへ雲隠れしていくついさつき現れたらばかりだったが。

「…………うう、絶対あとから唯音に責められるよ…………」

友人たちからの電話やメールがひっきりなしに来るために電源を切つた携帯を見つめながら、美咲がぼやいた。皆に合つたときに一番すごい形相で問い合わせてきた少女　唯音は、昨日のメールでの断りが嘘だったと思つていてるだろう。彼女は美咲の家のことを知つてはいるが、仕事の時は鳴海と一緒にるのが常だつたから、色々疑われてるに違いない。

「…………こんなことなら、どこで遊んでるのかだけでも聞いておけば良かつた…………」

そうしたら会わないようにする事もできたのに、と嘆きながら、美咲はどうやって友人たちを納得させるか考えることにした。

「ほり」「え？」

ひよい、と突然手元にスポーツドリンクの缶が飛び込んできた。顔を上げると、同じ缶を持つた綾が立つていて、隣では美咲と同じように缶を持った此方が驚いて綾を見つめていた。

「飲んでください。奢りますから」

微笑んで言う綾に、此方が素直に

「ありがとうございます」と言つて一礼してからプルタブを開ける。

美咲が不審げに見返すと、笑つたまま彼の眼が

「早く飲め」と睨んできたのでとりあえず飲むことにした。

「……ありがとう」

「どういたしまし」

『ふうん。誰かに物を奢るなんて、随分お優しいことで』

その『声』が頭の中に響いた瞬間、綾の表情が一変した。

スツ、と綾の右手が持ち上げられ、その人差し指と中指の間に透き通る小さな塊が現れる。それが氷でできた刃だと美咲と此方が認識した時、すでに綾はそれを投げ放っていた。

腕をしなやかに曲げ、手・腕全体の反動をも利用して投げられた高速の刃は、吹き抜けとなつている中庭を二階の手すり越しに覗く人へと直線的に走り 止まつた。

いや、正確には止められていた。その人物が顔の前に翳した左手の指に挟み込まれるようにして、被つている帽子にさえ傷一つ入ることなく。

「 え？」

警告を放つ時間もなく、例え発せれていたとしても一般人には到底反応できない速さの凶器を止めた。それはつまり……

「ひどいなあ、声をかけただけでこんな物投げるなんて」

ひどいと思つてゐる様には欠片も思えない聲音で彼はそう言つて手を刃から放し、それが一階の床に触れたと同時に踏みつけた。

パリン、と氷刃が碎けた音が残つてゐる間に、少年は手すりを鉄棒のようを利用して軽々と中庭に降り立つ。軽くズボンをはたき、目深に被つた黒いキャップの位置をずらして片目を覗かせた少年は、警戒する美咲と此方をよそにゆっくりと綾の前に歩み寄り……

「久しぶりだね睦月綾。相変わらずの鬱陶しいその長髪、むしりとつてやりたくなるよ」

暴言を吐いた。

一気に顔を青くした美咲となにがなんだかわかつていない此方が、恐る恐る綾の顔色を窺うと……

「ああ本当だな真岸。僕もお前の目に痛い金髪を今すぐ刈り取つて

やりたい気分だ」

同じく暴言。しかも滅茶苦茶棒読み。

もう固まつたまま成り行きを見届けるしかない美咲たちを置き去りに、綾と真岸といふ名前らしい少年は会話という形を借りた罵り合いを始めた。

「この神々しい金髪が日に痛いだなんて、よっぽど残念な目をしてるんだね」

「目がチカチカするような髪のどこが神々しいんだ女顔」「女顔はお互いさまだよ。君なんか喋らなかつたらナンパされるんじゃない?」

「顔と身長低いせいでリアルにナンパされた経験がある奴には言われたくないな」

「こつちだつて無駄に身長だけ高い奴に言われたくないよ」「負け惜しみか? チビ」

綾のその言葉が響いた瞬間ぴた、と少年の動きが止まつた。

「…………な」

「な?」

「…………チビ言うなあつ!…」

ばんつ、とバネのように少年の体が跳ねて綾に近付くと、その手が握つたものが綾に向けられ

「あ、いました!」

一いちらに向かつて発せられた聞き覚えのない声に、少年の動きが止まる。それを視界に入れてすぐ、美咲は声した方向へ振り向いた。やや遅れて此方もそちらに目を向ける。

一人が見たのは、見知らぬ黒服の人物。そしてその後ろにいる陽方と……

「あ」

と思わず口を開けた美咲と同じように、驚いた表情をした鳴海の

姿
だつ
た。

「「で」」

「誰、この人たち？」

「この方々、誰なんですか？」

顔を突き合わせてすぐ、口を揃えて言う美咲と鳴海。その言葉は、面倒そうに遠くを見ている綾に向けられていた。

現在黒服の人物は中性的な顔に困ったような表情を浮かべて綾と少年を見ており、少年は憤然とした様子で立っているため話しかけづらいものもあるが、三人の様子を見るにお互い知り合いのようだと判断した結果、綾に尋ねることに決めたらしい。ちなみに此方はまだ果然としていて、陽方は先程から手を顎に当てて黙つたままである。

腕を組んで美咲たちを見やると、綾はため息をついて言った。

「そう言われてもな……。知り合い以上友人未満、といった所だ」

「「それで納得できるか！」」

美咲と鳴海の二人が声を荒げ同時に問い合わせる。声の余韻が消えたころ、仕方なさそうに綾は黒服と少年へと向き直った。そして黒服の人物を示し、

「こっちが成宮」

「どうも。成宮ナルミと言います」

ペコリ、と一礼する相手に対し、鳴海は驚いて目を見開く。

「なりみ……」

「ナルミっていう名前なんですか？！」

美咲はとっさにそう叫んでしまい、周りの視線が一気に集まつたことに気付くと慌てて口に手を当てた。

「す、すみません突然……。えっと、この人もナルミって書つた前
なんで、びっくりしちゃって……」

「え、ちょ、美咲さん」

「そうなんですか？ 私は成長の成に干支の巳^ひって書くんですけれど、あなたは？」

ぐい、と腕を引っ張る美咲に、鳴海が抗議の声を上げる。それを見て黒服 成巳は優しく微笑んで言った。少し見上げる位置にあるその綺麗な笑顔に、美咲は思わずやや頬を赤く染める。

その様子に鳴海は僅かに憮然とした表情になると、ぶつきらぼうに口を開いた。

「……鈴とかが鳴るの鳴に、海です」

「そうですか、いい字ですね」

「どうも……」

「ねえ」

突如、とげとげしい声が横から響いた。

反射的に美咲たちがそちらを見ると、ずっと黙っていた金髪の少年が大きな目で睨み付けるように鳴海を見ている。

「君ら 特にそつちの『テカいの……なんか勘違いしてない？」

「え？」

声を上げ、二人はお互の顔を見合させた。しばらくして、美咲も鳴海もほぼ同時に少年へ振り向く。

彼はため息をつくと、言った。

「この人さ……女なんだけど」

一瞬の間。辺りの喧騒がやけに大きく聞こえ、この場だけが切り取られたように感じる。

「……え？」

美咲が自然と漏らした声に、少年はもう一度繰り返した。

「だから、成巳は女なんだよ。理解した？」

少しして、美咲と鳴海だけでなく外野で話を聞いていた此方と陽方を含めた声の四重奏が辺りに響いた。

それを見て成巳が苦笑していたのは、言つまでもない。

「すみません、本当に……」

美咲がそう言い、鳴海も気まずそうに頭を下げる。

「いいですよ。いつものことですし、気にしてませんから」微笑んで返す成巳に、隣の少年が幼さの残る眉間に皺を寄せた。
「成巳が良くてこっちが良くなによ。だからいつも文物着てつて言つてゐるのに」

「だつてスカートとか動きにくいやないですか」

「スカートじゃなくとも女物はあるから！ そのセーターも、ズボンも、靴だつて全部男物でしょ？」

びつ、びつ、びつ、と成巳の服を上から順に指し示しながら、少年が顔をしかめる。対する成巳は言いにくそう口を開いた。

「……身長的にほとんど、ない、から」

「……え、あ……ごめん」

少年が謝ると同時に、一人がずーん、と沈み込む。心なしか一人の周辺が暗くなつた気がした。

「り、綾！ どういうことなのこの状況！」

「……とりあえず、あいつらを見比べてみる」

小声で訪ねる美咲に同じく小声で返し、綾は成巳を指差す。

「成巳の身長は、確か百七十五センチ。で……」

少年を指差し、

「あつちの金髪が……百四十七、だつたか？ お互に身長がコンパレッククスらしい」

「「え」」

美咲と鳴海が一人をまじまじと見る。だが……

「成巳さんは確かにそれぐらいだけど……え、いやあの人そんないくないでしょ。少なくとも百五十半ば……」

「シークレットブーツだろ」

「それでも年齢相応だろ。低いつてほどじや……」

三人がぼそぼそ話している間に少年の雰囲気が徐々にピリピリとしたものに変わっていく。ちなみに美咲と鳴海はショックが大きかつたのか気付いていないが、綾は平然としているので分かつて言っているようだ。

「まあ、チビで童顔だからそう見えるかもな。でもあいつは「チビ童顔言うなって言ったよねえ……」

ゆらりと少年が綾たちに近付いていく。ようやく気付いた美咲と鳴海が改めて少年を見ると……般若がいた。

「それにさ、だれが年相応の身長だつて？」

やや幼いながら整つた顔を歪めながら、少年が叫ぶ。

「ボクは

十九歳だ！」

再びの静寂。そして再びの絶叫。

「嘘？！」

「……本当に？」

「同じ年くらいかと……」

「此方より少し下かと……」

「相変わらずの見た目詐欺コンビだな」

「あはは……。あ、因みに私は二十歳です」

「君ら……成巳以外全員死にたいの？」

上から美咲、鳴海、此方、陽方、綾、成巳、そして今にも青筋が浮かびそうな少年が言った。

しばらくして綾が彼を指差し、

「これは真岸だ」

「これ言つな」

成巳に宥められながら彼は撫然とした態度で名乗る。

「……真岸チカ。チカは距離の近い一文字。……で、睦月綾。この失礼な人たち誰？」

今更だが、自己紹介をしていなかつたことに気付き、美咲は慌てて一步前に出て口を開いた。

「えつと……さつきはすみません。私は煉賀美咲と言います」

「へえ、君が煉賀美咲？」

驚いたようにじつ、といひちらを見詰めてくる少年 近に、美咲

はややたじろぐ。

「そうですけど……」

「ふうん。じゃあ君が煉賀鳴海か」

「……ええ、まあ……。というか、何故名前を？」

どうも自分より年下にしか見えない近に“君”呼ばわりされ、鳴海は複雑そうに応えた。だがそれをあつさり無視して、近は小さく何かを呟く。

「へえ、やつか……君らが……」

「あの、何か？」

鳴海が尋ねると、近は笑つて言った。

「ん？ 何でもないよ」

「……もう、近」

クスクスと笑い続ける彼を、成巳が咎めるよつて呼んだ。が、やはり笑うのを止めない。

「……私たち、そろそろ失礼しますね。お邪魔してすみません。嗚海さんに……えっと……」

少し困った様子の成巳に、陽方が美咲の隣にいた此方を呼びながら言つた。

「空嶺陽方です。こつちは、弟の此方」

「陽方さんですね。……案内、本当にありがとうございました」「どういたしまして」

「……成巳、帰るんでしょ？ 先行くよ？」

「あ、今行きます！ では、失礼しました」

いきなりそう言つて歩き出した近を、成巳が一礼したあとに追いかけていく。それを半ば呆然と見送っていた美咲は、ふとあることを思い出した。

「あ、あのっ。近さんっ！」

「……何」

先程とは一転して不機嫌そうな近が、振り返ることなく立ち止まる。

そんな近の様子に美咲は一瞬ためらひを覚えたものの、ゆっくりと口を開いた。

「……最初、私たちに声を掛けた時のあれは何だつたんですか？ あの、頭に直接響いてくるような……」

「あー、あれか」

そう言つと近は顔だけを美咲に向け、いたずらっぽく口元に右手の人差し指を当てる。

「今は秘密。自分で考えてみなよ。またすぐに会つことになるだろうから、その時までの宿題」

まあ、と彼は続け、

「どうしても答えが知りたかったら、そこの超絶女顔な男に聞いた

らしいよ。ま、教えてくれるかは別問題だけど」

「ねえ？ という問い合わせは誰に向けられたものか。確認するまでもなく、自然と近と成巳を除いた全員の視線が超絶女顔と言われた人物へ集まる。

だが本人はそれらをスルーし、何事もないよう口を開いた。

「ところで真岸、こんな所で本当に油を売つていいのか？」

「え？ 今何時？」

「午後一時三十二分」

きよとんとした近は、端的な綾の答えに一瞬だけ考えたあと眉を寄せた。

「あー、確實にやばいなあ

「ですねー……」

「あの、どうしたんですか？」

何やら深刻そうな表情の近と成巳に、美咲が不思議そうに尋ねる。だが「一人はなんでもないと口を揃えるだけで、益々美咲や鳴海たちを困惑させた。

「本当になんでもないから。じゃあ急ぐからまたね、皆さん」

「改めて、色々と失礼しました。では、また」

そう言つてあつと言つ間に視界から消える一人。ものの数秒といふその速さも含め、まるで嵐のようだった出来事に、彼らが走り去つた方向を約一メートルが呆然と見ていた。

真つ先に我に返つた鳴海が皆の気持ちを代弁するかのよつにボソリと呟く。

「……何だつたんだ、一体

が、綾は彼を一瞥し、あっさりと言い放つた。

「気にするな」

「「……つて、気にしないわけがないでしょ（だらう）が！！」」
一瞬遅れて響き渡つた美咲と鳴海の息のあつた怒声に、綾は耳を塞いだ。だが美咲たちに言葉を返すつもりは毛頭ないらしく、素知らぬ顔を決め込んでいる。

そんな全く相手にされていない一人と、全く相手にしていない一人からやや離れた所で、此方は頭を捻つっていた。

皆が当たり前のように会話していたのでタイミングを外して聞けずじまいになつていたのだが、

「……綾さんって、あんな方だつたっけ？」

と、午前中の印象とのギャップに戸惑う少年に、隣に立つていた彼の兄が苦笑しながら言った。

「気になら駄目だと思いますよ。……たぶん

「……そうですね」

触らぬ神に祟りなし。何故かそんな言葉が脳裏に浮かんだ此方だつた。

4 16 退場（後書き）

中途半端感がかなりあるのですが、第四章はこれで終わりです。予定よりもかなり長くなつた上に意味不明な部分が多く、いまいちまとまってませんが……。

次に間章を一つ挟み、その後が最終章の予定です。今までの章よりもさらに長くなると思いますが、どうか最後までお付き合い下さいませ。

太陽が頂点に昇っているといつのに、薄暗く細い路地を一つの人影が歩いている。

「あーあ、あいつ仕留め損なつちゃつた。いい感じだつたのに」片方の影がそう言いながら片手でもてあそんでいるのは、黒光りする鉄の塊。拳銃。影は掌に収まるほど小型のそのトリガー部分に指の入れ、くるくると回した。因みに、もう片方の手にはビニール袋を持っている。

「……そんなこと言つて、今まで一度もうまくいつたことなんてなかつたじゃないですか。それよりも、誰が見てるかわかりませんから銃はしまつてください」

呆れたように長身の影が言つた。その左手にはもう一つの影と同じように物が大量に詰まつた白いビニール袋が下げられており、いかにも買い物帰りといった風情だ。だが、単にそれだけの人物が犬猫しか寄り付かないような路地裏を通つているはずもなく、相方の行動を咎めはすれどその手にある物に驚くことはない。

「誰か……ねえ」

そう呟いて、影はもう一度くるりと回転させた銃を袖の中に納めた。

「それって」

パンツ

「こんなやつ、とか?」

いつの間にか、小さい方の影の右手には先程のものより一回り大

きな拳銃。右腕は天に振り上げられており、銃口からはわずかに硝煙が漂っている。

やがて腕を下ろし、影が芝居がかつた動作でふつ、と銃口に息を吹きかけたとき、ひらりと宙から舞い降りたものがあった。

それは焼け焦げた穴の空いた、長方形の紙片。朱色の文字と紋様が描かれた……式神の呪符。

「こんなものでボクたちを見張ろうなんて、舐められたものだよねえ」

「そうですね。私はともかく、近に勝とうなんて地球が一度滅んでもまだ早いと思います」

「……いや、それは過大評価すぎるから」

さも当然、という風に相方が言うので、小柄な影は思わず苦笑し、そしてブーツの底で呪符を踏みにじると、紙片は炎を上げ一瞬で燃え尽きて消えた。

「……芸が細かいことで」

ふん、と鼻で笑うと、興味をなくしたのかさつさと歩き始めた影に、もう片方も紙片が消えた場所に目を向けることなく後を追う。二つの影が狭い道を並んで行くと、しばらくして路地を抜けた。

「それにしても、面白い人たちだったね。色々と」

「色々、ですか。具体的にはどこが面白いと思つたんです?」

日差しを黒髪で反射させながら、長身の影 成巳が尋ねる。もう一人、近は金の髪を跳ねさせながら振り向き、笑つた。

「色々は色々だよ。話には聞いてたけど、予想以上に楽しそうだし、いつもよりかなり気分が高揚しているらしく、今にも歌を口ずさみそうな近に、成巳はため息をついた。

「じゃあ、今回は協力するんですね」

「……まあ、ね。借りがあるし、ボクも気に入っちゃつたしね」現実に引き戻されたのか、近はやや面倒そうに応える。

「それに……」

「それに?」

首を傾げた成巳が見たのは、意地の悪い笑みを浮かべた近。彼は右手で銃の形を作ると小さく撃つ真似をして、言った。

「雑魚が調子に乗ると痛い目に合ひつゝて、教えてあげなきゃね」

5 1 惠意（前書き）

お久しぶりです。

というか久しぶりすぎますね。お待ちくださっていた読者の方々、大変申し訳ありませんでした。

無事受験も終わり、少しずつ連載を再開したいと思います。
とはいって、今まで通り超不定期更新です。なるべく一定のペースで
投稿できるように頑張ります。

一年以上のブランクの間に、文章の書き方が変わっていたり、読み
やすいよう改行を増やしていくたりしますので違和感があるかもしれません
が、「ご了承ください」。

長々と失礼しました。これからも拙作「深淵の王」をよろしくお願
いいたします。

三月三十一日の日暮れ、煉賀の屋敷には大勢の人々が集まっていた。

煉賀家では毎月、月の最後の日に本家、分家、情報部などの代表者が集まり、会合を開くのが慣わしである。それは今月も例外ではなく、煉賀当主の絢斗、情報部の揚羽、分家である籌と壬杉の当主、そして美咲と鳴海が、すでに会合の場である煉賀家西の大広間に集まつており、いつもの座席に座っている。また、この後次々にやってくる予定の術師たちを迎えるために大きく開かれた座敷は、普段と違つて寒々しいような印象を見る者に与えていた。

特に、今回は現在進行形で起こつてゐる奇妙な現象を解決するために、協力者である空嶺の当主・術者を招いて行われることになったため、いつも以上に大規模な会合となつてゐる。そして、空嶺の人々の席として、いくつかの座席に普段と色の異なる座布団が置かれていた。

座布団の色は、空、嶺にふさわしい、鮮やかな蒼。……だが、それが何故か美咲にはひどく氣味が悪いように思えて仕方がなかつた。

そして美咲と鳴海を含めた煉賀家の人々の座布団はいつもと同じ深い朱色。なのに、見慣れたはずであるその赤が異質なものに感じられ、どこか言いようのない不安を煽つてゐる。

それが氣のせいではなかつたことを知るのは、もつ少し、先のことであるのだが。

現在の時刻はようやく口が沈もうかとこゝにひりで、夜に行われる会合にはまだ早い時刻にもかかわらず、じつじて当主たちが集まつてゐるのには理由がある。

「 ところのが一週間の調査結果です。総括して申し上げますと、今の時点において“歪み”以外の異変は見受けられませんでした」

それは会合前の調査結果等の報告をするためであり、同時にあおまかに状況確認を行うためであつたはずなのだが、揚羽が報告を終え、当主の前から音もなく退くと同時に声を上げたものがいた。

「これではつきり致しましたな」

分家、篝の当主である。

勝ち誇つたかのような笑みを浮かべ、篝は言葉を続けた。

「初日の不可思議な異形の出現を探知できなかつたことに加え、そ

の原因さえもわからず、ただ毎日の“歪み”の出現場所と時間を調べるだけ。‘協会’、精銳の術師が聞いて呆れますな。たかだか探知術使えるだけの若造を寄越すなど、我らを侮辱しているとしか思えませぬ。そうでしょう?」

同意を求めるようなその問い合わせに、壬杉の当主が大きく頷く。

主語が明示されていない発言。だが、その悪意と戯意を隠そうともしない言葉がだれを指したものなのか、言われずとも理解できてしまうのが嫌だった。

それらは確実に 瞳月綾みすきに對して放たれた言葉であったから。

そしてその本人はこの場にいない。それだけでなく、会合も欠席するとあらかじめ揚羽を通して連絡を受けている。

「つ……」

彼らの発言と態度に憤慨し、思わず口を開きかけた美咲を、とつさに鳴海がその手を掴み制止した。美咲は睨むような目で鳴海を見たが、鳴海はただ彼女を見つめ返し、ただ静かにかぶりを振る。

……わかっている。今下手に綾をかばえば、さうに彼の印象を悪くしてしまうだけでなく、自分も敵視される可能性があることは。しかし、だからといって黙つていられるはずもない。

が、そのことを鳴海に当たつても意味がないのだ。美咲はそつと溜息を吐くとともに無理矢理氣を静め、悔しげに黙り込んだ。

5 2 懐古（前書き）

ぐじゅぐじゅな上にゅうじゅ難産な文章でした。

あとから編集し直すかも知れません……。

「ねえ……、本当に綾と連絡つかないの？」

だが、しばらくして場の空気には耐えられなくなつたのか、美咲が小声で鳴海に話しかけた。幸いと言つていいのか、篠と王杉は本人がいなことをいいことに散々綾への侮蔑と侮辱の言葉を言い続けており、じつらに気付く様子もない。

鳴海は一瞬辺りを見渡し、自分たちに注意が向いていないことを確認してから、声をひそめて言葉を返した。

「……ええ、昨日調査のあとに会つたつきり、電話もメールの返信もありません。揚羽さんも、何故会合に来ないのかまでは聞いてないやうで……。美咲さんの方にも連絡はないんでしょう？」

まあ、何かあつたとしても俺じやなくて美咲さんに連絡するでしょうけど。と、鳴海がやや苦さの滲んだ聲音で続けたことに気付く様子もなく、美咲はただ沈鬱そうに頷く。

その姿に鳴海は気付かれないように静かに溜息をつくと、ふと眉をしかめそのまま何か考え込むように口を開け、腕を組んだ。

やがて視線を美咲に戻し、わずかに逡巡らしきもののあと、ようやく話しかける。

「……やっぱ美咲さん、ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

「……何？」

やう言つ美咲の声は、やはり暗い。

別に今聞くことでもないんですけど、と彼にしては歯切れが悪い前置きをして、鳴海は先程より一層声をひそめた。

「あの、『フミ』って人、知りませんか？」

「え？」

その質問に、美咲はうつむきがちだった顔をいきなり上げて隣に座る少年に向けた。その顔には訝しげな表情が浮かんでおり、この状況に関わりない質問に疑惑を抱いているように鳴海には見えた。

鳴海は突然すぎたかと、慌てて言葉を付け足す。

「すみませんいきなりっ！…………あの、さつき連絡がないっていうのを考えてたときにつ、少し昔のことと思い出して気になつたので……」

「…………昔のことって？」

問い返す美咲の目に浮かんだ驚愕の色を訝しげに思いながらも、暗さが薄れたことにわずかに安心した鳴海は、面白い話じゃないですよ、と前置きしてから口を開いた。

「あの……俺がまだ小学生だった頃 羽斑はいばなに修行で預けられていたときなんですねど、週に一回くらい、なんの前触れもなく現れて一緒に稽古を受けていた奴がいたんです。俺と同い年くらい

で、いつもちよっかいかけてきて……。俺、いつも大人に混じって訓練させられて、年が近い奴なんてほかにいなかつたから、よく話したり試合の真似ごとしたりしてた

言葉を止めた鳴海を、美咲はじつと見つめ、先を促す。

「……それで？」

「…………ある日ソイツが『こなくなつたんです。最初はいつもの気まぐれかと思って気にしてなかつたんです。けど、ひと月たつても、ふた月たつても一度も来なくて。羽斑の家の人はそんな奴知らないって言うし、いつもむこうからやつて来てたから連絡先なんか知らないくて……。名前だつてアイツが自分で『フミ』って名乗つただけで本名かもわからないし……。そのとき初めて、俺はアイツのことなんにも知らないって気付いたんです」

独白に近い、短い文の連なり。だからこそ、そこには幼いまま整理しきれていない感情が垣間見えた。

寂しさ、悲しさ、怒り、親しみ、疑念、思慕、後悔など、さまざまな想いが混ざつて溶けて……きっとそのどれもが、かつて『フミ』に向けられたものだったのだろう。

『フミ』に会いたいと、何故か今になつて鳴海は思つたのだ。

「……それから、連絡は？」

「一度も。しばらくは探してたんですけど、手掛かりもないし、修行に追われていろいろ忙れて行つて……。本当につこむつき、思い出したんです」

「……」

「美咲さん？」

静かに目を閉じた美咲だったが、鳴海が声をかけるとすぐに視線を彼に戻す。

「『フミ』って名前に、心当たりはあるよ」

「！ じゃあ、」

「でも、鳴海の言つてる人とは違うよ。……那人、たぶん男の人だよね？」

「……ええ」

声を出しけた鳴海を制するように言葉で遮つた美咲は、確かめるように問い合わせ、その返事を聞くと小さく呟いた。

「じゃあ、絶対に違うな……。まあ、女性でも違うに決まつてるけど」

それきり黙りこんだ少女に、鳴海はどうしたのかと顔を覗き込むが、先程までとは違う複雑な感情が浮かんでいるように見える。

篝や壬杉の罵声が雑音として場に広がる中、しばし、一人は何も言わなかつた。

5 2 懐古（後書き）

お読みくださいありがとうございます。

今まで通りに1000文字～1500文字前後で1話投稿するのと、一回切りまで書いてまとめて投稿するのって、どちらのほうがいいんでしょうねえ……。

後者は投稿スピードがとんでもないことになるの請け合いですが……。

5 3 衝撃（前書き）

今回の話と次話はあまり納得がいかないので、時間が出来次第書き直す可能性が高いです。
正直意味が分からぬと思いますが、わからなくともあまり問題ありません。

「……その、美咲さんの心当たりって、どなたなんですか？」

やがて、ゆづくじと発された鳴海の問いかけに、美咲は言葉少なに、聞こえてくる雑音にまぎれるような声で答えた。

「鳴海も知ってる人だよ」

「……え？」

思いがけない言葉に、鳴海は思わず声を漏らす。

「……知ってるっていうのはちょっと違うのかな。私も鳴海も、直接会ったことはないから。存在を知ってる、っていうのが近いのかも」

鳴海が何か言うより早く、そう付け足してから美咲は言った。

「……煉賀^{ふみ}綾^{りょう}……絢文の母親で、絢文を生んだ時に「くなつた女性だよ」

「それ、は

その先にどんな言葉が続くはずだったのか、美咲が知ることはなく。

どんな言葉を続けるつもりだったのか、鳴海自身が認識することもなく。

一人の思考は異常な衝撃と乱雑な雑音と歪な感覚に支配された。

聴覚が戻る。

……ひどい耳鳴りと誰かの声がする。

視覚が戻る。

……かすんだ視界に覗き込んでくる影が映る。

感覚が戻る。

……背筋を凍らすような嫌な悪寒が止まない。

「れ（・・）は、予感だ。

実際に何か異変があつたわけではない。先程の衝撃も雑音も何もかも、全てが錯覚だ。

それなのに、そうだと頭では理解しているはずなのに。精神が、魂が、その予感を訴えている。肉体に影響を与えてしまつほどに、本能が叫んでいる。

「ワレルウシナウアブナイダメダナクナルダメダナクナルワレアブナイダメナクナダメダメダメダメ！」

世界に鮮烈な赤色が、閃き

「美咲ちゃん！　鳴海くんつー！」

滅多にない揚羽の動搖混じりの叫びに、一人の思考は一気に現実へと引き戻された。

……突然のことについていかない頭が、どうにかして現状を認識しようとする。

美咲も鳴海も、いつの間にか畳に倒れこむようにしてうずくまっていた。冷や汗でべたついてひどく気持ち悪い。ゆっくりと震える身体を起こして顔を見合わせるも、お互に浮かぶのは困惑の表情のみで、何がどうなったのかまったくわからない。

「……大丈夫、二人とも？」

揚羽の心配そうな声がすぐ傍で聞こえ、ゆっくりと背中をさすら

れる感覚に美咲はそちらに振り向いた。

すると文字通り目と鼻の先に揚羽の顔があり、一瞬ぎょっとしたものの、いつも通りの柔らかな笑みによくやく力が抜けて大きく息を吐く。……徐々に身体の震えも収まってきた。

鳴海も落ち着いたのか、子供のように背をさすられていることに恥ずかしさを感じたようで、揚羽から思い切り視線を外しているのが見える。

今度こそしつかり辺りを見ると、平常通りの篠と王杉が訝しげな顔でこちらをうかがっているのが分かった。

今度の予感を感じて平氣でいられるのかと思っていたところへ、揚羽が美咲と鳴海にだけ聞こえるように耳打ちする。

「今、ね。私たちにはほとんど感じなかつたの

その言葉に、美咲は耳を疑つた。あれほどの強い衝撃的な予感を受け取らないことなどありえないはずなのだ。

「それは、……当主さまも、ですか？」

鳴海のその声を認識した瞬間、反射的に当主へ振り向いていた。続けて鳴海の目も当主に向かう。

答えはわずかな頷きひとつ。だが、それだけで十分だった。

……予感とは本人の意識無意識に關係なく、未来に起つりうる事象を感覚として、あるいは確信として認識するという、呪術師特有の、ある種の予知や予言のようなものである。勘が鋭い、といえば聞こえはいいが、実際はそんな生ぬるいものではない。未来の情報を受け取るということは、それに比例した疲労を負うことになるからだ。

そしてそれは術師としての能力が高ければ高いほど研ぎ澄まされ鮮明になっていき、訓練次第では 先天的な場合もあるが ほんのわずかな違和感や異変でさえ読み取れるようになる。決して全ての物事で感じるわけではない。だが、重大な出来事に関わる予感は確実に、強い衝撃を伴つて、感じる、。

つまり 言つまでもなく煉賀の術師のトップである当主・煉賀絢斗が、あれほどまでに美咲たちが強く感じた予感を感じないことなど、ありえるはずがない。いや……ありえてはならないのだ。

美咲と鳴海だけが予感を感じた。

ありえないことが、起つた。

呪術師の予感は、必ず当たる。

それらの事実が示すのは……。

「……当主わたくし

掠れそうになる瞬間に、一度唾を飲み込んでから美咲はゆっくりと口を開いた。落ち着いたとはいえ今にも震えそうになる声に、改めて過ぎ去った衝撃の大きさを思い知らされる。

「…………

当主と田が命つ。無言で先を促す瞳の奥に、美咲と鳴海をを案じる色が見えた。

一見して何も変わりない様子の当主。その胸の内には、決して表に出ることのない焦燥や動搖が隠されていのだろうかと、思考の片隅で思いつつ、美咲は続けた。

「申し訳ありませんが、少し外に出させて頂けませんでしょうか」

疑問形ではあるが、返事は一つしか求めていない言葉。視線を一度鳴海に遣つて、彼がかすかに頷いたのを確認してから、再び当主を見る。

「な……無礼ですか美咲どのー。聞もなく命令が始まるとこいつにそのようなこと、」

声を上げた壬杉の当主を、絢斗は視線は美咲と合わせたまま手で制した。黙った壬杉に一瞥もくれることなく、ただじつとお互いをうかがつ。

「……行きなさい」

何を感じたのか、とは問わずに、絢斗はそう言った。

「ありがとうございます」

美咲もそれだけを返すと、すっと席を立った。そのすぐ後を、鳴海が追う。

一人が廊下に出て、鳴海が襖を閉じた瞬間。

予感に突き動かされるままに、美咲は駆け出した。

「美咲さんっ！」

驚いたような鳴海の声が聞こえたが、美咲はそのまま足を進める。
……予感から生まれた不安と焦燥が、早く早くと自分を急かす。

明確な目的があるわけでもない。だが、あそこにいてはいけない
気がしたのだ。動かなければならぬ、立ち止まつてはならない、
と。

外で何かが起きると あるいは起きていると あの予感は告げたのだから。

途中で誰かとぶつかりかけたが、それでも足は止まらなかつた。

「つ、失礼っ！」

美咲を追う鳴海は、短くそう告げて美咲が当たりそうになつた人物 空嶺の当主の脇を通り抜ける。

空嶺当主と空嶺の術師の姿を認識はしたもの、歪な予感に根拠のない焦りを覚えているのは鳴海も同様であり、美咲を一人にするわけにはいかず、無礼は承知の上でそのまま走り去つた。

二人と擦れ違つた空嶺の当主と術師の目が、硝子玉のように虚ろであることに気付いたものは、誰もいない。

5 4 予感（後書き）

地の文ばかりで読みにくくてすみません……。

作者もいまいち文が理解できていないので、前話と今回はスルーしてかまいません。

…… それなり物語が一気に動く予定です。

夕闇が広がり、徐々に人の顔も見えづらくなる時刻。

黄昏 たそかれ 『誰そ彼』とはよく言ったものだ、確かにこの薄暗がりの中で相手を判断するのは難しい。

そんな取り留めもないことを意識の片隅で考えながら、鳴海は美咲を追いかける。

煉賀の屋敷を離れて早数分、かなりの速度で走っているにも関わらず、美咲が速度を弱める気配はない。

まだまだ体力に余裕はあるし息も全く乱れてはいないが、このまでは埒が明かないと、鳴海は一気にスピードを上げ、力強くアスファルトを蹴つて

「 美咲さんっ！」

そして間もなく、人のいない商店街を抜けたところで追いつき美咲の腕を掴んだ。

ざりつ、と靴底を削る音とともにそのまま立ち止まつた鳴海に引きずられるようにして、美咲はやつと足を止める。

やがて、美咲がゆっくりと振り返つた。だが、その表情は暗がり

に呑まれて見えず、ただ視線が掴んだ腕に向けられているのを感じる。

わずかな間、鳴海と美咲はお互いの掴み掴まれた腕を見つめた。

どちらからともなく、口を開きかけた、その時。

商店街を含めた道路の所々にある街灯がぶらんと鈍い音を放ち、数回瞬いたあと、その半径数メートルをぼんやりとした光で照らし始めた。

それは鳴海と美咲のすぐ傍にあった街灯も例外ではなく、ちょうどスポットライトが当たるかの様に一人を中心として辺りを照らした。

そのおかげで、先程は見えなかつた美咲の顔がはっきりと見えるようになり、鳴海は息を呑む。

今にも泣きそうな、焦燥、不安、困惑など様々な想いが入り混じつた表情。開きかけていた口をギュッと引きしめ、じわりと浮かんだ涙は今にもこぼれそうだ。

……美咲は、あまり泣かない。喜怒哀楽は激しいが、人に涙を見せるのを嫌う。怒りにしろ悲しみにしろ、人前で泣くことはほとんどない。

それは鳴海の前であつても例外ではなく……だからこそ、鳴海は戸惑つた。まだ泣いていないとはいえ、普段泣かない人が泣いた時の対処法が分かる訳ないのだから当然といえば当然なのが。

ともかく何か言わなければ、鳴海はゆっくりと口を開いた。

「…………落ち着いてください」

とつてに出でてきたのはそんな凡庸で陳腐な言葉だったが、そこでよつやく、ずっと腕に向けられていた美咲の視線が上がり、鳴海を視界に入れた。

掴んだままの腕が微かに震えた気がして、鳴海は努めて平静で、穏やかな口調で繰り返す。

「落ち着いてください。焦つても何も変わりません」

「…………でも」

「…………俺も、正直なところ混乱していく、あの予感が何だったのか、考えるだけで不安になります」

美咲の涙に掠れた声を聞いて、自分の声は震えていないだろうか、と鳴海は思った。

今言つた通り、不安なのは鳴海も同じだ。自分の感じた予感が美咲と同じものかはわからない。だが、少し意識をそちらに向けるだけで、何故、どうして、何が、と疑問ばかりがあふれておかしくなりそうになる。

表面上だけでも落ち着いて見えるのは、虚勢に過ぎない。美咲をあの異様な予感がもたらすかもしない未来から守るといつ、護衛としての責任感と義務感による、虚勢。

虚勢で不安を押し隠して、鳴海は続ける。

「けど、予感に惑わされて今の自分を見失つたら本末転倒です。予感は俺たち術師の道しるべとなるもの。だからと言って、その未来は絶対じゃない」

「……よ」

美咲が小さく何かを呟いた。

「……わかってる。わかってるよ。わかってる、けど……」

言葉が続かないのか、そのまま美咲は黙り込む。伏せられたその顔はやはり、泣きそうである。

5.5 焦燥（後書き）

話がなかなか進まなくてすみません……。

今回と次話はやや鳴海寄りの視点になります。三人称で視点がある
といつのもおかしな話ですが。

ああ、悔しいんだ。と、何故か鳴海はそう感じた。ただ漠然と、根拠もなく。

そういえば、涙を見た数少ない時も、悔し泣きがほとんどだったと思い出す。

鳴海は、静かに問うた。

「……悔しいんですか？」

「え？」

がばり、と勢いよく美咲が顔を上げた。その目は大きく見開かれ、そのせいで溜まっていた涙が一粒だけその頬を伝う。

街灯の光を受けたそれを、綺麗だと、場違いにも思う。

……わずかに考えこむよくな沈黙の後、美咲はぽつりと言つた。

「そつか、私、悔しいんだ……」

ぎゅ、と掴んだ方の美咲の手に力がこもるのが分かつた。

「……あの予感が何なのか分からぬのが、それだけのことを取り乱してしまうことが。当主さま、お義父さんたちに心配をかけて、

氣を遣わせたことが。あと、何より 紗が何も教えてくれないことが、話してくれないことが、……悔しい」

ぱつ、ぱつと漏れ出た声は小さく、耳を澄まさないと聞こえない程度のものだつたが、だからこそそれらの言葉は本心なのだつ、と鳴海は思い 同時に、不快だとも思つ。

それは、美咲がこれだけ気にかけ、心配し、不安に感じているのにも関わらず、連絡ひとつ寄越さない綾に対する怒りから来るものであり。

また、美咲が綾をどこか無条件に信じているらしいことへの疑念から来るものでもあつた。

……一週間前、調査の初日に陽方に言われたことを、鳴海は悩んだ末、その夜に美咲に話していた。

曰く、田向と煉賀絢文は友人だつたといつこと。

曰く、煉賀絢文は六年前に既に死んでいるのだといつこと。
と
曰く、『睦月綾』と名乗るあの男を信じるべきではないといつこと

それらのことを聞いた美咲は、しばらく考え込んでから口を開いた。

『……たとえそうだつたとしても、私は綾を、『彼』を信じるよ。……なんでかな？ 綾は私を絶対に裏切らないし、裏切られたとしても それでもいいって思えるんだ』

淡い笑みを浮かべてそう言つた少女に、鳴海は何も言ひことができなかつた。

……その時、一つだけ美咲に伝えなかつたことがある。

曰く、絢文が死んだとされる日に起つたことを……美咲が忘れ、当主が隠しているということ。

だが、ほほ笑む彼女にそのことを問つてはいけない気がして……。結局、それきりそのことについて誰かに話す機会もなく、また美咲に尋ねる勇気もなく、現在に至つていた。

自分は、信じていいのだろうか、信じていかないのだろうか。いや、信じたいのだろうか、それとも信じたくないのだろうか？

あの男を……睦月綾を、自分はどう思つていいのだろう？

「『ごめん、鳴海。心配掛けたね』

美咲の声に、鳴海は思考に沈み込んでいた意識を現実に引き戻した。

「いいんですよ。美咲さんの心配をするのが俺の役目ですから

「どんな役目よそれ」

美咲が吹き出し、つられて鳴海も笑みを浮かべ、夕暮れにしばし二人の笑い声が広がる。やつと、いつものペースが戻ってきたようだ。

すると突然、あ、と美咲が声を上げた。

「？ どうかしましたか？」

鳴海が不思議そうに尋ねると、美咲は少し頬を赤らめ、落ち着かなさそうに視線を彷徨わせる。

ますます不思議そうな顔を向ける鳴海に、美咲はそっぽを向いたまま言つた。

「あー、あの、その…………そろそろ腕、放してほしいなあ、なんて……」

「つ、すつ、すみません！――」

そう言われてようやく、鳴海はずっと彼女の腕を掴んだままだったことを思い出しつづけ、と音がしそうなほど大慌てで解放すると、勢いよく手を引っ込めたのだった。

「……そこまで慌てなくてもいいじゃない」

と、その時美咲が呟いたのだが、ひどく動搖していた鳴海はそれを聞いておりず、結局その言葉は誰にも伝わらなかつたのは、余談である。

「セヒ、飛び出しちゃったけど……これからどうするか？」

あはは、と乾いた笑いをいじましながらそう言つた美咲に、鳴海は呆れたように肩を落とした。

「考えてなかつたんですか……？」

ため息混じりのその声に、美咲は氣まずげに俯いて頬をかく。

「う……。……だつてさ、さつきまでなんか考へてる余裕なんてなかつたし、ただ急に外に行かないとつて思つて……」

紡ぐ言葉は言い訳にもなつていながら、実際にそうだつたのだから仕方がない。そんな美咲の心中を知つてか知らずか、鳴海は今度こそはつきりとため息をつくと、氣を取り直し正面から美咲に向き合つた。

「……まあいいんですけど。混乱してたのは俺も同じですしね。とりあえず、やることがないなら一度家に戻りませんか？ 予感について、当主様たちと話しあうべきだと思いますし、落ち着いて考えたら、するべれいことが見つかるかもしれませんよ」

「うーん……、やうだね。急に出ていくとか言つて、お義父さんにも迷惑かけただろうし……」

一田帰ろうか、と苦笑して顔を上げた美咲は、ふと違和感を覚え

て辺りを見渡した。

街灯の光の外に見えるものと言えば、夕闇の中に立ち並ぶ他の街灯と、それらに照らされた住宅街の道路。それと、ほとんどの店のシャッターが下り、静寂に包まれた商店街ぐらいのものだ。

「美咲さん？」

何かが足りない、そう感じて考え込んだ美咲を不思議に思ったのか、鳴海が訝しげに声を掛け そこで美咲は気付いた。

道路と商店街。一それらだけしか見えない（・・・・・・・・・・・）のは、おかしいのだと。

「ねえ、鳴海

はい？

「静かすぎない？」

え？」

「……………静かすぎるよ。……………私たち以外、誰もいない」

ばつ、と鳴海は慌てて辺りを見渡した。

道路、商店街の通路、どこを見ても 人がいない。ただ、不気味なまでの静寂が薄闇とともに存在しているだけで……。

今まで気付かなかつたのがおかしこそ、鳴海は無

意識に息をのんだ。

現在の時刻は、煉賀の屋敷を出てからそう時間は経っていないはずだから、せいぜい六時半といったところだろう。

言い方は悪いが少し寂れてきた商店街とはいえ、シャッターが閉まるにはまだいくらか早く、そして道路には学校や仕事帰りの人々が歩いているのが常の時間帯である。人がいないなど、珍しいという類の出来事ではない。

確かに、そんなことがないとは言い切れないが……突発的に家を出て、偶々やつてきた商店街と住宅街に、偶々人がいなかつたそんな偶然があるのだろうか。

「……美咲さん、早く屋敷に戻りましょう。……」には、何かおかしい

……その何かが何なのは、鳴海にも説明できないのだが。

その言葉に美咲が頷くとしたところで、鳴海の視界に何かが映り込んだ。

「……蝶？」

「へ？」

反射的にその何かの名称を呟いた鳴海に、美咲はつられてその視線の先へ振り向いた。

そこにいたのは、ひらひらとどこか不規則に、だが方向性を持つ

て舞う一匹の揚羽蝶。鮮やかな青と黄色が、黒とともにその羽を彩つている。

一人以外の人の姿が見えない中で、それは酷く異様に見えた。が、美咲と鳴海はほぼ同時にあることに思い至り、その感覚は一瞬にして跡型もなく吹き飛ぶ。

「「揚羽さんの、式神?！」」

優雅に空を泳ぐ揚羽蝶 式神はその声に応えるように、一人の周りをゆつたりと旋回した。

5 7 静寂（後書き）

夏休みに入りましたので、少しでも多く更新できたらと思います。

完結までもまだかかると思われますが、どうぞお付き合ってくださいませ。

……呪術師の起源ともいえる、陰陽師と呼ばれた人々が主に使っていたとされるもの、それが式神術である。

紙、人形、土くれなどに術を掛け、生物のように「口」の意のままに操る術。または、存在する靈や妖怪、鬼などを従える術を指し、今もなお多用される、呪術の代表的なもののひとつだと言つても過言ではない。

そして、煉賀家において式神のエキスパートとされるのが、美咲たちの姉的存在である南雲揚羽なぐもあけはその人であり、前者と後者どちらの式神術をも得意としている。そして前者の術で彼女が連絡用にと好んで使うのが、自らの名と同じ揚羽蝶を模した式神なのだ。

とはいって、携帯電話が普及した現在では、連絡用として式神が使用されることは少なくなつており、そのため一人ともとつさに思い出せなかつたのであるのだが……。

「なんで、式神が……？」

呴く美咲の傍らで鳴海が右腕を上げると、蝶はぐるりとその場で一回転した後、静かにその指先に止まった。

鳴海が軽く息を吹きかけると、蝶は一瞬にして式神から元の姿へ一枚の手紙へ形を変える。

『見回りに出ていた術師たちの連絡途絶。至急、屋敷へ帰還されたし。

『見回りに出ていた術師たちの連絡途絶。至急、屋敷へ帰還されたし。

揚羽』

手紙には見覚えのある達筆な字でそう記されており、それが間違いない揚羽から届いたものであることを示している。

急いで書いたのか、具体的なことは書かれておらず、それが余計に事態の緊急さを物語っているようだと思えた。

だが、わざわざ式神を寄越さずとも、緊急ならば携帯で電話かメールをする方がずっと早く連絡がつくし具体的なことも伝えられる。連絡用の式神は数えるほどしか見たことがないうえに、揚羽との連絡は携帯電話するのが常なのだから、むしろそのほうがずっと自然だ。

嫌な感覚を覚えながらも、美咲はスカートのポケットに入れっぱなしになっていた携帯を取り出し、折り畳み式のそれを開いて……すぐに今まで確認していなかつたことを後悔した。

「……圈外……？」

アンテナは一つも立つておらず、画面に表示されているのは無機質な『圈外』の文字。術師という役目柄、街のことに詳しい美咲が知る限り、圈外となる場所は街外であっても片手にも満たず、そ

そもそもこんな街中で「圏外」になるはずもない。

振つてみても、軽く叩いても、一度電源を落としてみても『圏外』の文字は消えず、美咲は自分の中から再び落ち着きが失われていくのが分かつた。

「どうして……」

「……美咲さん、それだけじゃないですよ……」

同じく携帯を開いた鳴海が、押し殺したような声で言つた。

「時間が、おかしいです」

「時間？…………つ？！」

そう言われて携帯の片隅にある時計に目をやつた美咲は、言葉を失う。

九時一分。

煉賀の屋敷を出てから、既に二時間近くが経過していた。

「……なんで？ 大して家から離れてないのに……私たち、一直線にここに来たはずじゃ……？」

茫然と、美咲は辺りを見る。歩きでも十数分でたどり着く、見慣れた近所の商店街。確かにそうであるはずなのに、何度見ても時計

は九時すぎのままだ。

加えて、夜といって差し支えない時刻であるにもかかわらず、辺りは依然薄闇に包まれたままである。……まるで夕方であるかのように。

何故、と疑問ばかりが頭の中を埋め尽くす。しかし、どうしようもないことは美咲にも分かっていた。情報が圧倒的に足りないこの状況で少しばかり考えたところで、何か思いつくわけでもない。

今、美咲たちにできること。それは一刻も早く煉賀の家に帰り、この異常さを報告することだけだ。

「……屋敷に、戻りましょう。できるだけ、早く

「……ええ」

美咲は鳴海と顔を見合させて頷くと、二人同時に足を踏み出し元来た道を走り出した。

あくまで慎重に、周囲を警戒しながら走ること数分。美咲と鳴海は煉賀の屋敷に辿り着いた。

内心安堵しつつも、勢いを殺さぬまま一人は門を通り抜け思わず足を止めた。

急激なブレーキを掛けたために一人の足は地面を削り、ひどい砂埃が舞い上がったが、そんなことを気にしている余裕はない。

門の先に足を踏み入れた瞬間、確かに見えていた屋敷の姿は搔き消え……眼前には朱塗りの鳥居と石段が現れていたのだから。

「…………え？」

「な、ん…………！」

同時に眩くも、周りの光景は変わらない。

山にほど近い縁に囲まれた舗装されていない道に、石畳の参道。その延長戦上にある苔むした石段に、空を覆う所々剥げた朱色の鳥居。

屋敷の中とはかけ離れた、けれど見覚えのある風景。

確かに、屋敷に足を踏み入れたはずだった。だが、眼前に広がっているのは 最近訪れたばかりの、再開と決闘の舞台となつた街外れの古びた神社の入り口。

落ち着け。

思考が追いつかない。パニックを起こしかけている頭を無理矢理鎮めるように、大きく深呼吸。

落ち着け。

冷静になれ。

暗示を掛けるようにそつ心の中で繰り返しつつ、美咲はゆっくりと足元に目をやる。

美咲たちの足元は、先程大きく削つてしまつた砂と土の地面があり、まだうすらと砂埃が残つてゐる。屋敷に入つてすぐの地面は綺麗な石畳であるはずだから、そういう削れるものではない。

つまり、今見えているものは幻覚の類ではなく、実際に自分たちは神社の前にいるのだろう。

くる、と後ろを振り返つてみても、通つたはずの屋敷の門の姿はなかつた。当然のように、街外れの自然の多い光景が見えるだけだ。そして、空。急激な変化に戸惑い最初は気付かなかつたが、明らかに変わつていた。

木々の隙間の向こう、夜闇の中に、煌々と月が浮かんでいた。

歪な夕闇は門をくぐった瞬間に霧散し、それが当然であるように世界は夜の姿を取り戻していた。

雲ひとつない空に輝く満月だけが、辺りを明るく照らしている。木々の落とす濃い影が、ぬらりと妙な重みをもつていて、感じられ、酷く気味が悪い。

先程までの夕闇の光景とは違つ、コントラストを無理矢理強調したような光と影の風景は、絵画に描かれたかのように作り物めいた異常さを孕んでいた。

「……？」

辺りを見渡した時に、ふと、木影とは異なる陰影を視界に捕えた気がして、美咲は眉を寄せた。もう一度、今度は目を凝らして、同じ場所をじつくりと見る。

砂の上？……違つ。

参道？……違つ。

鳥居？……違つ。

石段？…………そーじだ。

黒い影のよつなものが一筋、石段を伝つていた。

「鳴海……あれ」

「…………？」

すつ、と美咲が指し示した先を見て鳴海は目を細める。

そして、それ（・・）を視界に収めた直後　「おおおおつ、と
一陣の風が辺りを吹き抜けた。

風は神社の……石段の先から流れ込み、思わず目を瞑つた美咲は、
次の瞬間にはそれを大きく見開く。

わざかな間に通りすぎた暴風。それは確かに鉄錆に似た匂いを運
び、辺りは一瞬にしてむせ返るよつに濃い匂いに包まれた。

そう、まるで、血のよつな……。

…………さああああああ、と風に揺られた木々の枝葉が擦れて音を
鳴らす。まるで手招くよつに、枝が揺れ動く。

枝とともにその影が動いたことで、影に埋もれていた石段がわざ
かに照らされた。

それ（・・）をはつきりと認識した美咲は、嫌な予感ほどよく当

たる、と心中で呟つひといひかる。

「……、と石段を流れ落ちるひとしづくの影。 その色は

確かに、赤。

赤い紅い液体は、石段の上、本殿がある境内から音もなく次々と流れてくれる。

「……どう思ひ、鳴海」

答えなど分かり切つてゐるが、頭がそれを拒否していた。せめて口先だけでもいいから違つと言つてほしい、そんな現実逃避が思考をよぎる。

しかし、当然の「とくそんな甘い考えは切り捨てられた。

「血、でしょ?」

鳴海はあえてはつきりとそれを口にした。美咲と同じく逃げそうになる思考を、現実に留めるために。事実から目を背けないために。

鉄錆の匂いにか、それともその赤い色に引きずられてか。二人の頭に、十日ほど前の、工事現場での惨状がよみがえった。

あの時に似た空氣に思わず身震いがする。思いだすだけで、緊張で体が強張る。

おそらく、この先にはあの……血の炎と同じか、それ以上の凄惨な光景が広がっているのだろう。

よつやく、屋敷で感じた予感の一部が、今、じりじりではつせつと形を成し、そのことを美咲たちに伝えていた。

「……美咲さん、じりじりますか」

鳴海が、静かに問いかける。考へていふことは同じだらうに、生真面目に問つその様子に、美咲は思わず笑みをこぼす。

きつと、進めば戻れない。だが、今引き返したところで屋敷に帰れるとも思えない。

「行こひ。……進むしか、ないよ」

せつ、と前を見据えて、美咲はそう答えた。

5 9 夜闇（後書き）

区切りが悪かったのでいつもより文章量が多いです。初の一一千字越え。

気をつけてはいますが、誤字脱字等ありましたら報告下されると助かります。

……流れる赤色を避けるようにして石段を登る。

一段、また一段と上がるたびに、赤の見える範囲と鉄の臭いはひどさを増していくように感じる。

下から上の境内が覗けないほどに長い階段を、一人は周囲を確認しながら歩んでいた。

「ねえ鳴海、私たちなんでこんなところに来たのかな？ あのとき、確かに門をくぐったはずなのに……」

その道程の途中でそう言つて、美咲はそつと隣の鳴海に手をやる。石段を登り始めてからずっと無言だった鳴海は、その問いかけに反応して、静かに言葉を紡いだ。

「そうですね……。心当たりがゼロってわけでもないんですけど、どれも今一決定打に欠けるといいますか……」

「あるだけマジだよ。私なんか全然思いつかないし……。これじゃ次期当主失格ね……」

もつとしつかり色々学んでもけば良かつた、と呟く美咲に、鳴海

は口を開く。

「俺には、美咲さん以外の人が次の当主になるなんて考えられません。自信を持つてください」

「あ、ありがと……」

その率直な言葉に、わずかに頬を赤らめて美咲は礼を述べた。

だが、それに、と鳴海は言葉を続ける。

「俺の役目は『次期当主の護衛』ですが、俺が守りたいと思つのは美咲さんだけですか?」

……今度こそ、美咲の顔は誰が見ても、己でもわかるほど真っ赤になつた。

「み、美咲さん?！」

「……鳴海、それって素で言つてるの?」

煙が出そうなほど赤い顔を隠すように俯いて言つた美咲に、鳴海はきょとん、と少し間の抜けた表情で応えた。

「え、酢、ですか?」

「……ああ、うん、気にしないで。…………そうよね、鳴海が意識してそんなこと言つはずないよね…………」

ぶつぶつと何事かを呟く美咲を、不思議そうに鳴海が見つめる。

それに、なんでもない、と返して、美咲は前を向いた。

……何時の間にか、長い石段も半ばを過ぎていて、一筋だけだつた血の跡は、既に一筋、二筋と線を増やし、また、幅を少しづつ広げていた。

不謹慎ではあるものの、先の会話のおかげが、美咲の気分は少し軽くなつていた。

「で、心当たりって？」

改めて問い合わせられ、鳴海は少し思案してから答える。

「まずは、転移術。対象を自分の思うところに移動させる術です。でもこれは制約が多くて、大抵が自分、または自分が触れたものにしか使えません。しかも呪力の消費も大きくて、術師本人だけでも難しいのに、触れてもらえない他人を一人も移動させるなんて、普通に考えてできることじやありません」

ですから、これは却下です。と、鳴海は言った。

「次に、空間接続術。名前の通り、空間と空間を繋ぐ術で、門と呼ばれるものを設置して、それを通り抜けることで別の門へ移動します。転移術と違つて自由に行き先は選べませんが、門さえ作ればあとは呪力を消費することもありません。一方通行のものも多いので、さつきの現象に一番近しいものを引き起させるのはこの術だと思います」

「？ じゃあその、空間接続術ってやつが使われたんじやないの？」

「……この術にも、制約があるんです。術者以外でも発動できますし、慣れれば転移術よりも呪力消費量はずっと少なくてすむ術ですが……ある意味、制約というより必須条件と言つたほうが近いかもしませんね」

む、と美咲は小さく唸り、悩んでから二つ答えた。

「人数制限……じゃないよね、さすがに」

鳴海は、違いますよ、と苦笑。

「簡単なことです。この術は、門を通る者の意思が、空間を移動するという意思がなければ発動しないんです。門は普通作った術者にしか認識できない。そこに門があることを知らずに通つた人々全員が移動したんじゃ意味がないですからね。それにもし、一般の人が通るところに門を作つて、何も知らない人が通つて移動なんにしてしまつたら、パニックなんかじやすまないことになりますし」

「はあ……確かにね……」

「あとは、俺たちが知らない術という可能性ですけど……知らないものを考えることはできませんから。推測の立てようがありません」

「そつか……」

もう着きますよ、と美咲を前に向かせながら鳴海は自分にだけ聞こえる声で呟いた。

「知らない術、
か
」

5 10 推測（後書き）

説明文が多くてすみません……。

でも珍しく地の文が少ない回でした。

嗅覚がぼぼ麻痺し、役に立たなくなつた頃。

美咲と鳴海は、よつやく石段の頂上へと辿り着いた。

境内の入口には、下の物とはまた別の大きな鳥居がそびえたち、空を覆つている。

視線を脇にやれば、数えきらないほどに立ち並ぶ桜の木。花々は今この時のために存在しているのではないかと思つほど、一斉に、惜しげもなく、その全てを花開かせていた。

そして、咲き誇る桜に挟まるようにして、社まで一本の参道が伸びている。

石畳はとこりとこり割れたり欠けたりしているが、十分舗装されていて、歩くのに困るほどの状態ではなかつた。

……以前訪れたときまでは。

水にたゆたう桜は、優しく美しいものであるの。

血溜りに浮かぶ桜の花弁というのは、それだけでこつも、禍々しく見えるものなのか。

ペンキや絵の具をバケツ単位で、ぶちまけても足りないであろうどの、赤い赤い水溜まり。

それが、境内の半ばから石段近くまでを点々と散らされ、あるいはべつたりと地面を染め上げていた。

ただでさえ^{ひどい}その色は、風で散った薄紅の花弁が浮き、余計に強調されて見える。

美咲が、吐き氣を^{ひき}元に手を当てた。

だが、そこにはあるはずのものが見当たらない。これだけの血がここにあるのに、それがないわけがないのに。

その赤を持っていたもの……すなわち、死体が。

違和感を覚えた鳴海は、思わずまじまじと血だまりを見てそして、そのことを心から酷く後悔した。

……死体は、なかつたわけではない。ただ、判りづらかったというだけだったのだ。

切り裂かれた、などという生易しい表現では足りない。細切れにされた（・・・・・）と言つた方が近いかもしれないが、それでもまだ生ぬるい。

たとえ野犬やオオカミに食い散らかされたとしても、もつとまともに原形を保つてゐるだらうこと、鳴海は頭の片隅で思つ。

血だまりの中には、あまりの細かさに視認しづらいほどのセンチ状にされた肉片が沈んでいた。

大きくて一センチあるかないか、小さいモノは半ば液体と化して赤色に溶けているほど。また、所々に骨か、眼球か、はたまたそれ以外の何かはわからないが白っぽい欠片も混じつてゐる。

前に工事現場で見たモノが 不謹慎にも 可愛く思えるほど、凄まじい惨劇の跡。

『炎』ではない。そんなものでは弱すぎる。

『血の海』と云つ表現は、この場にこそ相応しい。

……海の中に、沈んで、赤く染まつた布の塊が見える。一、二、
……三カ所。

つまり、三人分の

「お前たち、何をしている」

その声は、社の方向から聞こえてきた。

二人が反射的に顔を上げると、石畳の通路の先、社の手前に、一つの影が見えた。

声の主らしき人物が一歩一歩に近づくと、ようやく社の影から外れたのか、その姿がはっきりと露わになる。

水のようになめらかな、結い上げた黒髪をそよ風になびかせて。

月明かりを鈍く照り返す、抜き身の刀を右手に提げて。

社を背にして、夜空を背にして、そして、満月を背にして。

睦月綾が、そこに立っていた。

5.11 境内（後書き）

遅くなつて申し訳ありません。スランプに入つてしまつたみたいなので、しばらく書きだめをして推敲しようかと思います……。

章設定ができるようになったので、せっそく使ってみました。

あと、五章が異常に長くなつてしまつていて、途中で一区切りにして、六章を最終章にすることにしました。

今の文量で投稿していくと、最低で五章があと10話、六章が20話くらいになります……。今しばらくお付き合ください。

「綾、」

何かを言いかけ、言葉が続かなかつたのか美咲はそのまま口をつぐんだ。

そんな美咲を僅かに一瞥した綾は、ふ、と軽く息を吐いて、左手に提げていた鞘に刀をあてた。

刀を鞘に納める微かな摩擦音が響き、きん、と鋭い音を立てて、刀身が隠れる。

「……綾、なの？」

ようやく口を開いた美咲に対し、綾は皮肉っぽい微笑を浮かべて言った。

「僕以外の何かに見えるか？」

僅かに首をかしげる動きにあわせて、黒い髪がさらりと揺れる。

……からかいの混じりの返答に、ゆるやかな仕草。

あまりに自然で、なんてことのないその言動。

だが、だからこそ……この場においては、ひどく不自然だった。

忘れてはならない。今美咲たちは 血の海のすぐ傍に立つているのだ。

ゆるい風が、辺りの空氣をかき混ぜる。血の香が混じつた風は桜を散らし、赤の上に薄紅の花弁を落としていく。
ざわざわと音を立てる木の影は、日に地面の上で手招きをするように揺れている。

おぞましこほど美しく禍々しく「ソトラスト」に、眩暈がした。

……どうして、こんな場所で 普段通りに振る舞えるのだろう？

周りの嫌な光景よりも、そのことが、そのことだけが、美咲には恐ろしく感じられた。

「……それで、質問に答えてもらおうか。お前たちは、何故、ここにいて、何をしている？」

再び黙り込んだ美咲と鳴海に、いつもの無表情にもどつた綾が淡々と問いかける。

静寂に、風音と木々のざわめきだけが響く。

そのたびに空氣が搔きあわされ、不快な匂いが花弁とともに宙を漂つていぐ。

……沈黙を破つたのは、鳴海だつた。

「……先に、お前が答えるよ」

「何を？」

絞りだしたかのような声で問つた鳴海に対し、綾はあつさりと聞き返した。

あまりにも淡白な反応に妙に苛立ちがつる。だが、それを押し殺し、鳴海は言葉を変えて先程よりもはつきりとした声音で言つた。
「……他人に何か尋ねるときは、自分のことの方を先に言つべきじゃないのか？」

直後、綾がほんの一瞬だけ微かに目を見開き、唇の端を釣り上げた。

「まあ、一理あるな」

答えた声音にも、僅かな笑みが混じついていたような気がして、美咲は思わず綾の顔を凝視した。だが、そこには能面のような表情があるだけで、笑みの欠片など一片たりともありはしない。

見間違ひ。そんな言葉が脳裏を過つたが、美咲にはそつだとは思えなかつた。

綾の見せた表情と声が、何故かひどく嬉しそうに感じたから。

「ひ、じゃあ、言えよ。お前が何故ここにいて、何をしているのか。…………」の状況はどういうことなのか、説明しろ

「お前に命令された筋合ではない。…………と言ったこといろだが、埒が明かないから正直に答えるとこまつ」

「…………」

「そう睨むな。慌ててもろくな事にはならない、だろ?~」

美咲がそんなことを考へている間にも鳴海と綾の会話は進んでおり、綾は一人の方に近づいてくると……ためらいもなく、血の海に足を踏み入れた。

5 12 違和（後書き）

中途半端ですみません……。

「！？」「

「ちょ、綾！？」「

血飛沫が跳ねる　と思いきや、足を着けた場所から赤い水面が次々と凍りつき、波紋一つ立てる事なく綾はその中央付近まで進んでいく。

パキパキという水分が瞬間的に凍る音と、微かな冷気が辺りに広がつたが、綾が足を止めると同時に氷の浸食も止まり、その足跡だけがまるで氷の道のように残された。

綾がその場で腰を曲げ、何かを拾い上げる。

拾い上げられたもの　それはもとは白かったであろう一枚の羽織だった。そしてその中央に描かれているのは、血に染まつても尚鮮やかな、彼岸花を模した朱色の紋様。

朱は、呪術師の中でも煉賀家にのみ許された色。彼岸花の紋は、煉賀家の家紋。

つまり、この血の海に沈んでいるのは

背筋を氷塊が滑り落ちるような酷い戦慄を覚え、何も言えない美

咲と鳴海を後日に、綾は淡々と同じように赤く染まつた布地を拾い上げていく。

計三枚。その全てに、朱の彼岸花が咲いていた。

「……、大きく斬られているだろう?」

そのうちの一枚を刀を手に持つたまま器用に広げ、血がつくことも構わずに綾は二人に示す。

羽織の左肩から右下へ向けて、ざつくりとした大きな切れ目が見て取れた。

「僕がここに来た時には、煉賀家の術師が三人、既に事切れで倒れていた。この羽織に残つた刀傷がその死因だろうな」

ちら、と綾は一度裂け目に視線をやつてから、三枚ともまとめて血の付いていない石置の上に放る。

「そのままにするのもどうかと思つたから、羽織を脱がして顔に掛けおいたんだが、何があつたのか調べようと死体に背を向けたら……襲われた」

「……何、に」

美咲が震える声を抑えて尋ねた。現状や綾の話から予想はついていたし、できればそうであつて欲しくなかつた。尋ねたいものでもなかつた。

だが、現実から目を逸らすわけにもいかない。だから、敢えて尋

ねた。

「死体に

それが例え、どれほどおぞましい現実であつても。

「馬鹿なことを言つたな。死体が、動くわけないだろ」「ぱつり、と鳴海が言った。認めたくない、とその聲音が物語つて
いる。

だが、綾は残酷なまでにはつきりと否定の言葉を突き付けた。

「いいや、事実だよ。そしてそれを僕が返り討ちにした、……それが僕の知つてゐる顛末だ。納得はできたか？」

できるわけがない、鳴海が拳を震わせながらそう小さく呟いたのが美咲には聞こえた。

綾は聞こえたのか聞こえなかつたのか、眉ひとつ動かさず一人を

見つめている。

やがて、鳴海は身体を微かに震わせながら、ため込んでいたものを吐き出すよし、絶叫するかのように怒鳴った。

「…………たとえ、例えそうだったとしても。…………」いままでの必
要はなかつただろーーー?」

鳴海が指示したのは、足元に広がる赤い海。

そしてその中に沈む、断片の、細切れの、ミンチ状の、液化した死体。

見るも無残な、『人』とは到底呼べぬ代物。脂肪も筋肉も臓腑も骨も脳髄も眼球も、特定できるものなど無いに等しい。

「お前は、何も感じないのか!? 身内を……仲間の肉体を壊すことに、躊躇しなかつたのかよ!!」

その言葉に、ひどく冷めた鋭い視線が、鳴海へと向いた。

「それがどうした」

ひとしづくの感情さえ」知らない、無機質な瞳と、田があつた。

声よりも言葉よりも、その無感動さに、ぞつとした。

凍りついたと錯覚するような空氣の中に、綾の抑揚のない声が響いた。

「相手は死体だ。死体はモノだ。モノを壊すことによって、どうして躊躇う必要がある？ 壊さなければこちらが殺される。生きるためなら当然のことだろ？」

綾が鳴海から田を外すと同時に、冷たい歪な感覚は霧散する。

「……」そこに戸惑つたような、悲しそうな、なんとも言えない表情をしている美咲に気付いたのか、綾は小さなため息をついた。

その様子は、先程の不気味なまでの無機質さと違い、無表情の中に呆れや困惑といった感情がありありと透けて見える。

美咲はその変わりように今度は別の意味で戸惑つたのだが、綾にはどう見えたのかもう一度ため息をついてから口を開いた。

「あのな、説明不足だつたかもしれないが、僕だつて何も好き好んでここまでやつたわけじゃない。言い訳のように聞こえるかもしれないが、仕方なくだつたんだ」

「…………」

美咲が聞くと、聞いても気持ちの良いものじゃないぞ、と前置き

して、綾は刀を持っていない右手を上げる。

「死体が襲ってきたとき、僕は真っ先に腕を切り落とした。呪術を使われそうになつたから、呪文が言えないように喉をつぶした。動けないよう足を切り飛ばした。それを全ての死体にやつた」

刀を鞘^{ササ}と右手に当て、切る真似をした。記憶を辿るよう、喉、足にも刀を当ててなげる。

「終わったと思ったら、切り離した腕と足が別々に攻撃してきた。動けないはずの胴体も飛びついて噛みつこうとしてきた。指と腕を切り離したらそれらも個別に襲ってきた」

「う……」

想像したのか、美咲が顔をしかめた。

「切り離すんじゃ埒^リが明かないと思つたんでな、死体を全て凍らせた」

綾は手のひらに拳ほどの氷を出現させて、息をのんだ美咲に見えやすいように前に突き出す。

「中の水分が凍つた物は壊れやすくなるだろ？ それを利用して凍らせてから破壊した。それが散らばつてから気温で溶けて……今の状態になつた」

風が動いたと思った瞬間、パンつ、と氷が碎け散り、辺りに散らばつた。小さな氷の破片は、やがて空氣や地面の温度で溶けだし消えていく。

流石にここまでやつたら動かないみたいだな、と綾は呟いた。

「……普通なら、こんなことしなくていいんだ。普通の呪術師なら、な」

そう言って腕を下ろした綾はぐるりと美咲たちに背を向けると、赤い氷の道を辿るように歩き始めた。

やがて血だまりから出ると、そのまま足を止める」となく社へと進んでいく。

綾の姿が遠のき、その背が大分小さくなつたころ、よつやく美咲は我に返り、慌てて声を掛けた。

「ちよ、綾、どう……」

「僕は少し」と調べる。お前たちは早く帰れ」

行くの、と美咲が続けるより早く、綾はその言葉を遮り答えた。

その間にも綾は遠ざかり、その足音がやけに大きく響く。

だが、あまりに淡々とした綾の態度に釈然としない気がして、美咲はまだ動けずにいた。

「……早く帰らなくていいのか。連絡があつたんだろう?」

動く様子が感じられないのにしびれを切らしたのか、綾が一瞬だけ足を止めて振り返る。

すぐにまた綾は背を向けてしまつたが、そう言われて揚羽からの連絡のことを思いだした美咲は、慌てて駆け出そうとして

ギィイイイインッ！

鈍いような、鋭いような嫌な音に、反射的にそちらに振り向く。

その先にあつたのは

綾に対し、『椿』を振り下ろした鳴海の姿だった。

「……何の真似だ」

刀の鞘で『椿』の大振りの刃を受け止めた綾が、そのままの状態で口を開いた。

直後、互いを弾くように刀が再び動き、鳴海は一歩大きく下がると、美咲を背にして綾に太刀の切つ先を向けた。……まるで美咲を綾から庇つかのようだ。

「なつ……なんの鳴海？！　自分が誰に何したか、わかってる？」

「……そんな」と、わかっていますよ。美咲さん

美咲の叫びに淡々とした声で返すと、鳴海はギッ、と綾を睨んだ。

「何の真似？　それは俺の台詞だ。

お前、何をしていた？」

「……たつた今、その質問には答えたはずだが。その年で耳が遠いなんて、残念だな」

緊迫した空気が漂う中、普段通りの無表情で、真剣なのかそうでないのかいまいち分かりづらい様子で言つ綾に、鳴海は無意識に刀を握る力を強め、ややきつこ口調で尋ねる。

「違う! その前、……」「この神社に来る前の話だ!」

神社に来た後のこととは語られたが、その前の行動も、ここに来た動機も、一切話には上っていない。

そう吐き捨てるよつて言つて、鳴海はわずかに震える太刀を力で抑えつける。

「……答える。どいで、何をしていたんだ? そして何故、^{じい}神社に来た? どうして俺達に帰るよう^に連絡があつたことを知っている?」

引き下がる様子のない鳴海に対し、綾は相変わらずの態度で応えた。

「それを、僕がお前^に言つ必要はない

「……俺^には言えない、の間違^{いじや}ないのか?」

低く唸るような声。美咲は田を見開いて鳴海を見た。

肩越しに見える表情は、とてもじゃないが「冗談を言っているようには見えず……だが、そのせいで余計に今の台詞が美咲にはタチの悪い冗談に思えてならなかつた。

「どうこう、こと？」

「考えてみてください、美咲さん」

呆然と呟いた声が聞こえたのか、鳴海は綾から田を離さず、静かに言葉を紡いだ。

「あいつは風を操れます。俺たちが使っている程度の連絡用の式神なら、壊すくらい訳もないでしょう。それに……あいつはさつき、刀を抜き身で持っていましたよね。

一人で行動しているなら、誰も見ていないなら、いくらでも換えが利く氷の剣の方が使い勝手がいいはずなのに。自分の正体を隠している相手が傍にいないなら」

綾の正体……能力を隠している相手。それは例えば、美咲たち以外の煉賀の術師のような

つまり、と一呼吸置いて。

「見回りの人たちと連絡を取れなくしたのも、……この人たちを殺したのも、お前じゃないのかって言つてるんだよ！」

綾は答えない。

ただ、静かに目を細めた。

そんな綾の様子に、強く眉をしかめた鳴海が口を開いた。
「…………もしその通りだとして、お前はどうするんだ？」

「…………え？」

思つてもいなかつた言葉を返され、鳴海が言葉に詰まる。

だが、追い打ちをかけるかのように綾は続けた。

「僕を殺すか？ それとも痛めつけて尋問するか、当主に引き渡す
か？ ……何も考えていないんだろ？」

無言。…………しかしそれは肯定に等しかつた。

今ここで綾を殺したら、情報が何も引き出せなくなる。しかし尋問の技術など鳴海は知らないし、当主に引き渡すにしても一度屋敷に帰らなければならぬ。だが、妙な移動の術がある限りそう簡単に戻れるとは思えない上に、その術について綾に口を割らせることも至難の技だらう。巧妙にごまかされてしまふのは目に見えている。

……どの方法も、現状を動かす決定打になりえない。そのことに鳴海は気付いてしまった。

「図星か」

「…………甘いんだよ、お前は。本当に甘過ぎる。そんな風にしてたら

…………大切なものを失うぞ」

ぴくつ、と一瞬鳴海の身体が跳ねた。それを見て、綾は薄く笑む。

「まあ…………失つてからじや遅いけどな」

それは、どこか歪な冷笑。この世の全てを嘲るような…………痛ましいほどに酷く冷艶な微笑。

瞬間、綾の纏う気配が爆発的に辺りを侵蝕した。

…………同時に、気温が異常に下がったような錯覚が鳴海と美咲を襲う。

氷点下などとこつ表現では生ぬるい。例えるなら、そう 絶対零度。

吐息まで凍てつくような気配が、透き通った氷のような世界が、

眼前を覆つて

それら全てを振り払うかのように、或いは断ち切るかのように叫びながら、鳴海は再び綾に躍り懸かつた。

響くのは、どこか悲鳴に似たかすれた叫び声。

次いで聞こえる、金属の奏でる不快な音。

風音と金属音の調べに合わせて踊るような、無数の剣戟 その光景から目を逸らすことも出来ずに、美咲はただ立ち廻っていた。

何が起っているのか分からぬ。

いや、分かつてはいる。ただ自分の頭が認識するのを拒否しているだけだ。

だが認めようが認めまいが状況は次々と変わっていき、頭の一部がまるで別世界の出来事のように淡々と、目の前で起きていることを美咲に伝えてくる。

……絶叫が途切れた直後、爆音とともに鳴海は視界から消え去り、次にその姿が見えたのは綾の背後で 気付いた時には既に大太刀と刀がぶつかり合い耳障りな音を立てていた。

だが刀どうしの擦れ合つ妙にカン高い金属の悲鳴よりも、意識が傾いたのは駆け出した鳴海の姿が消える前に聞こえた微かな呟き。

『 水行五式・波走。火行五式・炸激』

それらは呪術の一種である五行の内でも特殊な部類に属する、第五式の呪言だつた。

呪術の大半は、外に影響を与えるものである。しかし、五行第五式は術者本人に対し影響をもたらす 身体強化の術。

水行五式は機動力、動体視力、反射神経、回避能力などを含む速度の強化。

火行五式は腕力、握力、脚力などの筋力……つまり力全般の強化。そしてその効力を示すかのように、鳴海が飛び出す瞬間に踏み込んだであろう地面が大きく削っていた。ただのひと踏みで参道の石畳ごと地面を一メートル近く蹴り飛ばすなど、生身の人間にできるものではない。

先の爆音は土が抉られた際に発されたものだつたのだと、美咲は今更ながらに思う。それなりに離れた場所で音を拾つたはずなのに、まだ耳の奥でじん、と反響しているような気さえする。

鳴海の動きが速いのは、ともに任務をこなしてきた美咲にとつて十分に理解し尽くしていることだつたが、ここまで尋常でない動きを見たことが今までにあつただろうか。

術の力を最大限に利用した鳴海の動きは風を切り裂き、遠距離から幾度も綾を強襲する。そしてその度に、金属の打ち合ひ音が響く。

……そのとき、美咲はあることに気付いた。

「

」

遠目に見える鳴海の口元が、僅かに動いている。

金属音と風音と、鳴海が地面を蹴る音のせいか、その声は美咲の元まで届かない。読唇術の心得のない美咲に、鳴海が口にしているであろう言葉は読み取れない。だから、彼の呟きの意味を彼女が理解することはできない はずだった。

鳴海の身体が、薄く燐光を纏い始めたのを見るまでは。

「つ、だめ つ――！」

それを認識した瞬間、叫んでいた。

……身体強化系は同じ術を同時に複数使うことができないが、別の術であれば幾つでも重ねることができるのが最大の利点と言えるだろう。それだけを聞くと利便性の高い術に思えるが、その代わりに非常に大きな欠点も存在する。

それは、反動。普段以上の活動を身体に強いているのだから起こつて当然のものだが、これがかなりの体力や集中力などを奪つていく。五行の術一つぐらいならばまだ大したことはなく、術が切れた後の軽い疲労感程度で済むのだが……複数の術を使用していた場合、術一つにつき、反動、は倍掛けとなるのだ。

加えて、その反動の大きさは術によつて異なり……。酷いものでは術が切れた瞬間に身体が軋み、立つことはおろかまともに動けなくなつてしまつ。

……そして今、鳴海が使おうとしているのは、術効果は大きいが‘反動’もそれ以上に強力な 筋肉のリミッターを解除する術の一つだ。

見間違ひではない。鳴海を取り巻く燐光がその何よりの証拠だつた。

普段の鳴海なら、‘反動’が身体に与える影響を考え、複数の術は絶対に使わない。リミッタ解除の術など言語道断だ。しかし現在、鳴海は五行第五式の術を重ねていて、術の前触れである薄い光を纏つていてる。

確實に、今の鳴海は冷静さを失つていた。速さ任せで無駄に広範囲を動いているのもそうだし、何度も聞こえる嫌な金属音は、その太刀に強すぎる力が加えられていることを示している。先の美咲の叫び声さえ、彼には届いていないようだつた。

このまま無茶な動きをしていれば、術の反動も相まって身体を痛める、いや、壊してしまつに違ひない。

だが、そんな美咲の想いとは裏腹に、視界の端で一際強く燐光が煌めいて、

術が完成し、鳴海の姿が搔き消えた。

5 16 燐光（後書き）

地の文ばかりですみません……。
まだ五章は続きます。

そう思つた時には既に大太刀が振るわれ、綾がそれをかわしていった。

その光景に、前にこの神社で綾と鳴海が行つた試合が少しだけ重なる。

違うのはその速さ。そして、あの時は最後まで刀を抜かなかつた綾が、抜き身で相対しているということ。

綾の位置は彼が立ち止まつた場所からほとんど動いていない。主に腕を含めた上半身だけが残像もなく刀を振るい、時折攻撃を受け流すために緩やかに全身が動く。

鳴海は動きは残像として視界に映り込むだけで、ほとんど見えていないに等しかつた。地を踏む音などと共にその姿を捉えたとしても、瞬きの間に移動してしまう。

彼らの動きはバラバラではあるが拮抗しており、どこか整然とした美しい舞のようだ。

弾いて、受けて、流して、躱して、振るつて、擦れて、掠めて、また弾いて。そんな行為が、もうどれだけ繰り返されただろうか。

「止めなきや……」

美咲は一人を見据えたまま、太腿に巻いた呪符入れに手を伸ばした。

止めなければ。このままでは取り返しがつかないことになる。

止めてどうすればいいのかはわからない。だが、放つておけば鳴海は綾を殺すまで止まらないだろう。

このまま均衡が保たれたとしても、術の反動でじきに鳴海の身体は限界を迎える。切り合いの途中で限界が来たら、綾にその気がなくとも間違いないく彼の刃は鳴海を切り裂いてしまう。

それだけ一人の斬撃は鋭く、強く、速い。

止めたとしても、おそらく現状は何も変わらない。例え落ち着いても鳴海は綾を睨むだろうし、綾が冷ややかな笑みを浮かべるのも目に浮かぶ。

「甘い」と綾に嘲笑されるだろう。

「どうして止めた」と鳴海に激怒されるかもしれない。

しかし、美咲はこれ以上見たくなかつたのだ。綾と鳴海のこんな殺し合いのような、闘いを。

……鳴海は綾が嘘を吐いていると言つた。だがそんな証拠はどこにもない。もちろん、嘘を吐いていないという証拠もない。

だが鳴海に問い合わせられたとき、綾は否定しなかつたが 肯定もしなかつたのだ。

綾は何かを隠している。それは間違いない。けれど、それは嘘を吐いていることと必ずしも同じにはならない。

なら、もう一度話を聞けば少しは何か変わるかもしれない。変わらなくても、今の状況よりはずつといいはずだ。

美咲は呪符入れを探り、一枚の呪符を取り出した。

符に書かれているのは《束縛》の術。対象の動きを封じるという、効果は単純だが強力な術だ。

右手で眼前にかざし呪力を流し込んでいく。呪符が淡い光を帯びたところで、狙いを定めた。

チャンスは一度きり。それも二人同時。失敗すれば警戒され、術を掛ける隙はなくなるだろう。

綾はともかく、鳴海の姿はやはりまともに認識できない。つまり、鳴海に掛けるのは完全に勘に頼るしかない。

それでも止めると決めたからには、やる。

「……土行六式・縛

言いかけた時、微かに綾と田があつた気がした。

その瞬間に美咲は思い出した。……綾には呪術抵抗が、ない。

呪術への抵抗力がない相手に呪術を掛けたら、どうなつてしまつんだろう？

ほんの一瞬生じた迷い。術を発動させる直前の僅かな躊躇い。

「間にあつたつ……！」

そのとき、呪符を持っていた手を突然誰かに掴まれ、発動寸前だつた術がかき消された。

驚愕し目を見開いた美咲がその相手を認識するよりも早く、掴まれた腕をそのまま引かれて

一枚の呪符だけを残し、美咲の姿は神社から消えた。

5 18 少年（前書き）

今回、最後に試しでちょっとした挿し絵を入れています。「イメージが壊れたら嫌だ」「作者の絵なんか見たくない」などという方は挿し絵機能をOFFにしてご覧ください。

「」無事で、良かった……！」

驚愕から回復した美咲が最初に認識したもの。それは、美咲の右手を繋るように握る 黒髪の少年の今にも泣き出しそうな顔だった。

瞬時に警戒し身を固くする。が、美咲は相手が見覚えのある人物であることに気付き、困惑した。

「此方くん……？！ どうしてあなたが！」

問いかけた美咲に、少年 空嶺此方は一瞬きょとん、としたあと憮然とした表情で答える。

「どうしてって……貴女を、美咲さんを助けるためですよー！」

「助け、る？」

その言葉に、妙な違和感を覚えた。

「そりです！」

力強く頷いてから此方は左手で美咲の手を握り直し、安心したかのように大きく息を吐く。

逆の手は涙をじまかすためなのか田元をじすり、安堵からか若干興奮したような様子で、此方はやや早口ぞみに言葉を紡いだ。

「本当に、間に合つて良かった。慌てていたので上手く神社に繋がるか不安だったんですけど、ちょうど美咲さんの真横に出れましたし 無事に脱出できた」

「脱出……？」

そこでよつやく、美咲は自らの居る場所が先程までと大きく異なつていることに気付いた。

赤色の広がる石畳は掘り返されて穴ぼこだらけの地面と土の山に。

境内を囲う木々たちは白く薄い鉄板の壁に。

桜の樹は組み上げ途中の鉄骨に。

奥に見えた古びた社は青いビールが掛かった木材置き場に。

そして何より、空は煌々と輝く月を消し去り タ焼けが薄闇へと沈む世界へ姿を変えていた。

綾と鳴海の姿はなく、剣戟の音も聞こえず、血の香さえしない。

けれど、確實に見覚えのある場所。なぜなら、じじで美咲は“歪み”を封じたのだから。

「そうだ、ここは 一週間と少し前の夜、黒い龍の異形と戦った工事現場だ。」

「なんで……さつきまで確かに神社にいたはず。……それに、また夕暮れ？」

美咲は僅かな橙色に照らされた光景に、眉をひそめる。

既に血も、死体も……惨劇の痕跡は全てなくなつてはいるものの、ぼんやりとあの時の光景が 人体で描かれた炎が脳裏に浮かんだ。

そしてそれに重なる、赤く染まつた布の沈む血の海。

「つ、そうだ！ 此方くん、二人は……鳴海たちはどう？？」

慌てて尋ねた美咲を訝しむように、此方は首をかしげた。

「鳴海さんですか？」

「…………」
「…………え？」

「今この子は、何を言った？」

「だつて、ボクの目的は美咲さんを助けることだけでしたから。他の方が何をしているかはどうでもいいことですし」

本当に無事でよかったです。

此方はそう続けて、微笑んだ。

それはつい先ほど、鳴海たちの剣戟を殺し合ひと認識した上で、『どうでもいい』と切り捨てたとは思えないような、とても嬉しそうな笑みで。

無意識に震える声を抑えて、美咲は再び問い合わせる。

「ねえ……助けるって、何から？」

少年は、それが至極当然であるかのように、笑みを湛えたまま言った。

「そんなの、人殺しの睦月綾からに決まつていいじゃないですか」

言い表せない悪寒を感じて、美咲が咄嗟に握られた手を振りほどこうとした瞬間 指が食い込むほどの力で手首が掴まれた。

激痛に、思わず顔がゆがむ。

「ねえ、美咲さん」

痛みから洩れそうになる声を噛み殺し、美咲は此方に視線を遣つた。

此方は先程から寸分の狂いもないままの表情で、ゆっくりと口を開く。

「……ついて来て、もらえますか？」

ぎり、と音がしそうなほど強く、少年の指に力がこもった。

♪.1155119—2156♪

5 18 少年（後書き）

文章があまり気に入つてないので、後から直すかもしません。挿し絵を含めて、おかしい部分はスルーして下さると助かります……。

「 ああ、 いひらです」

「 う、 」

そのまま、此方は美咲の肯定の言葉も頷きも待たずにして、掴んだままの腕を引いて工事現場の出入口へと歩み始めた。

工事のために凹凸になつている地面に美咲が躊躇そうになつても気にもとめず、半ば引きずるよつたな状態になつても此方は彼女に一瞥もくれない。

やがて黄色のテープで封鎖された出入口に辿り着いた此方は、あっせりとテープの端を切つて工事現場の外に足を踏み出した。

足をもつれさせながら強制的にその後に続いた美咲は、ふと後ろを振り返り……見てしまった。

その背後で、切り口からテープが黒く燃え上がつた光景を。

雑音と砂嵐が、美咲の頭を走り抜ける。

ノイズで音が溢れた、白黒の荒れた視界。
どこかで黒い火が踊っている。

何か、否、誰かが黒い炎に灼かれている……？

前触れもなく、ノイズが消える。

美咲は、そのノイズの合間に確かに何かを見た。いや、思い出していた。

だがその“何か”だけでなく、“何かを見たこと”そのものの記憶が、瞬きの間に彼女のの中から消失し

数秒後には、雑音が聞こえたことすら忘れていた。

美咲の手を引きながら、此方が道路を進んでいく。

一定の速度で歩み続ける此方に、舗装された場所に出てようやく体勢を立て直した美咲は、手首の激痛を押し殺して言った。

「……待つて、此方くんつ！」

直後、ピタリ、と此方が動きを止める。まるで電源を切ったかのような、不自然な止まり方だった。

ぐるりと首だけで振り向いた少年は、不思議そうに尋ねる。

「どうかしましたか、美咲さん？」

やはり、その顔は笑みで彩られていて。

「……どうして、行くの？」

美咲は、自分の声が震えているのが分かった。

「当主さまのところです」

答えは意外にもあっさりと返ってきた。だが、その返答に違和感を覚え、思わず尋ねる。

「え？ でも空領の当主さまは、会議のために煉賀の屋敷に居るはずじゃ……？ いつもは屋敷と反対方……」

「当主さまのところです」

「、と美咲が続けるよりも早く、此方は同じ台詞を繰り返した。声の大きさも調子も抑揚も、先程と一切変わらぬままで。

機械が同じパターンを繰り返しているような無機質さが酷く不気味で、言葉を詰まらせる。

黙ったことに満足したのか、此方は身体ごと振り返り、両手で美咲の手を掴んだ。

「質問は以上でよろしいですか？ よろしいですね？」

そして、疑問形でありながらも有無を言わせない口調で、たたみ

掛けようつてそう言つて此方は笑みを深めた。

そこで初めて、少年と田が会つ。

「では参りましょ」

その瞳は、ひどく虚ろだつた。

「うーん、それは困るんですよねえ」

突如、ややハスキーな、良く通る声が聞こえた。それと同時に路地の暗がりから現れる、一つの影。

その瞬間、此方の表情が消えた。

直後、美咲から手を離したかと思つと、影に向けて此方は両腕を大きく振りかぶり 振り下ろす。

少年の腕の動きに従つて、《何か》が放たれた。

その《何か》は過たず、影に接触し 音もなくそれをハつ裂きにする。

「え……」

思わず洩れた声を自分でも認識しないまま、美咲はただ茫然とする光景を見ていた。

切り裂かれた影がばらけて地面に落ちる。と同時に僅かに発光した。

……そしてその光が収まった時、そこには細切れになつた紙片が残されていた。

原型をなくし、風に飛ばされかけたそのひと欠片を、何時の間にか現れた人物が拾い上げる。

「ふう……酷いですね。いきなり攻撃を仕掛けてくるなんて」

そう呴いた声は、先に聞こえた声と同じ人のもので。

そこにいたのは、すらりとした体躯を持つ黒髪黒目の中年の青年
いや、女性だった。

「成巳さん……」

「どうも、美咲さん。一週間ぶりですね」

なれば無意識にその名を呼んだ美咲に、ひらひらと片手を振り、
彼女 成宮成巳は微笑んだ。

拾い上げた紙片をしばらく眺めた成巳は、不意に興味を無くしたかのように紙片を捨てた。

すぐに紙切れは風に流れされ、視界から消える。

それを田で追うこともなく、穏やかな笑みを湛えたまま成巳は此方へと視線を向けた。

黒いシャツに黒いコートに黒いズボンと、相も変わらず黒ばかりの成巳の姿は、夕闇の中でもんやつとびにか霞んで、輪郭が曖昧な影のように見える。

「此方くんもお久しぶり、と言いたいところですが……そんな敵意の籠もつた目で見るのは止めて頂けませんか？ 別に害を為しに来たわけではないですから」

「何をぬけぬけと。白々しいですよ、人殺しの仲間のくせに」

表情のない能面のよくな顔をした此方が、忌々しい、といった口ぶりで吐き捨てる。

「仲間つて……」

「たぶん、睦円さんの協力者のことを探しているんじゃないねえ」

茫然とした弦きに言葉を返され、美咲がぎょつ、として振り返る

と、真後ろに成巳の姿があった。

「失礼」

「さや……っ…！」

次の瞬間、成巳は美咲を抱えて後方へ大きく飛んだ。

その距離、およそ一十メートル。

直後、一瞬前まで美咲たちがいた場所の地面が大きく抉られる。

「おや、危ないですね。美咲さんが怪我をしたらどうするんですか」

「い」心配なく。そんなことはあり得ませんので」

おびけたように言った成巳に、此方が淡々と返した。その顔には何の感情も浮かんではおらず、少し前までは壊れたように笑っていたといふのに、今はまるで表情そのものが壊れてしまったかのようだ。

成巳は此方から田を離さずに、抱えていた美咲を下ろす。

少しぶらつきながらも無事に地面に降り立った美咲は、困惑した顔で黒衣の女性と此方に交互に田を遣つた。

そんな美咲に、微かな苦笑を向けてから成巳は此方に向き直る。

……まるで美咲を庇うかのように、彼女に背を向けて。

「人殺しの仲間、といつのは語弊がありますね」

成巳の表情は、美咲の位置からは見えない。だが、その聲音は「私たちの中に、人を殺さず生きてきたなんていう高尚な人物はいませんから」

迷子の子供のように寂しげで、そして悲しげで。

「そうですか」

けれども、此方は何の感慨も見せず、

「……でも、そんなのどうでもいいんです。僕は美咲さんを連れまのところに連れて行かなきゃいけないんですよ」

どうでもいいと切り捨てて、

「邪魔しないでもらえますか」

こちらに 美咲に向けて手を伸ばした。

「行きましょう、美咲さん」

ぎょろり、と口以外微動だにしていなかつた此方の顔の中で目が動いて、美咲を見やる。

「ひつ」

その目がまるで昆虫か何かのもののように見えて、美咲は思わず

引きついた声を上げた。

成巳が静かに動いて美咲と此方の間に立ち、その視線を遮る。そのまま真っ直ぐ此方を見て、欠片も動じることなく成巳は口を開いた。

「……わざも言いましたけど、それは困るんですよ。美咲さんを……いえ、此方くんも、その当主とやらのところに行ってしまつとしても困る」

だから、と彼女は微笑み、

「邪魔させてもらいます」

「一メートル近い巨大な鉄扇。見るからに重そうなそれを、成

巳は左手で緩やかに構える。

「な、成巳さん……？」

「美咲さん、申し訳ないのですがそこから動かないでくださいね」

声を掛けた美咲を見ずに、成巳は鉄扇の先を此方に向けた。

「動いたら……命の保証はできませんから」

成巳の気配が、変わった。

穏やかさは鳴りをひそめ、静かでいて、威圧感を覚えさせる厳かな雰囲気が辺りへ広がる。

その表情こそ変わっていないが……きっと笑っているけれど、少しも心から笑っていない。

……怖い、と美咲は思った。

それは純粹な恐怖。絶対零度の死を感じさせる綾の気配とは異なる、ただそこに在るだけで他者を圧倒する、恐怖感。

美咲が彼女の気配に気圧されて言葉を紡げないでいる間に、成巳は音もなく、此方との距離を詰め始めた。

ゆづくつと歩を進める成巳を警戒してか、此方が再び腕を振るい『何か』を放つ。

だが、それは鉄扇によつてはじかれ、成巳は何事もなかつたかのように此方に近づいていった。

十五メートル、十メートル。そして残り五メートルになったところで、彼女は笑みを消して、

瞬きの間に此方の背後に回ると、ためらいなく扇を振るつた。

5 20 畏怖（後書き）

30日中に更新できなかつた……。

今年の更新はこれで最後になります。しばらく定期更新を頑張つてみましたか、また来年からは不定期更新になりそうです……。

相変わらず話がなかなか進みませんが、これからも「深淵の王」をよろしくお願ひします。

では、よいお年を。

……うまく行けば、来年中に完結できるかもしません。早くても夏、遅くとも初冬には……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5471c/>

深淵の王

2011年9月9日16時13分発行